

うち
野球部の地味子
CG
ノベル
マネちゃん
～汚いプレイでもなんでもしてくれるってマ？～


うち
野球部の地味子
CG
ノベル
マネちゃん
~汚いプレイでもなんでもしてくれるってマ?~

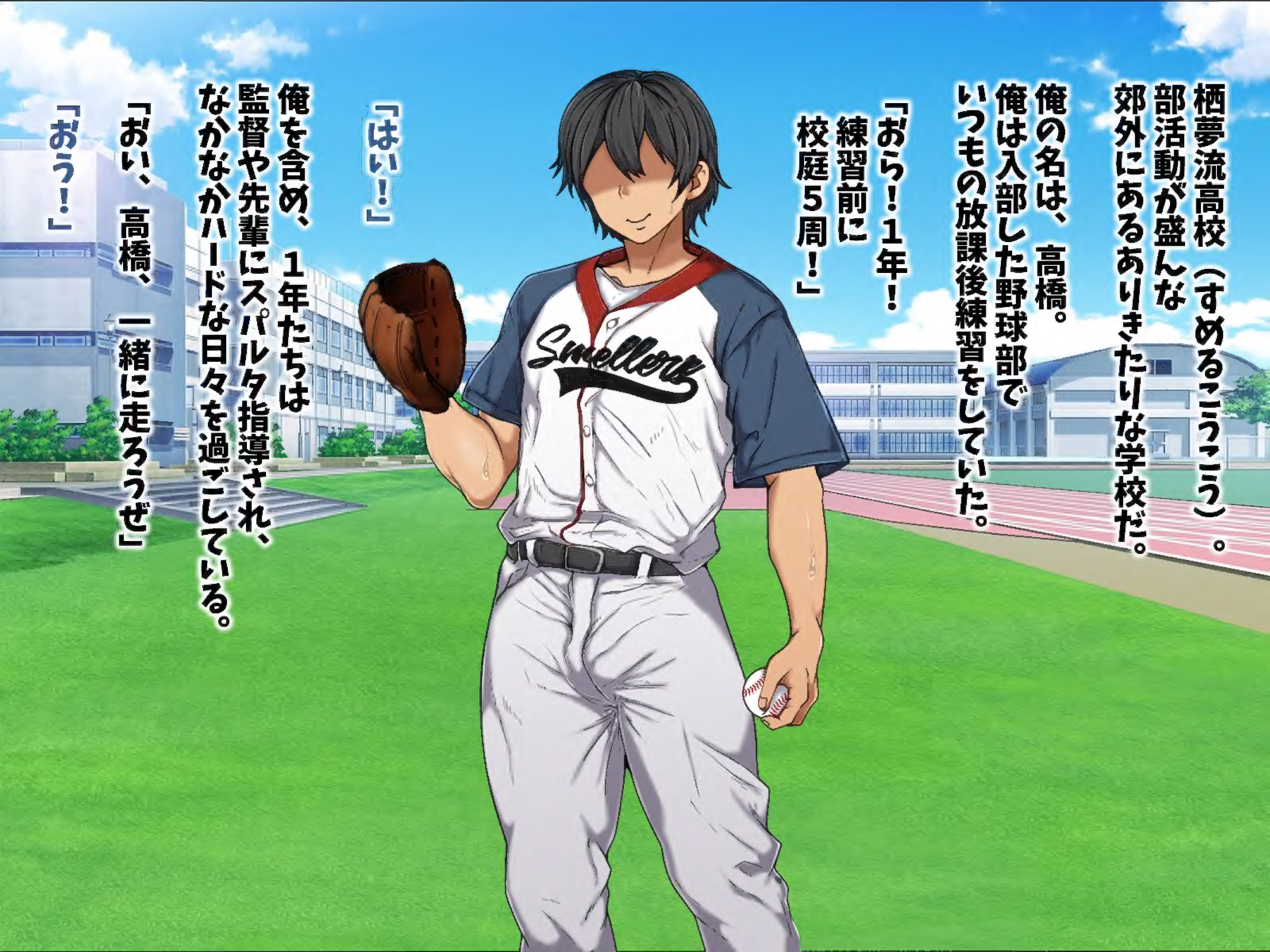


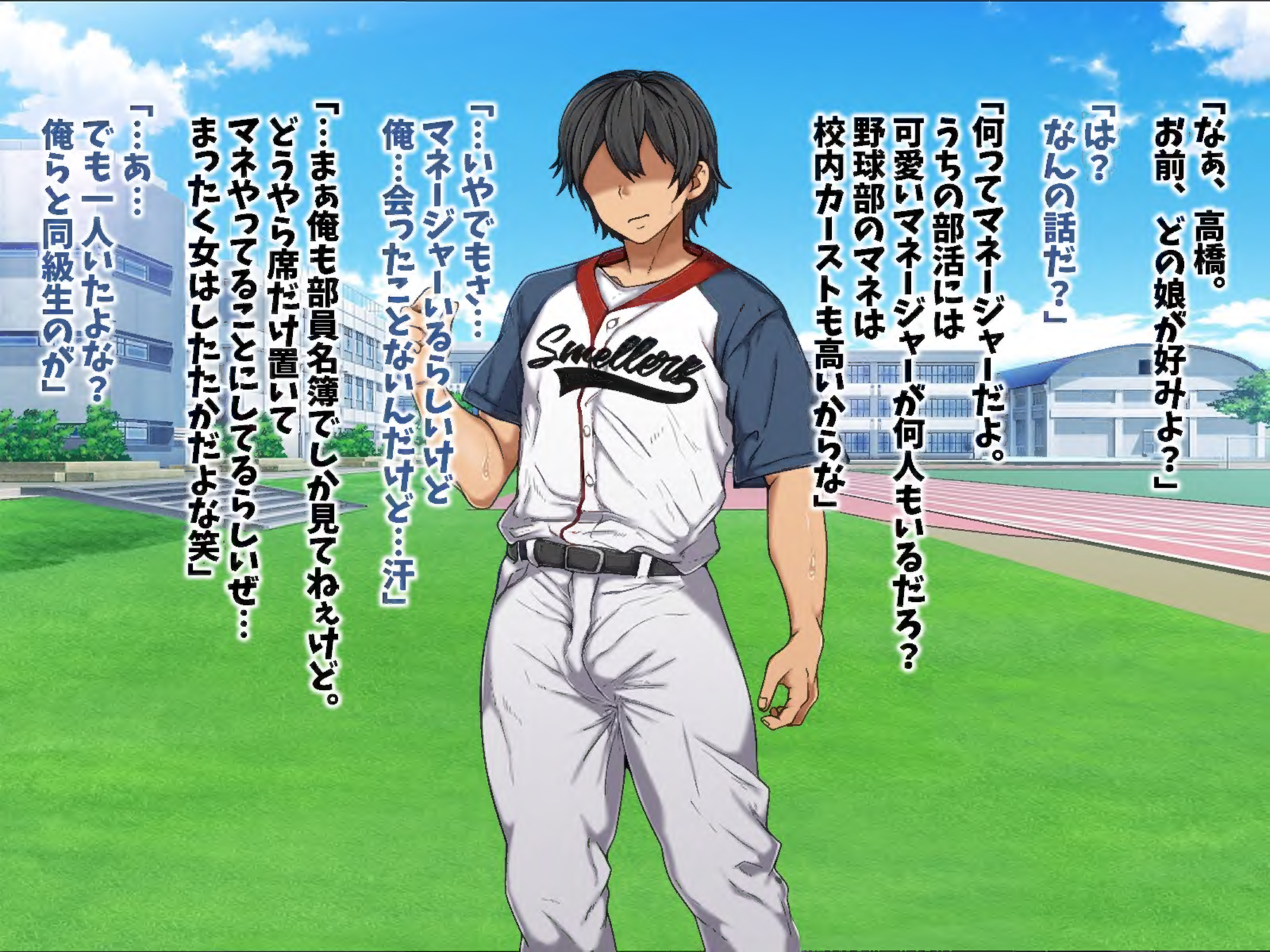
この作品には『スカトロ』『変態プレイ』が盛りだくさんだよ！
変態プレイは作者の妄想で描いてるからね！
2次元でしかできないプレイがほとんどだから
現実（リアル）ではケガや事故の原因になる恐れがあるよ！
この作品の内容を試そうとして、ケガや事故にあっても
当サークルは責任を負えないからね！お願いね！
楽しく、健康的に！ピュッピュしよ♥

目次♥

おまけエピソード（⚠食糞描写注意）

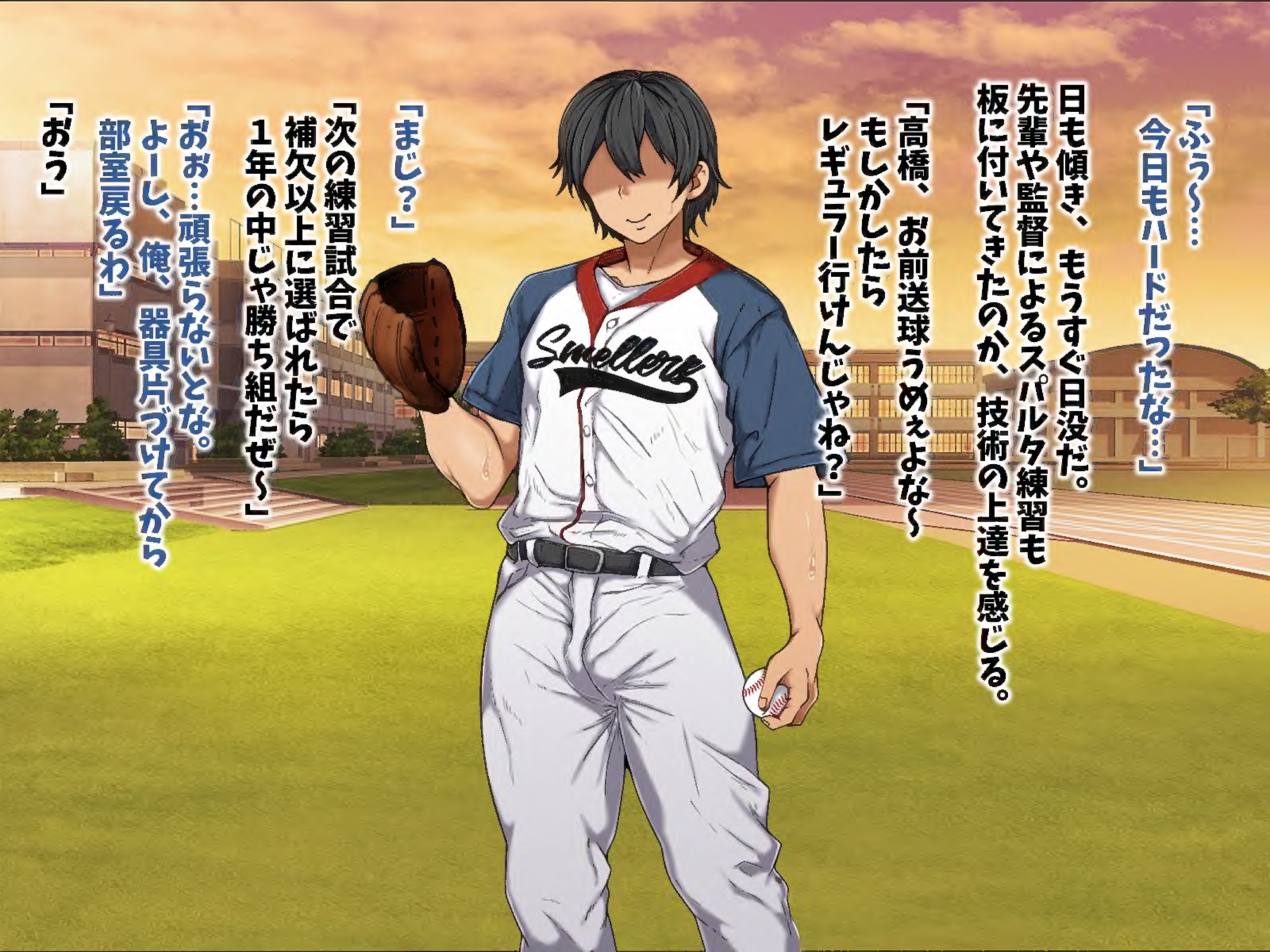

1回表
あの娘とプレイボール！


栖夢流高校（すめるこうこう）。
部活動が盛んな
郊外にあるありきたりな学校だ。
俺の名は、高橋。
俺は入部した野球部で
いつもの放課後練習をしていた。
「おら！1年！
練習前に
校庭5周！」
「はい！」
俺を含め、1年たちは
監督や先輩にスパルタ指導され、
なかなかハードな日々を過ごしている。
「おい、高橋、一緒に走ろうぜ」
「おう！」
Smellers

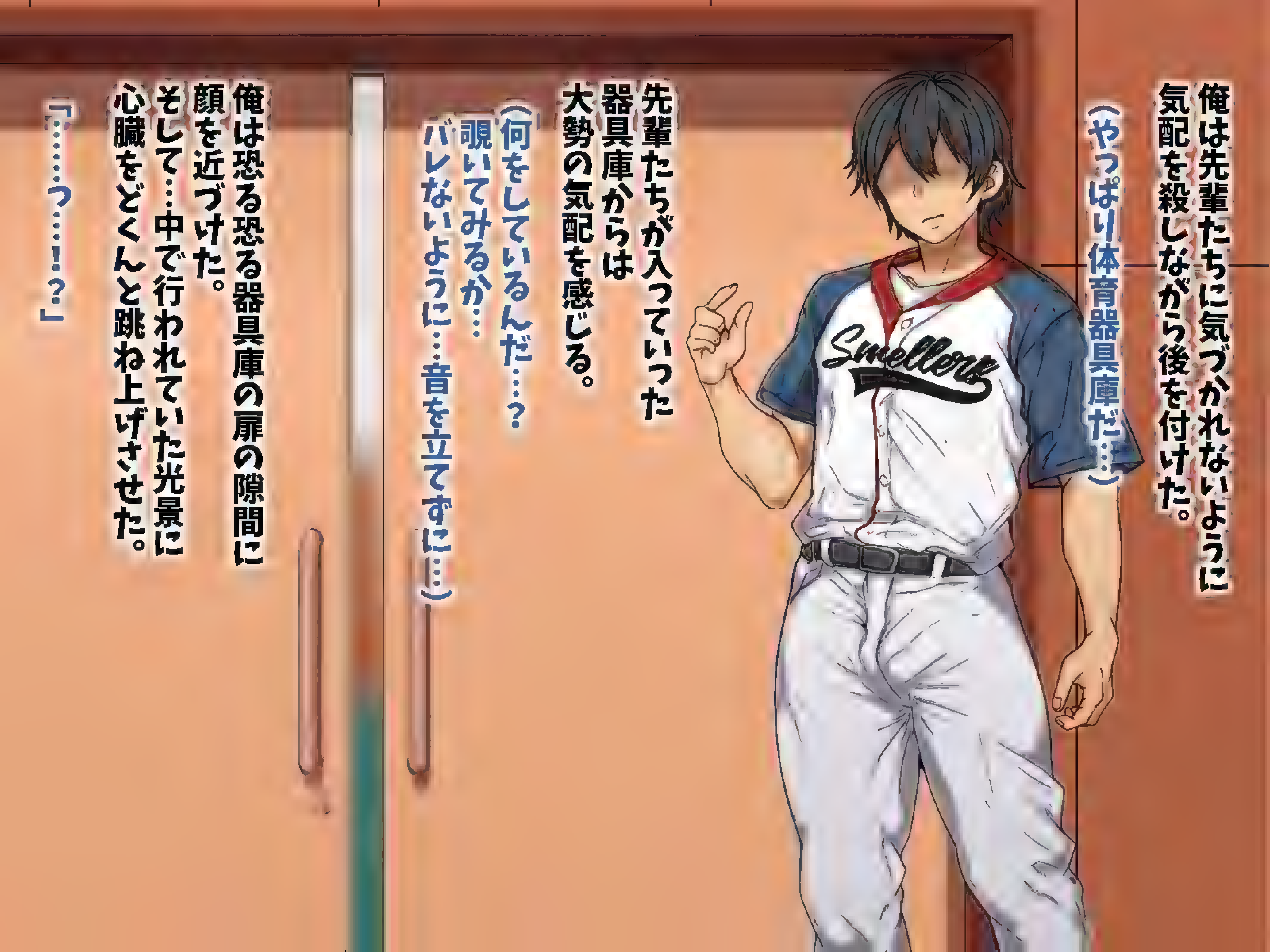

「なぁ、高橋。
お前、どの娘が好みよ？」
「は？
なんの話だ？」
「何ってマネージャーだよ。
うちの部活には
可愛いマネージャーが何人もいるだろ？
野球部のマネは
校内カーストも高いからな」
「…いやでもさ…
マネージャーいるらしいけど
俺…会ったことないんだけど…汗」
「…まぁ俺も部員名簿でしか見てねぇけど。
どうやら席だけ置いて
マネやってることにしてるらしいぜ…
まったく女はしたたかだよな笑」
「…あ…
でも一人いたよな？
俺らと同級生のが」


「それって…まさか田所栞か？」
「うん。たしか同じクラスだ。あいつだけは毎日来てるよな」
「はぁ～あいつ無口だし地味なんだよな。なんで野球部のマネしてんだろ」
「野球が好きなんじゃね？」
「ま、おっぱいがでかいのだけは悪くないからもっと先輩とか見習ってあか抜けて欲しいぜ」
「そうだな」


「1年！私語をするな！
追加で5周！」
「あっ……！
す、すみません！」
野球部監督の鬼頭。
本校のＯＢで
プロでも活躍していたが
足を痛めて引退したらしい。
見た目は恐いが腕は確かだ。
「ランニングが済んだら
守備の練習だ！
来月の練習試合までに
基礎を叩き込むぞ！」
（今日もハードそうだな…）


「ふう～…今日もハードだったな…」
日も傾き、もうすぐ日没だ。先輩や監督によるスパルタ練習も板に付いてきたのか、技術の上達を感じる。
「高橋、お前送球うめぇよな～もしかしたらレギュラー行けんじゃね？」
「まじ？」
「次の練習試合で補欠以上に選ばれたら１年の中じゃ勝ち組だぜ～」
「おお…頑張らないとな。よーし、俺、器具片づけてから部室戻るわ」
「おう」


俺は器具を片づけながら
ふと顔を上げると、
ある不思議な光景を視界に捉えた。
（あれって…先輩たち…
それに…栞？）
先輩たちと栞がぞろぞろと
校舎裏にある体育器具庫へ向かっていく。
「何かあったのかな？
先輩たちがあんな大勢で
体育器具庫に…？」
（気になるな……）


俺は先輩たちに気づかれないように
気配を殺しながら後を付けた。
（やっぱり体育器具庫だ…）
先輩たちが入っていった
器具庫からは
大勢の気配を感じる。
（何をしているんだ…？
覗いてみるか…
バレないように…音を立てずに…）
俺は恐る恐る器具庫の扉の隙間に
顔を近づけた。
そして…中で行われていた光景に
心臓をどくんと跳ね上げさせた。
「…っ…！？」


半裸になった栞を先輩たちが取り囲んでいる。
「……っ!?」
「ふぅ～今日も練習頑張ったな～全身汗でびっしょりだぜ」
「ったく野郎がこんな密集したら男臭せぇったらねぇな」
「よ～し…田所お…今日も俺らの疲れた肉バットをしっかりと癒してもらうぜ～」
「……はい……♥」
（に…肉バット…？てか…片岡先輩ちんぽ出してるし…！ええええええ！）
ぐい
モワ
ぶる


「おら、田所！
お前の大好きな
汗まみれバットだぞ～」
「わぁ…すうはぁ…
くんくん…んんっ♥」
栞は片岡の股間に顔を
ぐいっと近づけると
ペニスの付け根の
一番匂いが濃い場所に鼻を押し付けた。
「すうはっ…くんくん♥
片岡先輩の…んんっ
とっても…臭っさいですぅ…」
「そうだろ～だが、
お前は臭いちんぽが大好きだろっ笑」
モワ
ぐいっ
ぶる


「…はい…ちん…ぽ…大好き…です…♥」
栞は甘い吐息を吐きながら片岡のちんぽを手で掴みゆっくりと扱いていく。
「俺のちんぽを舐めたいか？」
「…はい！片岡先輩のちんぽお口に挿れたいです♥」
「ったくお前はほんとにスケベなマネージャーだな笑」
（お口に挿れる…？舐める…？やばい…頭が追いつかない）
混乱する俺を置き去りに器具庫内で行われるプレイは進んでいく。
ぶる



あむ♥
「はむぅっ♥」
栞は口を開き、
そのまま片岡先輩のちんぽを
口の中へと含んでいく。
「うぉお…！
あ～ぬるぬるした
口まんこきた～」
「つじゅるつぢゅ♥
れろ…んんじゅるるう…♥」
唾と唾液が弾けるような
いやらしい音を響かせて
栞は亀頭をじっくりと舐めていく。
「あぁ～気持ちいぜ～
疲れがぶっとぶな～笑」
（ほんとに…舐めて…
これっていわゆる
フェラチオ…だよな…）
モワ
ぶる


「おらっ！亀頭ばっかじゃなくて
こうやって竿もしごくんだよ！」
「んんぶぼぉおお♥」
片岡は栞の頭を掴むと
一気にちんぽを栞の口へ突っ込んだ。
「あ～イラマいいわ…
喉ちんこに亀頭押し付けるの
まじ最高お…笑」
「おい片岡～
チンタラしてんなよ！
俺らの時間無くなるだろ～」
「いいかお前ら！
マネージャーはみんなのモノだ。
順番を守って仲良く使うんだぞ！」
（え…監督…!?
監督も…いたの!?）



「しょうがねぇな～暑いし全員で全裸乱交だぜ！」
片岡の合図で先輩たちは全裸になり、ペニスを握りながら栞の周りを取り囲んでいく。
「わぁあ…おちんちんが…いっぱいだよぉ…♥」
「あ～もう我慢できねぇまんこ挿れるぞ！」
（まんこ…！？まさか…セ…セックスするのか！？）
俺の心拍数はどんどん上昇していく。


モワ
コンドームも付けていない生のペニスが生のまんこへ挿入される。
「おらっ！」
「んにゃ…♥牧原先輩のちんぽ入ってきたぁ♥」
（あぁあ…生セックスだ…初めてみたぞ…）
柔らかそうなまんこを押し広げぶっといちんぽが乱暴に奥へと進んでいく。
「あぁ～ヒダヒダ最高♪ちんぽに絡みついてくるぜ」
「おい、田所！顔がお留守だぜ～」


「おらおらおら！
あー練習終わりの
生ハメは生き返るぜ～」
「んんっ…♥
すぅはぁ…んん♥
激しっ…んん」
牧原はパンパンと腰を
栞のケツに打ち付け
激しいピストンをしていく。
ズンっ
「どうだ～田所！
ちんぽ嗅ぎながら
まんこ突かれるの
興奮するだろぉ！」
ずる
「はぁい…んん♥
ちんぽのことしか…
考えられないですぅ…ぅ」


モワ
「あ～金玉膨らんできた！
そろそろ出ちまうぜ」
「中に…いっぱい
出してください…っ♥」
（中に…出す…？
え…まさか
中出し！？）
「え～牧原が
初っ端かよ～」
「俺はピッチャーなんだから
最初くらい譲れよな！
あ～イクイクっ！」
牧原はピストンを加速させていく。



「射精るぞっ！」
「んんっ♥」
ブビュッ！
栞と牧原の身体がびくんと跳ねた。結合部からネバっとした白い液体がどろ～っと零れだす。
あっ
ぐい
ビクッ
ぶる
「すっげ笑 こいつ痙攣してるぜぇ イったのか田所」
「はぁい…っ♥ イっちゃいましたぁ…♥」


モワ
栞のまんこから
精液まみれの牧原ペニスが
ずるるっと這い出てくる。
「んぁあぁあっ♥
精液逆流しちゃうよぉ…」
「おいおい
ちゃんとまんこ
締めろって〜
精液味わえよw」
（すっげ…え…
あれが…
中出し…ごくり）
「ほら、牧原！
後ろが大勢いるんだ。
さっさと交代交代〜」
あ
ぐい
どぷ
「へいへい〜
しっかし今日はなんだか
一段と締まりがいいな笑」
「えっまじ？
楽しみだぜ〜w」
ぶる


「おらっ！田所開け！」
「きゃっ…♥」
栞は積まれたマットの上に押し倒されて足を大きく開かされた。
「うへぇ～まんこがザーメンまみれだな。ちんぽの形に拡がって中まで丸見えじゃねぇか」
「んんっ…恥ずかしいよぉ…♥」


「ちんぽが渋滞してんだ、さっさと突っ込むぞ！」
片岡は栞の足を掴むと一気にまんこの奥へちんぽを押し込んだ。
「んんっ…深っ…いい♥んんああ…あ♥」
「うおお…すげえ締め付けだな！よ～し、もっとまんこ締めてちんぽバットをまんこで扱け！」
「はい…い…♥あぁんんっ…んん♥」


「おらおらおら！」
片岡は膣内の精液を掻き出す勢いで激しいピストンを繰り返す。
「あんんんあっ♥激しっ…んんあぁぁ♥」
「おい片岡！俺の精液出すなよ〜」
「いいだろ別に〜どうせこれからレギュラーメンバー分注ぎ込むんだからよ〜」
「ひゃんん…あぁ♥」


「あぁ～締め付けいいぞ～
亀頭と竿がごしごし
扱かれてるみたいだぜ～」
「はぁんっ…♥
奥まで…届くぅ♥」
琹は息を荒げ、
ピストンされる度に
メスの声を発している。
ズポッ
ズる
あっ
ぐぃ
（ほ…本気ピストン…
やべぇ…AVでもそんな見れない
遠慮ないセックスだ…ごくっ…）
「ちんぽ気持ちいいぜ～
やべ…イきそ…うおぉ」


「奥に射精る！」
片岡は勢いよく子宮の入り口を突き、そのまま射精した。
「イっくぅぅ♡」
栞は全身をびくんとさせ、何度もぴくぴくと身体を痙攣させる。膣内からはゼリー状のネバついたザーメンがぼたぼたと噴き出してくる。



「ふう～出た出た」
ちんぽが抜かれると
栞のまんこからは固形に近い
ぬめっとしたザーメンが逆流してくる。
「あぁ…ふんっ♥
逆流ザーメンで…んんっ
またイっちゃいそう…ん♥」
あぁ
くぱぁ
（すっげ…なんだよあのまんこ…
精液まみれでぱっくり開いてて…
くっそエロ…やべ…）
「おら！おめえら！
どんどん突っ込め～」
その後も栞は何人もの先輩たちに
膣内射精をさせていた。


栞と先輩たちは性解放した動物のように激しく身体を重ねた。
「ふぅ～今日も出した出した」
「やっぱ部活終わりは生セックスに限るわ」
「おまんこ…どろどろだよぉ…♥」
「にしても今日はまんこの締まりが良かったな」
「う…うん…♥高橋に見られてたから…」
「え…」


「あ？高橋？
おい…そこにいるのか！」
「やべ！」
俺は逃げる隙も与えられず、
先輩に拘束され、器具庫内へ引き込まれた。
「えーっと……あはは…
俺…大量生ハメの現場なんて
これっぽっちも見てないっすよ！」
「見ちまったようだな…
監督～どうしましょう？」
監督が俺に近寄ってくる。



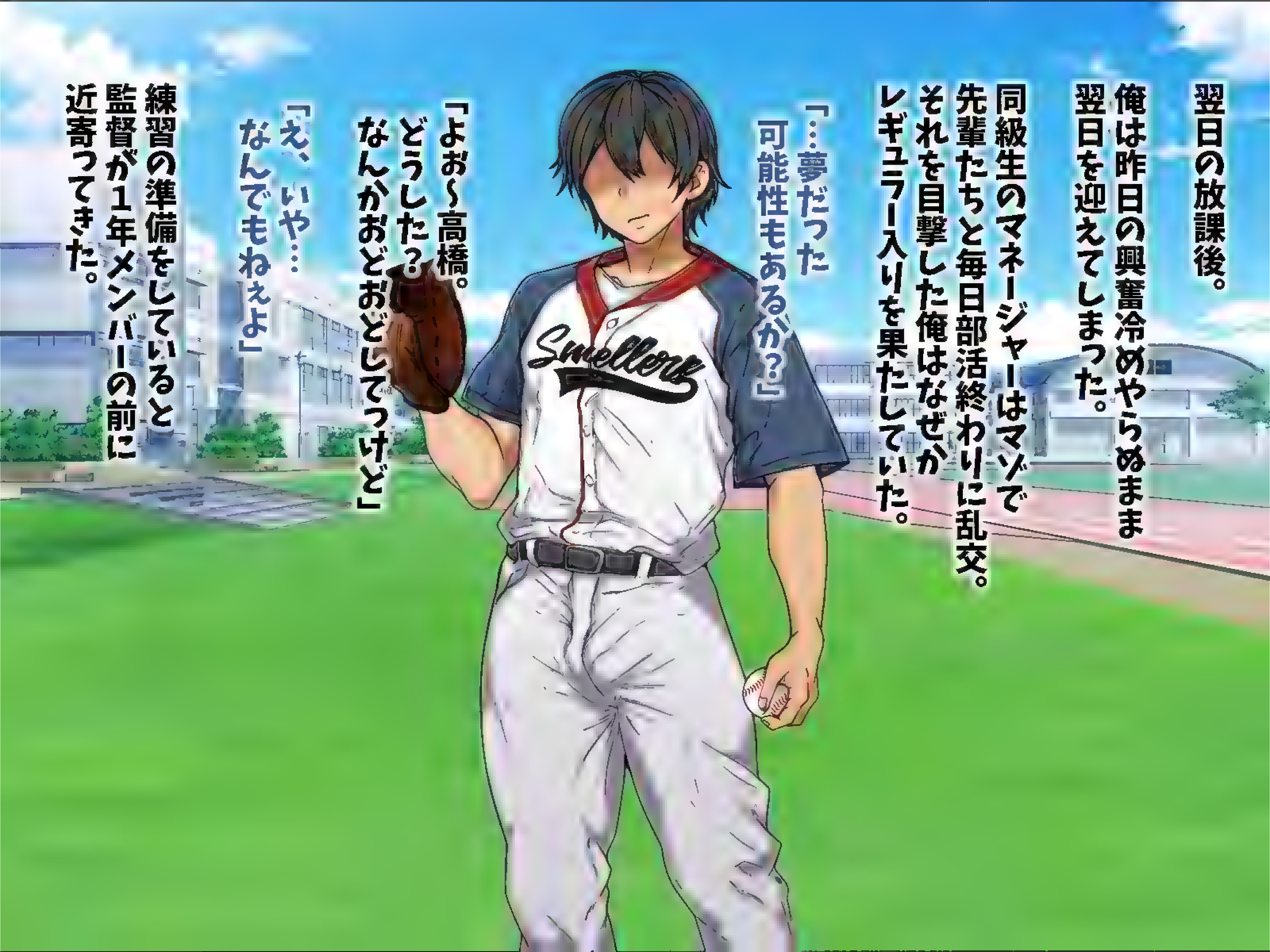
「高橋か…うーむ…」
(な…なんだ…俺…消される?)
「1年の中じゃ送球がずば抜けていいな。ありかもしれん…」
「へぇ～高橋うまいんだ」
「1年の中じゃトップだわな」
「たしかにな～」


「よし！高橋！今日からお前はレギュラーだ！守備はファーストだ！いいな！」
「え！？レギュラー！！あ、ありがとうございます！！でも…なんで？」
「ようこそ…レギュラー陣の癒しの口部活終わりのパーティへ」
「まぁ今日は仕舞だ。明日から頑張れよ～」
「よーし、おまえら！撤収だ、撤収ぅ！」


栞と先輩たちは帰り支度を始めた。
混乱したままの俺は栞に声をかけた。
「お、おい…しお…た、田所…！」
「栞でいいよ？」
「え、お、おう…栞！どういうことなんだ？」
「鬼頭監督の考えた『選手育成プログラム』の一環なの。質の良い選手を育成するには心身ともにストレスを減らすのがベスト。それには《性のはけ口》が必要」
「え…それにお前が名乗り出たの？えーっと…なにか弱みでも？」
「え？…っあはは！高橋妄想すごいね笑」


「だって私…マゾだもん♥」
「…え……」
「男の子の臭っさいとこ大～好きな変態マゾだも～ん♥」
そう言って栞は口元に笑みを浮かべた。その言葉に俺はごくりと唾をのみ、股間を膨らませてしまった。


１回裏
やっぱり生が一番だよね


翌日の放課後。
俺は昨日の興奮冷めやらぬまま
翌日を迎えてしまった。
同級生のマネージャーはマゾで
先輩たちと毎日部活終わりに乱交。
それを目撃した俺はなぜか
レギュラー入りを果たしていた。
「…夢だった
可能性もあるか？」
「よお～高橋。
どうした？
なんかおどおどしてっけど」
「え、いや…
なんでもねぇよ」
練習の準備をしていると
監督が1年メンバーの前に
近寄ってきた。


「おう！1年ども！
おまえたちの中からも
今度の練習試合のレギュラーを指名した。
ファーストに高橋だ！」
「は…はい！」
（夢じゃ…無かったのか）
「え！まじで！
高橋すげぇじゃん！」
同学年の部員たちはどよめいた。
「高橋、お前は
レギュラー育成プログラム入りだ。
今日は田所の指示に従え。
他の者は走り込みだ！」


それだけ告げると
監督は立ち去ってしまった。
「…まさか…
昨日の出来事って
夢じゃない…？」
「何寝ぼけたこと
言ってるの、高橋。
じゃあこうちきて」
「…お…おい…
どこ行くんだよ…」
「レギュラー入りした部員は
まず私がバットを味見するの」
「バットを味見…何言ってんだ？」
「ほらこうちきて♥」


俺と栞は体育器具庫に入った。
「……おい……ここで何を……」
「先輩たちに高橋のちんぽバット味見してこいって♥」
そう告げると、栞はスカートをたくし上げ白いパンティーを曝け出した。
「お口でも、おまんこでも、アナルでも好きなところにぶち込んでいいんだよ？」
「……え……味見……？って……？……ま……まじ？」
「だからズボン脱いでよ。私の穴で高橋のおちんちん味わいたいから♥」


AVでしか聞いたことないような台詞が
生で聞けるとは…どうなってんだ。
「まずは…やっぱり
お口で舐めるのがいいよね？♥」
「…口でな、
フェラってこと！？？」
舐める！？
「うん、パイズリでもいいよ？
他の1年に見つかったらまずいから
はやく脱いで♥
私も脱ぐから」
「あ、あぁ」
俺は栞に言われるがままに
ズボンのチャックを下げ、
パンツの中からちんぽを掴みとり
ぽろんと外に露わにさせた。



「萎えてる時は包茎だね。でも皮がぶってるけど太くてサイズがおっきい♥」
「あ、あんまじろじろ見るなよ」
「恥ずかしい？」
「そんなまじまじと見られたことはねぇよ」
「高橋…私のおっぱいばっかり見てるね♥
おっぱい好きなんだ～」
「は！ち、違ぇよ！偶然目がいって…」
ぐい
ぶる



栞は俺を積まれたマットに座らせると、
上半身を乗り出し、
おっぱいをちんぽに覆いかぶせた。
「おっぱいが好きなら～
これはどう…？♥」
「うおおお…！
柔らかっ…！」
栞の大きな胸の谷間から
俺のちんぽがにょきっと
無様にそそり立っている。
「固くなってきてる～
しかもアツアツだよ？♥」


「匂いは…くんくん…すう…ごほっ！」
俺のちんぽを嗅ぐと、栞は眉をひそめながらごほごほと咽だした。
ぐい
「え…ど、どうしたの？」
「ねぇ高橋ってさ、お風呂あんまり入らないの？」
「は？いや、毎日入ってるけど？」


「……くんくん……げほっ……だって…おちんちんめっちゃ臭いよ？」
「……はぁ！？ えええ！まじかよ……」
栞は俺のちんぽに鼻をぐいぐい擦りつけながら臭っさい臭っさいと囁き声を呟いている。
「え……俺のちんこってそんな臭いの？」


「えと…先輩たちの
おちんちんの数倍…臭いかも。
たぶん…すそワキガだと思う…」
「…ワキ…ガ…？
ちんぽがっ？まじで？」
俺のちんこがそんな
激臭ちんこだとは
知らなかった。
「自分の匂いって
わかんないよね～
こうやって他人に
嗅いでもらわないと♥」
自分じゃわからなかったが
…そんな臭いのか…。


「でもね…すぅはぁ…んんっ♥
私…この臭っさい匂い嗅いでると…
おまんこ濡れてきちゃう…んん♥」
「……は？」
（なに言ってんだ？）
栞はすそワキガだと
判明した俺の激臭ちんぽに
ぐいぐいと自らの鼻先を
押し付け嗅ぎ続けている。
「すぅはぁすぅぅ♥
このままお口にも
入れちゃうね♥」


栞は口を開けると
唇で皮を剥きながら
ちんぽの先を咥えた。
「…うううお！
亀頭に刺激がっ…」
「んんっごほっ♥…」
「やべっ……
あったけぇ…え」
「うぢゅるるる♥
お口の中に…高橋の匂いが…
一気に流れ込んでくるぅ♥
このままおっぱいも動かすね♥」


栞は大きな胸を左右から押し付け
俺のちんぽをプレスしながら
上下に扱き出した。
「じゅぶじゅるるぅ♥」
「やはっ…これやばいって…！」
「うすごい♥
高橋のちんぽから
我慢汁どばどば出てるぅ♥
めっちゃ濃い味…っ♥」
（ちんこ全体が
気持ちいいってば…
うおおおおお）


「っぢゅぶぶぶぢゅる♥…
っぢゅっぢゅぢゅううう♥」
「裏筋もすごう…んんぁ
かりのとこ…舐めすぎ…い」
俺の金玉が膨らんでいく。
そろそろ限界なのがわかる。
「もう…イくって」
「出ちゃう？
精液出ちゃう？
高橋の濃いい種汁
私のお口に遠慮なく
びゅびゅびゅ～ってしていいからね♥」
「んんぐおおおおぉ」



「イくっ…！」
栞の口と胸の谷間から勢いよく精液が噴き出した。
『ぶぼおっお♥』
「すげぇ出る…
うおお…気持ち〜」


「すっごい濃いいよぉ…♥
っずっずるりゅううう♥
尿道にもまだこんなに残ってるぅ♥」
栞はひょっとこ口になりながら
俺の尿道に残った精液を
ストローを吸うように
吸い出していく。
「それやばい…！
吸い出されるの…
くすぐったいってか…
刺激が強いって…」
「おちんちんまだまだ
カッチカチだね♥
金玉もずっしりだから
もっと出せそうだね♥」
んぷっ
ずる


「じゃあ…今度は下の口で…高橋のおちんちん味わってみたいな♥」
「お、おう…」
「緊張してるね。高橋って童貞？」
「わ、悪いかよ！部活動で忙しくて彼女作る余裕ねぇんだよ」
「ううん…嬉しい…♥私のおまんこで初めてのセックスしてくれるんだもん♥」
「お、おう…じゃあ…脚…開けよ」


栞はマットの上に寝転がると
両足を大きく拡げ、
股間を露わにさせた。
「よいしょっと……
高橋……私のおまんこ
見える？」
「お、おう……
これが……間近で見る
生の……まんこ……ごくり」
栞の股間には陰毛がふさふさと生え
お尻の穴にも細かなケツ毛が見える。


「ほら、高橋…はやくおまんこにおちんちんあてがって♥」
「よ…よし…こ…こうか…」
俺は栞の身体に覆いかぶさるとおまんこの入り口に亀頭をぬるっとあてがう。
「あ…コンドーム…って付けるんだっけ…」
「あはは♥高橋の好きなようにしていいよ？♥」


「でも…お…私のおすすめは…な・ま・ハ・メ♥」
「生…ハメ…ごくり」
「おちんちんの感触が膣で直に味わえるだもん…やっぱり…生が一番だよね♥」
「あぁ…わかったぜ…栞…挿れるぞっ…！」


「おらっ……！」
「んんぐっ♥」
俺は腰をおろし、栞のまんこの奥へちんぽをずるっと挿入させた。
あっ♥
ずる
「うっわぁ…熱っ！ まんこの中って…うぁ こんな感触なのか」
「あぁんんっ♥ 太っといの…きたよお♥」


「やべ…腰が勝手に動いちまうよ！」
「高橋のおちんちんが私のおまんこ喜んでるんだね♥」
初めてのまんこの感触に俺は理性を失い始めていた。
「栞…栞い！うおおおお！お前をめちゃくちゃにしたい…！」
「あは♥…いいよ…高橋♥君のちんぽで…私のおまんこ壊して♥」


「うおおおおお！」
その言葉を合図に
俺は獰猛な獣のように
激しく腰を上下に振り出した。
「んんぎぃ♥
すご…いいよおおお♥」
あっ♥
栞と俺はマットの上で
激しく身体を揺らしまぐわう。
「この…このっ！
マゾまんこがっ…
おらおらおらおら！」



「はぐっんんごぉお♥
おちんちんが…子宮の入口
ガンガン突いて…くるぅう♥」
「亀頭に当たってる
この気持ちいいやつ?
これが…栞の…子宮口…!」
「そうだよぉ♥
バキバキのカリ首もぉ…
ゴツゴツした血管も
中で擦れて気持ちぃい…っ♥」
「もう手コキに戻れねぇわw
気持ちよすぎ…イキそう」


「イっちゃう？♥
精液どびゅどびゅくる？♥
いいよ…中に射精して」
「中に出していいんだな！
もう止められねぇぜ！」
「うん…高橋の子種汁欲しいよお♥
子宮の奥に無責任種付け射精
ぶちまけて…欲しいのおお♥」
「うおおお…子宮に…
奥に…出すからなぁ！」


「中に出る！」
「イっくぅ♥」
栞の子宮と膣内が
俺の精液で満たされていくのがわかる。
多幸感、満足感、達成感、征服感…
それらで俺も満たされていく気がする。



あっ
「んんあっ…はぁ…はぁ…童貞卒業おめでと、高橋♥」
「セックスが…こんなに満たされるものだったなんて…」
「でも…高橋のおちんちんまだおっきいんだけど…笑♥」
「あぁ…こんなの知っちまったら1回じゃおさまらねぇよ！」


「おらっ…！」
「きゃっ…♥」
俺は栞の身体を床に押し倒すと
無防備な後ろからちんぽを突っ込んだ。
「前からこうやって
女子をバックで
犯してみたかったんだ」
「あぁんんっ♥
高橋に…レイプ
されてるみたい…♥」


「興奮すんだろ？無理やり犯されるの！おらおらおら！」
「んんはぁん♥うん…乱暴にセックスされるとそれだけでイっちゃうの…♥」
あっ♥
「ド変態だな、お前ぇ あ〜まんこぬるぬるぬる！精液掻き回してるぜ」
「あんんぁ…♥また…奥に…あたって…気持ちっ…いいんん♥」


「あぁ～また出そう！
また中にぶちまけるからな！」
「んごぉっんん♥
きて…んんぁっ…んごぉ♥」
「気持ぢぃ♥
ぶほっんごぉ♥」
栞は俺に突かれるたびに
豚のような喘ぎ声をあげ、
身体をびくびくと痙攣させている。
「おらおらおら！
俺の精液味わえよぉ！
ぶちまけるぞ！」



「んんおお！」
「んんほお♥」
射精と同時に栞のまんこに収まりきらない俺の精液が逆流した。
「うおっと！精液逆流するほど射精しちまったか…w」
ぶる


「おら！まだ終わらねぇぜ！…次は…こうだ！」
「きゃっ…ふぇ！？」
俺は栞を持ち上げると栞のお尻をちんぽに擦りつけた。
「お前さっき言ったよな？ケツの穴も…ハメていいって」
「え？…あはは♡もしかして～高橋ってアナル好きなの？」
「お、おう…というか…ぶっちゃけ…俺のAV視聴履歴はアナルものばっかだ…」


「あはは…いいね♥
でもなんでこの体位なの？
…さっきまで童貞だったとは
思えないんだけど♥」
「うっせ笑
童貞舐めんな！
AVとか同人誌で人並以上に
毎日妄想してたんだからよ！」
「ば～か♥
じゃあ…その妄想…
現実にしちゃおっか♥」
「お、おう…
じゃあ…このまま
アナルに突っ込むぞ！」
俺は栞のアナルへ
自らのちんぽに被せるように挿入した。


「うぉおっ！キッツぅう！」
「お尻…い…きたぁあ♥はぁんんっ…太いいい♥」
はー
はー
はー
まんことは違う感覚。
四方から締め付けられ
栞の身体の一部になっている
…そんな感覚だ。
「おい、こっち向けよ…
アナル犯しながら
キスしたいって
思ってたんだよ」


「うん…♥高橋…キス…しよ♥」
「うぉ…っちゅ」
俺と栞はアナルセックスをしながら唇を重ねキスを始める。
はーっ
はーっ
「んんっ…♥君の唾液が…んん流れ込んでくるぅ♥」
「うぉお…！アナル締まるっ…！お前、キスで感じてんな？」
「うん…♥」


「あ～気持ちぃ！上下に動かすぞ！」
「あぁんっ…擦れっ…るぅぅぅ♥」
はー
はー
俺は栞の身体を上下に動かし、アナルでちんぽを扱いていく。
「うすげ…笑 お前のケツの穴をオナホみたいに使ってセックスしてるぜ…」
「お尻っ熱っ…んん♥すごい…んんんっ♥」



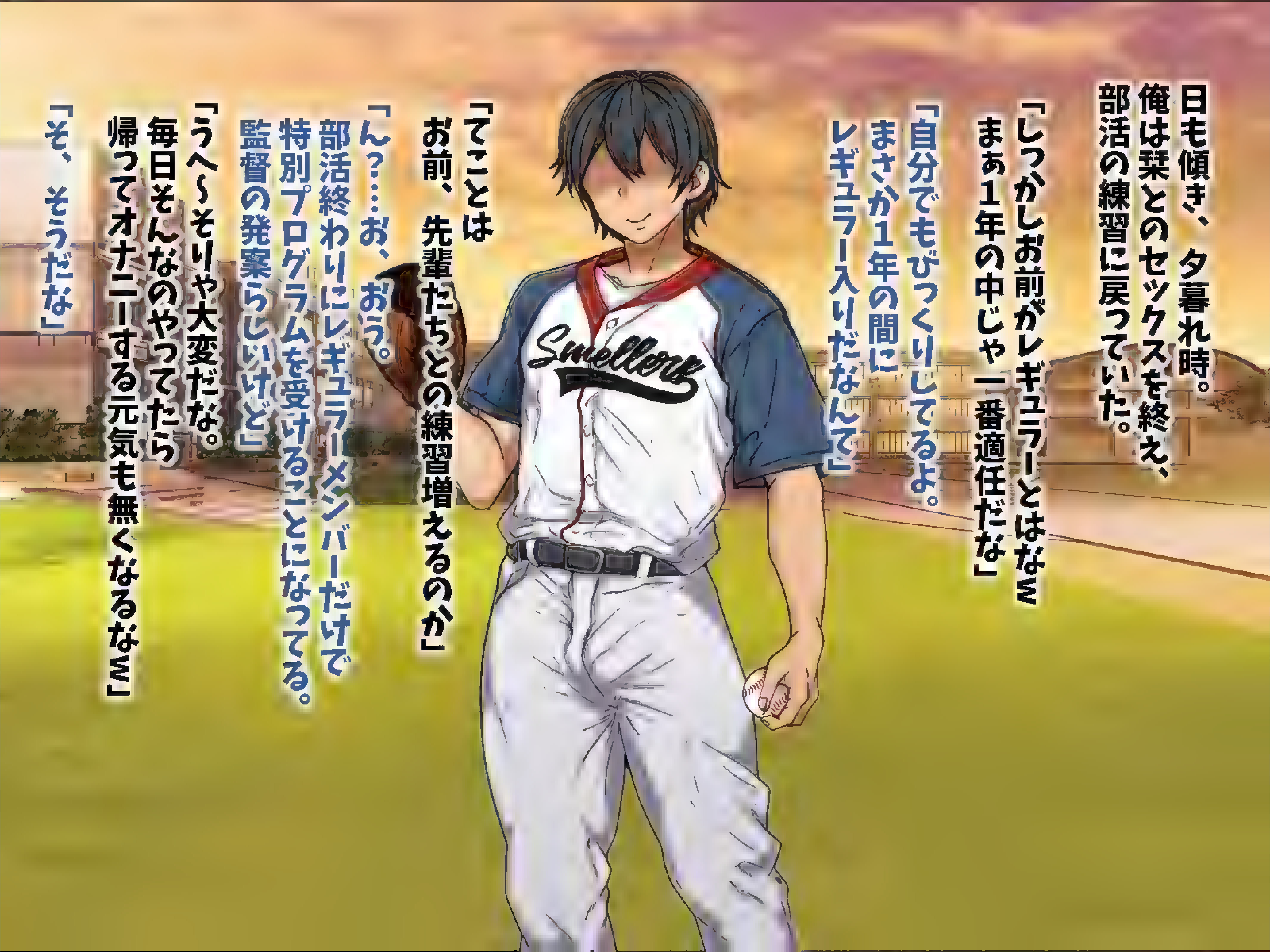
「おらおらおら！
ケツ穴突きあげるの…
最高かよ…気持ち～」
「おぢりっ…イく♥
あぁんん深…すぎ…っ♥」
あっ
はー
はー
はー
「あ～俺もイきそ！
よーし…ケツ穴の奥に
たくさん出してやるからな！」
「あんんっ♥
おちんちん膨らんでるぅ♥
きて…出して…ぇ！」
「ほら、ケツアクメの顔
こっちに向けとけ」
ぐぃ
ブポッ
ぶる

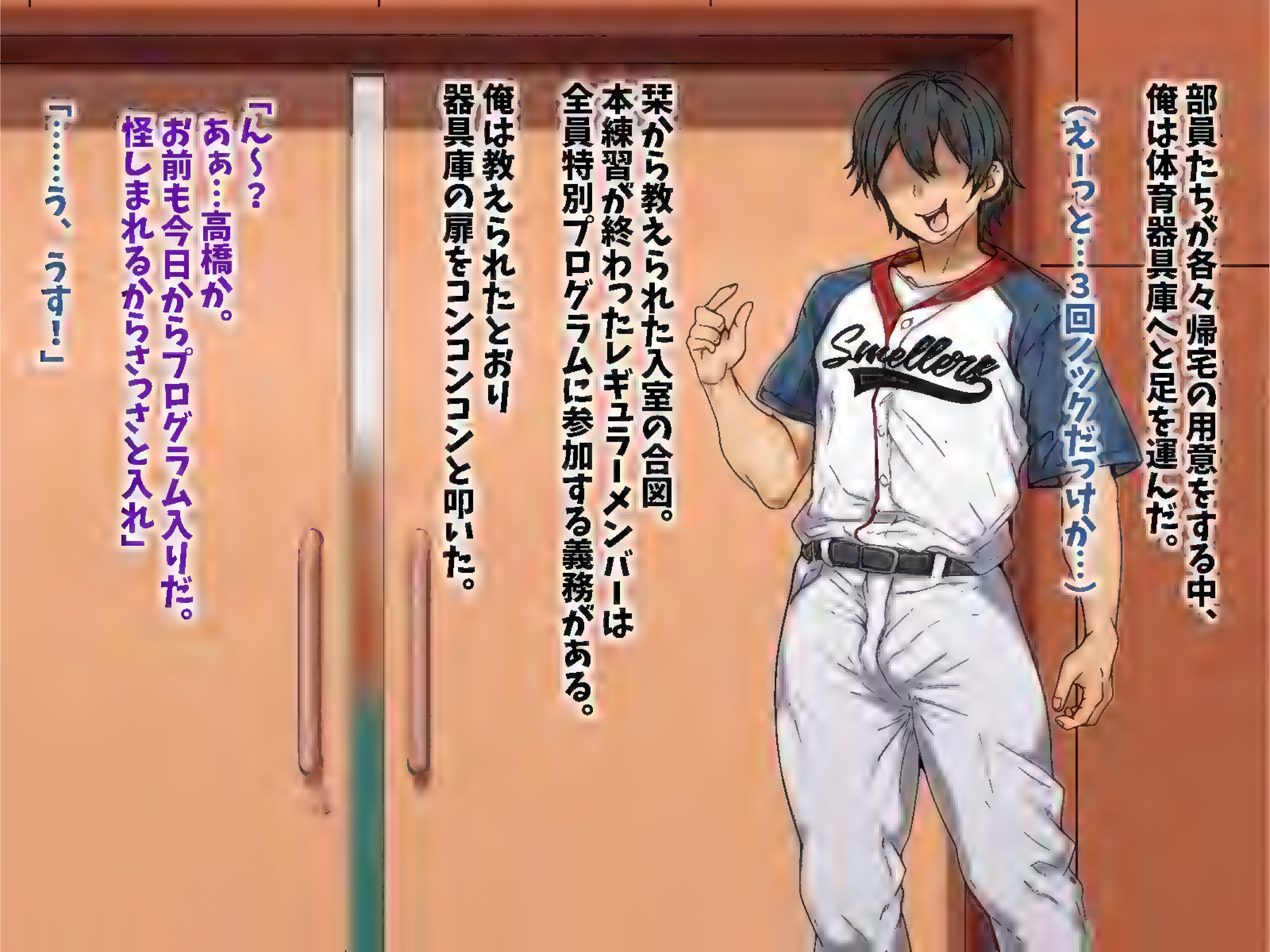


「おら！イくっ！」
「おぢりいい♥」
栞のケツの穴にどびゅどびゅどびゅと俺の精液が噴射されていく。
「締め付けやば…ｗ全部絞られちまう」
「んんんっ♥っちゅ…ぢゅる…♥」


「あ…おしっこ…♥」
栞は身体をぴくぴく痙攣させながら
弧を描くように小便を漏らした。
「おいおい、おもらしか笑
お前エロすぎ」
はーっ
はーっ
「ふふ…♥
高橋のこと…
知れてよかったよ♥
セックス万能♥」
「あーほ。
俺は1度のセックスで
知れるほど単純じゃねぇよ笑」
俺はセックスの余韻に浸りながら
しばらく栞とキスを続けていた。


2回表
臭っさいちんぽがお好き？


日も傾き、夕暮れ時。
俺は栞とのセックスを終え、
部活の練習に戻っていた。
「しっかしお前がレギュラーとはなw
まぁ1年の中じゃ一番適任だな」
「自分でもびっくりしてるよ。
まさか1年の間に
レギュラー入りだなんて」
「てことは
お前、先輩たちとの練習増えるのか」
「ん？…お、おう。
部活終わりにレギュラーメンバーだけで
特別プログラムを受けることになってる。
監督の発案らしいけど」
「うへ～そりゃ大変だな。
毎日そんなのやってたら
帰ってオナニーする元気も無くなるなw」
「そ、そうだな」


部員たちが各々帰宅の用意をする中、
俺は体育器具庫へと足を運んだ。
（えーっと…3回ノックだっけか…）
栞から教えられた入室の合図。
本練習が終わったレギュラーメンバーは
全員特別プログラムに参加する義務がある。
俺は教えられたとおり
器具庫の扉をコンコンコンと叩いた。
「ん～？
あぁ…高橋か。
お前も今日からプログラム入りだ。
怪しまれるからさっさと入れ」
「……う、うす！」
Smellers


「失礼しまーす…うぉ!」
器具庫に入ると、目隠しをされた栞が先輩たちに囲まれていた。
「きたか、高橋。今、田所に部員の匂い当てでテストを実施しているところだ」
「テストっすか」
(やべぇ…エロ…)
「お前も参加しろ笑
さっき田所とセックスしたんだろ?」


「選手のことを知らなくては
マネージャーは務まらない。
腕のいいマネージャーは
嗅覚だけで選手を判断できる！」
「ほ、ほう…」
「用意はいいか、田所！」
「は…はい♥」
「ばっちりだよなぁ
もうまんこびちょぬれ」
「いいか、俺らは
声を出しちゃだめだ」


「よし、まずはお前だ」
「う、うす！」
俺はズボンからちんぽを取り出した。先輩たちは栞の背中を押し、俺の股間に栞の顔を飛び込ませた。
「…んんっ…♥金玉の…感触ぅ…♥」
あ
ぐい
「…すうはぁすうはぁ♥」
俺の金玉に栞の鼻がぐりぐりと当てられてる。練習終わりたてのほかほか汗だく金玉だ。
（すっげ…栞のやつめっちゃ俺の金玉…嗅いでんじゃん）


「…すぅはぁ…ごほ♥
臭っさい…あは♥」
「どうだ、田所。
誰だかわかるか～？」
「…はい♥
このツンとした
激臭おちんぽさんは～
高橋です♥」
「え…まじ？」
ぐぃ
モワ
「おお、当てやがった」
「だって…一番臭いもん♥」
「おいおい…
高橋ちんぽ洗っとけよ～ｗ」
「ば、馬鹿！
先輩たちの前で言うなって」


「1本じゃわかるか。なら、同時に複数の匂いを嗅ぎ分けられるか？」
先輩たちは栞の顔にちんぽを近づけていく。
「す、すごい…♥たくさんのおちんちんが近寄ってくる気配…♥」
「どれが誰のちんぽかちゃんと当てろよ～」


栞の目の前にちんぽが並んだ。
「すうはぁ…ごほ♥
いろんなおちんちんの匂いが混ざりあってるぅ♥」
「ほら、右から順に答えろ」
「すうはぁ…くんくん♥
この…ちょっと大人な匂いがするのは…
鬼頭監督♥」
「おお…また当てやがった笑」


「くんくん…すはぁ♥
えと…これはぁ…
仄かに甘い香り…
片岡先輩♥」
「ざんね～ん、違いま～す！」
「え～♥
違うの～？」
「まだまだ爪が甘いぞ、田所」
「もっと…近くで
くんくんしたいよぉ…♥」
「仕方ねぇなw」


先輩たちは栞の顔面にちんぽを擦りつけるように押し付けた。
「これで嗅ぎ放題だぞ～」
「んんんっ♥ っすごい…すぅはぁ おちんちんの匂いで頭馬鹿になるぅ♥」
「ほら、ちゃんとカウパー汁の匂いも嗅ぐんだよ！」
「ひやぃぃ…♥ すぅはぁ…すんすん はぁ…すぅ～♥」



ぐいっ
「んんっ…あ♥
このカウパー汁の匂い…
片岡先輩じゃなくて
牧原先輩のだ〜♥」
「お、ようやく当てたか」
あっ♥
「あ…くんくん♥
この汗臭っさいの…
こっちが片岡先輩♥」
「当ったり〜♪
ちゃんと覚えろよな〜」


「ふむ…汗やカウパー、金玉だけでは部員の匂いを理解したとは言えんな」
「うう…難しいです…」
「よし…俺が見本になってこいつに匂いを覚えさせる術を教えてやろう」
「はい、お願いします鬼頭監督♥」
「うっす！手本にします笑」



すると、監督は栞を押し倒し、
仰向けに寝そべらせた。
「んきゃっ♥」
あ
ぐい
「いいか、田所。
そのままじっとしておけ。
顔を上に向けたまま
逸らすんじゃないぞ」
「は、はい♥
じっとしてます…♥」
ぷる
監督は栞の顔の上に立つと
そのまま腰を下した。


栞の顔面に監督のケツが押し付けられた。
「きゃん…♥ 鬼頭監督のお尻が…♥」
「いいか、田所。オスもメスも匂いが濃いのはやはりケツの穴だ」
「お尻の穴…♥」
「ケツの穴の匂いを知ることでより選手のことも理解できるようになるんだ。ほら、尻を掴んで舐めなさい」
ぐい


「ひゃい…れろれろ♥」
栞は監督のお尻を掴むと
そのままケツ穴を舌で舐め始めた。
モワ
「すっげ…笑
こいつ躊躇いねぇよな」
「まじでケツ穴舐めてるぜw」
「いいぞぉ、田所。
ケツ穴のシワをなぞる様に
丁寧に舐めて味わうんだ」
ぷる


「れろ…れろれろ♥」
「舐めるだけじゃなく感謝のキスもするんだ」
「ひやい♥ケツの穴に…キッス♥れろ…つぢゅ…ツチュ♥」
「う…うぉ…すげぇ吸いつきだなぁ」
(監督気持ちよさそう)
「つぢゅるううううう♥はむぅ…れろ…つぢゅつちゅ♥」
「あぁ…屁が出そうだ。田所、受け止めろ」
ぐい
ぷる


監督はプス～と音を立て
栞の顔に屁をぶっかけた。
「ひやっ…おならあ♥」
「ちょっと～監督っ笑
屁こいたんすか」
「いいか、お前ら！
屁の匂いは体調管理に役立つ。
これから屁をするときは
田所に嗅がせることにする」
「お、まじっすかｗ
そりゃいいですねｗ」
モワ
ぷる


「おら、田所！俺の屁の匂いを嗅げ」
「ひゃい…すぅはぁ…ごほ♥すっごい…濃い匂いぃ…♥」
あ♥
ぷぅ〜〜
「どんな匂いか言ってみろ！」
「え…えと…ごほっ♥なんとなく…ガーリック？あとは…うんこの匂いですぅ♥」
「いいぞぉ〜昼食のニンニクラーメンがガスとして下りてきたわけだ。屁を嗅げばそいつのことがなんとなく理解できる」
モワ
ぐい
ぷる



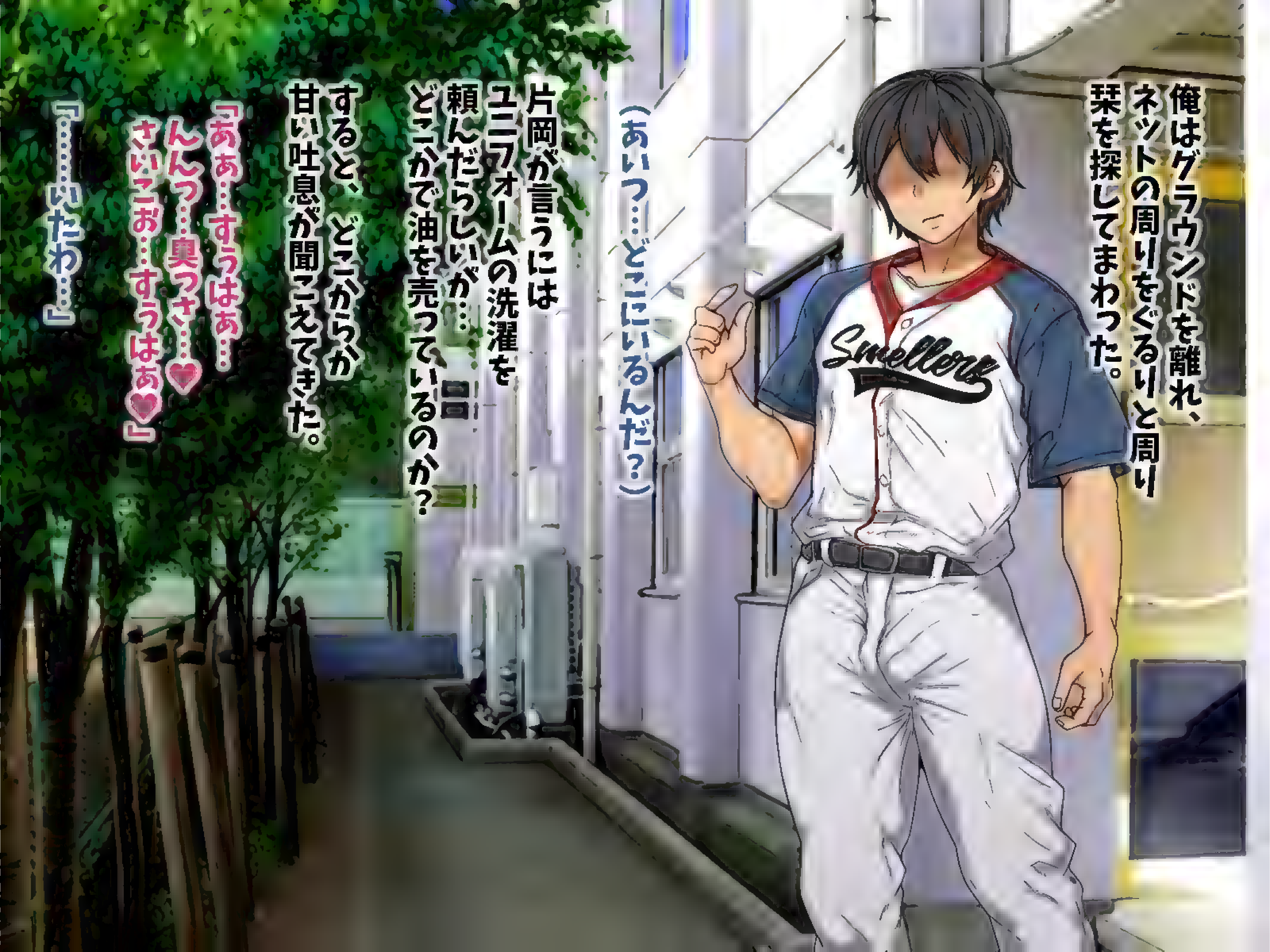
監督は身体をくるりと振り返らせ、今度は栞の鼻に金玉袋を乗せた。
「んんぁあ♥
鼻あが…塞がるぅ♥」
「この屁の匂いとセットで金玉やチンカスの匂いもばっちりと鼻孔に焼き付けるんだぞ」
「んんっ…匂いで…イっきそお…お♥」


「いいか、お前たちも田所の成長に手を貸すんだぞ。マネージャーを育成するのも大切なことだ」
「うっす！」
「わ、わかりました！」
「調教はおまかせあれ」
「田所もしっかりと部員を観察するように！」
「はい、鬼頭監督♥」


時間が来たので今日は解散な流れになった。
各々が服を来て帰り支度をしている。
「あ、ねぇねぇ…高橋」
「あ？なんだよ」
「最後にもう1回だけおちんちん嗅がせて」
「は？なんでだよ」
「う～んと…高橋の臭っさいちんぽが1番好きだからもう1回嗅ぎたいなって♥」
「お、おう…」
そうして衝撃的な1日が終わった。


2回裏
マネージャーのお仕事


翌日。
俺は同学年との練習から離れ、
グラウンドでの実践に向けた練習に参加していた。
「先輩たちに混じっての練習か…
なんだか緊張するな…」
「高橋もこうちでの練習は
あまりないだろう。
千本ノックくらいか」
「あぁ…たしかにそうっすね」
4番キャッチャーの片岡。
陽気な性格でムードメーカーだが
いじりも多いので少し煙たいところも。
「練習に集中するには
痰壷とガム捨てが欲しくなるな。
よし、高橋、田所連れてこい」
「え、栞ですか？
わっかりました！」



俺はグラウンドを離れ、
ネットの周りをぐるりと周り
栞を探してまわった。
（あいつ…どこにいるんだ？）
片岡が言うには
ユニフォームの洗濯を
頼んだらしいが…
どこかで油を売っているのか？
すると、どこからか
甘い吐息が聞こえてきた。
「あぁ…すうはぁ…
んんっ…臭っさ…♥
さいこぉ…すうはぁ♥」
『……いたわ…』



茂みに隠れた栞を発見した。
しゃがみ込んで
ユニフォームを鼻にあてていた。
「…おい…!」
「きゃっ!
って…高橋か～
びっくりした～」
あっ
「いや…驚くのはこうちだよ…
こんなとこで
何やってんだよ」


「昨日…テスト失敗しちゃったから
みんなのユニフォームを嗅いで
復習しとかなきゃな～って♥」
「あん？
片岡先輩は
洗濯して来いって
言ってたぞ？」
「洗濯したら匂い落ちちゃうでしょ？
その前に嗅いでおかなきゃ♥」
モフ
「いいけど、先輩たちが
お前を呼んでたぞ」
「うん…痰壷だよね？♥
でも待って…今すごいとこだから」
ずる


栞がユニフォームを絞ると
どばっと汗が噴き出した。
「きたぁ…こうやってぎゅ〜って絞ると
首周りの汗がどばば〜って
噴き出してくるのお…くんくん♥」
「お前すげぇな…笑」
「ツンとした…
すっごい男らしい汗臭う…♥
おまんこ…濡れてきちゃう…う♥」
はー
はー
「ほら、いいから来いって。
俺が叱られるだろ!」


俺は栞の手を引き、グラウンドまで引き連れてきた。
「片岡先輩、栞連れてきました…って…あれ？」
「片岡？あいつならトイレだとさ。さーて…痰壺もきたし練習はじめっか！」
「はぁ…了解っす！」
ピッチャーの牧原。片岡とは親友だが、どちらかといえば陰キャだ。
「あの…さっきから言ってる痰壺ってなんすか？」


「それだよ、それ笑」
「え…？」
振り向くと、ジャージを脱いだ栞の姿があった。
そして、胸元にはペンで『痰壺』と書かれている。
「お前が痰壺？」
「練習中に痰が吐きたいな～って思った時はいつでも私のお口にぺって吐き捨てていいんだよ？♥」


「それ自分で書いたのか？」
「うん…自覚するためにちゃんと自分で書けって言われて♥」
「すげぇだろ？気が向いたらお前も使ってやれ。さーてお前はファーストだったな。送球練習すっぞ！」
「よ、よろしくお願いします！」
視界に気が散る裸体を見ながら俺は先輩たちとの初の練習に身を粉にして取り組んだ。


「はぁ…はぁ…あっちぃ～
上裸になっても暑いわ」
「牧原先輩…
俺の球…どうっすか？」
「お前の送球予想以上に速いなw
他のメンバーとも連携しないと
練習試合までに対応できねぇな」
「まじっすか！」
「速くても取れなきゃ意味ねぇだろ？w
練習あるのみよ」
「た、たしかに…了解っす！」
「あ～ガッ…ちょいタンマ！
お～い～痰壺お～！」


栞が牧原のもとへ向かった。
牧原は栞がくると
すかさずパンティーの中に
手を突っ込んだ。
「はーい♥」
「ひゃっ…♥
んんんっ!」
「ふぅ~送球で突かれた手が
手マンで癒されるぜ~」
「おまんこ…んんっ
まだ敏感だから…んん♥
気持ちいよぉ…」


「俺は痰壺を頼んだんだがな～？
おら、さっさと顔上げろ」
「あっ♥
ごめんなひゃい♥」
栞は両足をガクガクさせながら
牧原の顔を見上げた。
「ほら、口開けろ！
あ～んってするんだよ。
口便器に痰くださいって
お願いしてみろ！」



栞は言われた通り
大きく口を開けると
いやらしい舌をベロっと曝け出した。
「私の～お口便器に～
先輩の臭っせ～痰カスを～
吐き捨ててください…♥」
「あぁ～いいぜ～
そのまま舌を
出したままだぞ」
牧原は口の中で
痰や唾を集結させ、
吐き出す準備をしている。
「先輩の痰…♥
いっぱい飲みたいよぉ…♥」


「おらっ…ぺっ！ぺぺっ！ぷぅっ！」
「あひゃっ…♥いっぱあい…んんん♥」
栞の舌に大量の痰が吐き捨てられていく。舌にたまった痰はそのまま喉の奥へと伝っていく。
「お、いい痰壺じゃないか。俺も使わせてもらおうか」
「おー監督！どうぞどうぞ！いくらでも吐き捨てていいですからね笑」



栞に近寄った鬼頭監督は
牧原と競うように
大量の痰と唾液を吐き捨てていく。
「ッペッ！ガーッペ！」
「んんぼぼぉ♥いっぱい…あひゃや♥」
「俺が噛んでたガムも味わいてぇよな？マネージャー笑」
「ガムもぉ…♥私のお口便器に捨ててくだしゃい…♥」


牧原は噛んでいたガムを栞の舌に当てるように吐き出した。
「おらっ…ぺっ！」
「んんぐぎいい♥口便器…い…気持ぢぃイっくううううう♥」
「おいおい、田所。イってるぞ、お前w」
「痰壺にされて絶頂してますねwまんこも潮吹いてますw」
栞は足をガクガクさせながら口を便器にされる感覚で絶頂に至った。


「よーし、田所、そのまま口を閉じてじっくりと痰を味わうんだ」
「ひゃい…♥じゅるう…れろ…」
「俺が合図したら一気に飲み込め…いいな…？」
「んぐぅう…♥」
栞は頬を膨らますほどの痰と唾液を口に含み、眉をひそめて痙攣している。
「…3…2…1…今だ、飲め！」


「ごくん…♥」
「げっぷううう…♥」
栞は痰を一気飲みすると
次の瞬間には
大きく口を開き、
大きなゲップを吐いた。
「うっわ…すげ笑
痰ゲップとか…w」
「ション便漏らして
ゲップかますとは
気に入ったようだな」
「ごめんなひゃい♥
痰…おいひぃ…ああ
汚ったなくて…
イっちゃう…うう♥」


「ふぅ～痰も出したし
練習再開すっかな～」
「もうすぐ1年が
ランニングから戻って来る頃か」
「じゃあ久しぶりにやるか～？
千本ノック…！」
「まじすか！
あれ…まじでキツいんすよね」
「まあな…でも高橋は
今日は打つ側だぞ？」
「おお！
打つ側やれるんすね！
ならちょっと楽しみかも」


「おい、田所！いるか？」
「ひゃ…ひゃいぃ…♥」
「肉ガクガクじゃねぇか笑
まあいいや…千本ノック用の
ボールもってこい！
いつもの…アレだ」
「いつもの…ですね♥」
（いつもの…？）
ニヤニヤと笑う先輩たちに指示を受け、
栞は器具庫へと向かっていった。


数十分後、１年たちが
グラウンドに集合した。
「来たか！ランニング終わりに悪いが
これから千本ノックをはじめる」
「えぇ！まじかよ！」
「高橋はそっち側か～うらやましいぜ」
「秒でぶっ倒れるかもｗ」
１年たちは阿鼻叫喚だ。
「ほら、さっさと
グラウンドに散らばれ～」
１年たちは重い足取りで
グラウンドに走っていく。
「あとは…ボールがくれば…」



「お待たせしました…♥」
「おい、栞、遅いぞ…ってうわ！化け物！」
「ひ…ひどいです…化け物じゃないですよ…♥」
「なんだ、栞かよ…なんだよ、そのぶっとんだ腹はw」
「あの…言われた通り、ボールをお尻に挿れてきました♥」
「あ？おい、お前まさか…あの俺の球全部挿れたのかよw」
「は…はい…その…挿れてたら…癖になっちゃって…気づいたら…全部挿っちゃってました」



「癖になっただ？
ったくお前は
真正のマゾだな」
「なんだ、ケツにボール挿れて
何回イった？言え」
「えと…43回…
いや…45回イきました」
「やべぇなお前…w」
「このドスケベ女が！
おら、1年が待ってんだよ、
さっさとケツ向けろ！」


栞はバッターボックスに寝転がり
まんぐり状態になると、
お尻を天に向けて突き出した。
「1年に見られないようにしろよな…ったく」
「…もうお腹苦しくて…♥」
「1年の童貞共にその容姿は刺激が強すぎだぜ笑」
「あの～これってつまりどういうことなんです？」


「こいつの腸液でボールを粘膜コーティングして滑りをよくしてるんだよ笑」
「前からしてたんすか？」
「前回からか？でも前回は2球しか入らなかったからな～」
「いっぱい拡張したので…いっぱい入りました♥」
「すげぇなまじで笑」


「よーし、まずは俺が1発かましてやるか！田所！キバれ！」
「はいい…♥」
栞はまるで便秘糞を放り出すような迫真の表情を浮かべケツ穴に力を込める。
ぐぃ
「ふんぐぅぅぅぅ♥」
「うぉお…！ボールが出てきた！」
「いいか～よく見とけよ」
ぶる


「出るぅぅ♥」
「うぉおお！ボールが勢いよく飛び出した！」
「ケツ穴えげつないな〜次のボールも丸見えじゃねえか〜」
「すげえな…！そんでもってこいつを〜」


「打つ…っ！」
カキンと音を立て、ボールがグラウンドへ弧を描き飛んでいく。1年たちはボールを追うのに必死で気づく気配はない。
「ナイスバッティング！」
「タイミングを掴む練習にもなるな〜」


「あっ…だめ…出ちゃう♥
勝手に出てっちゃううう♥」
「おいおいw
ガバガバすぎだろw
ほら、高橋！
どんどん打て！」
「了解っす！
うおおおお！」
栞のケツから噴き出るボールを
俺はタイミングよく打ち上げていく。


「お腹くるぢいよぉ…♥ボール出てくのぉ…気持ぢいいい♥」
「ごほごほっ!こいつ屁こきすぎw実を出す勢いだぜ」
「出ても不思議じゃねえけどな笑」
「はぁ…はぁ…何球入れたんだよ!」


徐々に栞のお腹も凹み、勢いも弱まってきたが、それと同時に匂いもきつくなっていく。
「ちょ…!? なんか茶色いの こびり付いてるぞ？」
「え…きゃっ♥ うんこ…付いちゃった…」
「あはは！糞付きボールかよ！1年のやつにサイン求められるぜw」
「気持ちぃ…んん♥」


「おおおらっ！」
俺は思い切りスイングし、栞の糞まみれになったボールを打ち上げた。
「うんこボール飛んでくぅ♥私の糞まみれのボール誰かに嗅がれちゃうよお…」
「腸液と糞汁まみれで臭っせぇだろうなぁ」


「おっと…球切れか？」
「んんぁっ…イっくぅっ♥
お尻すうすうするぅ♥」
栞のケツ穴は
フィストされたように
ぱっくりと拡がり、
腸内が丸見えになっていた。
「すげぇ量出たな。
こりゃ1年どもも
疲れてぶっ倒れるわｗ」
「こんなの見てたら
ちんぽ立つってのｗ」


先輩たちは栞を物陰に連れ込むと
服を脱ぎ即ハメ出した。
「ちんぽお…きたぁ♥」
「え、ちょっと！
こんな場所でいいんすか？
監督に怒られますよ！」
「いいのいいの笑
俺らはどこでも
いつでも…
セックスし放題」
「ムラムラしたら
いつでもセックスＯＫ」
「1発出してスッキリすれば
最高のパフォーマンスで
練習や試合ができるだろ？
そのためのマネージャーだよ笑」
「な、なるほど…」


先輩たちはまんこと口を
前後からぐいぐいと突いていく。
「つぢゅぼぶじゅぶ♥
んぐお…つぢゅる♥」
「いいぞ～もっと
舌使え！
カリのとこ舐めろ！」
「遠慮なくまんこ突くの
まじでいいわ～
乱暴に突いてもいいしなぁ」



「おら、イラマで咽た口開け。唾飲ませてみろ！俺のも飲め！子宮ピストンされながら飲め！」
「げほっげほ…ひゃい♥れろ…ぶっちゅう…はむぅ…っぢゅるぅ♥」
「うおおお！締まりやべぇ！子宮口突くたびに痙攣して気持ちぃ～」
（うっわ…エロぉお…w）


「時間もねぇし
そろそろイっとくか！」
「んだな！
中にぶちまけるわ！」
「はむじゅいる♥
ぢゅぼぢゅぼぼ♥
イグ…イググぐぅ♥」
先輩たちの呼吸も荒くなっていく。
口とまんこへのピストンが加速する。
「イくぞ…！」


「おら飲め！」
「んぶぼぼ♥」
「子宮に射精る！。」
牧原と片岡は同時に絶頂し、栞の口とおまんこを精液で満たしていく。


「ぷはぁ♥げほぅ♥
はぁ…はぁんん…♥」
「何咽てんだ！
ほら、ちゃんと舐めとれ！」
栞は精液まみれのちんぽを
嬉々とした表情で
舐めとっていく。
「うぉ…まだ出るわ…笑
精液子宮で満たすの
まじで最高だわ」
「お腹の中ぁ…♥
たぷたぷだよぉ…お♥」


先輩たちが服を着直していると
監督がやってきた。
「おい、遅漏ども！
さっさと練習の続きだ！
続きは部活終わりにしろ～」
「うっす！」
「高橋も射精したかった？」
「後で犯してやるって」


部活終わり、部員たちは校庭に集められた。
「もうすぐ連休だ。野球部は強化合宿を行い、更なる技術を磨く予定だ！レギュラーメンバーは全員強制参加だ！」
「うっす！」
「強化合宿か～」
「でも…今年は楽しくなりそうだぜ」


監督は横に立っている栞の肩を叩いた。
「もちろん、田所。お前も参加だ。部屋はタコ部屋1つだが…もちろん、いいよな？」
「…はい♥」
「…なるほどね～」
「頑張りがいがありますね」
そうして俺たち野球部は強化合宿に向けて計画を練るのだった。


3回表
強化合宿！あの娘を小便器に！


強化合宿当日。
１週間弱の連休をフルに使っての
試合に向けた猛特訓がはじまる。
「いつもと違う環境での練習は…
実践で役に立つからな」
バスで数時間。
山の上にあるグラウンドだ。
美味しい空気を吸いながら
鍛錬に集中することができる。
（ちなみにこの合宿のために
レギュラーメンバーは
１週間のオナ禁をすることになった…
理由は言わずもがな…）


「よう、高橋。
１年はお前だけみたいだな～」
「てかレギュラーメンバーだけっすね」
「家族と旅行だとか、
実家帰省だとか、理由述べやがって
絶対サボりだな笑
俺もレギュラーなるまで来てねぇし」
「まぁそうなりますよね～
入学最初の連休で即合宿は普通嫌ですね」
「お前らちゃんと
オナ禁してきたか～？笑」
「あー金玉パンパンだぜ…
おっと…練習前にトイレ行ってくるわ」


牧原は校内宿舎を歩き回り、
ようやくトイレにたどり着いた。
「ったくこの校内宿舎
トイレにくるのも一苦労だぜ
無駄に広いんだよな」
「あー膀胱パンパンだぜ…
朝牛乳飲みすぎちまったからか
…屁もこきてぇし…
個室ですっかな」
牧原は個室の戸を開き、
中に入室した。
すると…—。


「きゃっ…！」
「うわっ…痴女！
って…田所じゃねぇか…」
個室のドアを開くと
そこには半裸で便座に座る
栞の姿があった。
「ちょっと…先輩…
私今…トイレ中なんですよ…？
急に入ってこられて
おしっこ引っ込んじゃったじゃ
ないですか…」


「あぁ…すまん…って…違うだろうが！ここ男子トイレだし、鍵開けっ放しだし！」
栞は便座に座りながらお尻をもじもじさせ牧原を見上げるように顔を上げた。
「この宿舎なぜか女子トイレが無いんです。なので男子トイレをお借りしています」
「はぁ…でもなんで半裸なわけ？」


「これは…趣味です。服を脱いだ方がいっぱいおしっこ出るんです」
「……」
牧原は栞のことを「何言ってんだこいつ」という顔で見下ろしていた。
ぶる
「あ…そうだそうだ小便！おい、田所どけ！もう膀胱パンパンなんだよ！」
「え…でも…私もおしっこ…もう出そうなので…」
「あぁ？マネージャーは選手を優先するもんだろ！便器を貸せ！」


牧原は栞の足を掴むと
そのまま持ち上げ
便器の上でまんぐり状態にした。
「きゃっ！？
牧原先輩…何するの？」
「膀胱パンパンだし、
オナ禁で金玉もパンパン。
しかも、屁もこきてぇからよ…
全部処理するには
肉便器使うっきゃねぇだろ！ｗ」
栞は肉便器という単語を聞いて
股間をびくんと反応させる。


牧原は服を脱ぎ捨て、目の前の肉の穴に欲望のままにちんぽを突っ込んだ。
「うぉお…まんこびちょびちょ！すんなり入るなぁ！」
「だって…んんぁ♡おしっこしてたんだもん」
小便まみれのまんこに暴力的なペニスが進入していく。



「つたく…お前のまんこ見たせいで
勃起して小便でねぇじゃねぇか」
「勃起したらおしっこって
出ないんですか？」
ぶる
「まぁ出せなかねぇけど
1発出してからの方が
すんなり出るんだよ」
「じゃあ…好きなだけ
私の小便まみれのおまんこに
精液どびゅってしてくださいね♥」
「そのつもりだっての…
お！おもしろいもんがあるな」
ぐい


牧原は栞のジャージのポケットに入っていた
ゴム栓とチューブが接続された
怪しい道具を発見した。
「なんだこれは？」
ズポッ
「あ、それは…その…
お尻と鼻の穴を繋いで
おならを嗅ぐ道具です…♥」
「なんでそんなもん
持ってんだよw
まぁいいや！こりゃいい！
俺のケツとお前の鼻の穴を
繋いでやるよ！」
「えぇえ♥」
ズル


牧原のケツ穴と栞の鼻の穴がチューブによって繋がれた。
「すっげ…笑 下品な顔になったなミ」
「先輩のお尻と繋がっちゃってるんだぁ♥ すぅはぁ…んんっ 先輩のお尻の中の匂いだぁ♥」
「まぁ慌てんなって！ 今まんこ突きながら屁こいてやるからよ！」


牧原はまんこに腰を打ち付け始めた。同時にケツから下品な音を立て濃縮されたおならを栞の鼻へと排出していく。
「んんぐぉ…♥」
「あ〜まんこピストン気持ちいいぜ〜挿入するたびにちんこに響いて屁も漏れ出ちまう」
「ごほっ…んん♥先輩のおならが…ごほ！鼻の中に噴き出てるぅ」


「うぉ…屁をこくたびに
まんこが締まるぜ～
どうだ、俺の屁は臭いか！」
「臭っさいですぅ♥
頭馬鹿になっちゃううう♥」
「あーもう限界だわ！
さすがにオナ禁直後の
生ハメは刺激が強すぎるぜ～
おら、田所！中に出すぞ！」
「精液くだしゃいいいい♥」
牧原のちんぽが膨らんでいく。


「あ～射精るぅ」
『イっくぅ❤』
牧原は絶頂とともに
栞の鼻へ屁を送り出す。
それに噎せ返る栞を見て
興奮し射精を繰り返す。

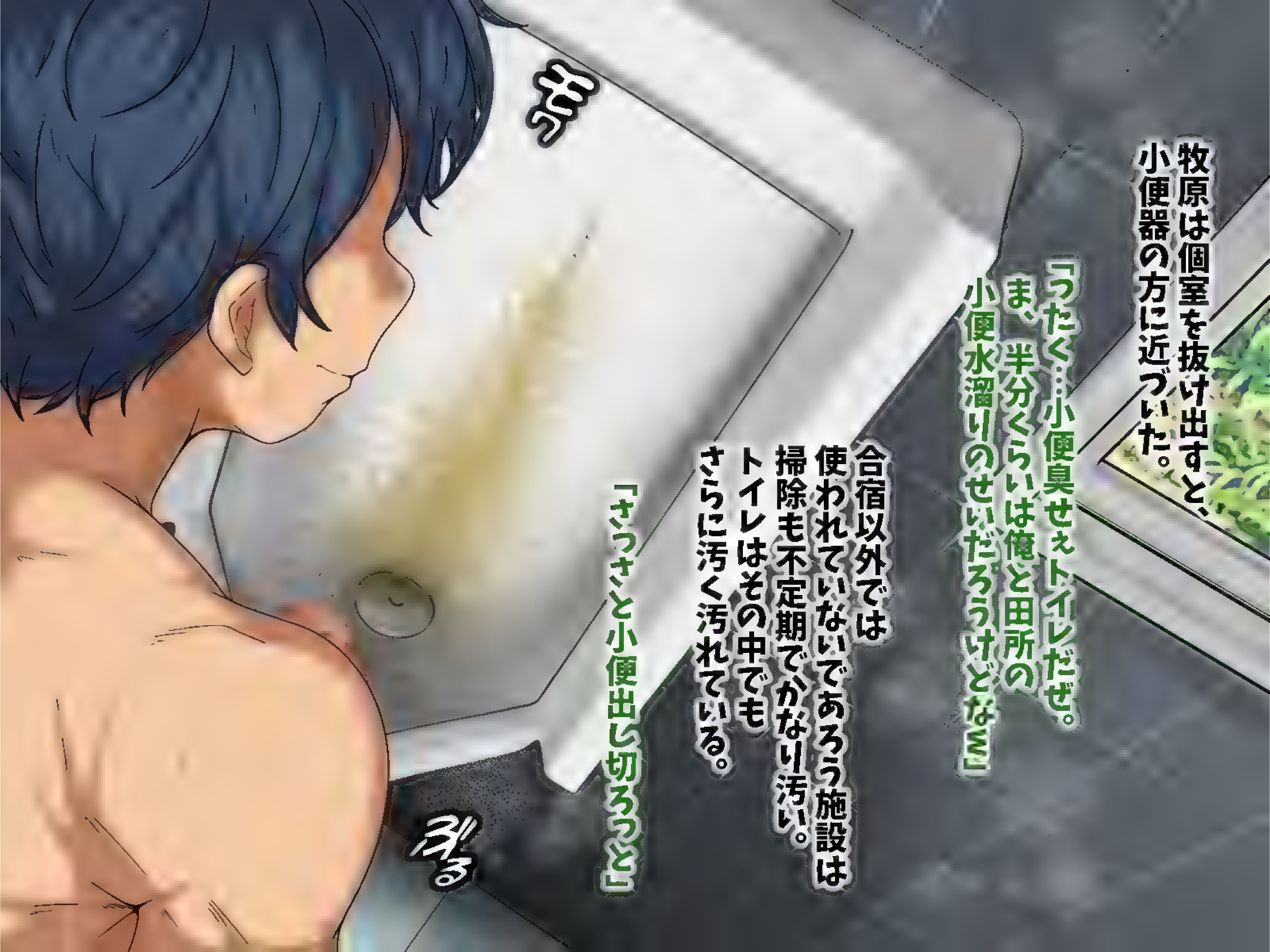


「ふい〜出た出た
勃起も落ち着いてきたな。
小便も出やすくなるぜ」
「良かったですぅ…♥
じゃあ…どきますね」
「…あ？
何言ってんだ？
肉便器っていうのはな〜
俺らの排泄物は
全部処理してくれる
便器なんだよ笑」
「ふぇ？♥
もしかして…えええ♥」
ぐい



牧原はまんこにちんぽを入れたまま
ぶるっと震え、じょろじょろじょろと
小便を排泄し始めた。
「膣内放尿だぜw」
栞のまんこからは
じょばじょばと小便が零れだし、
ダムが決壊したかのように
便器の周りは水浸しになっていく。
「しゅごいいいい♥」
プシャ〜〜


「私もおぢっこでるぅう♥」
「おい、俺にかかるだろうがw」
「まんこ…おしっこまみれで気持ぢいいい♥」
ぶる
あっ♥
ぐいっ
栞はまんこから牧原の小便を溢れさせながら尿道から自らの小便をおもらししている。
じょろろ
「まだ小便の途中だったのによw しゃーねー!!…続きはその辺の小便器ですっか笑」
もわ


牧原は個室を抜け出すと、小便器の方に近づいた。
「ったく…小便臭せぇトイレだぜ。ま、半分くらいは俺と田所の小便水溜りのせいだろうけどなw」
合宿以外では使われていないであろう施設は掃除も不定期でかなり汚い。トイレはその中でもさらに汚く汚れている。
「さっさと小便出し切ろっと」
ぶる


「あ、先輩！待ってください♥」
後ろから栞が現れ、小便器の隣に並んだ。
「あ？なんだよ！お前は今小便出し切っただろうが俺はまだ出し切ってねぇの！」
「はい♥なので…お手伝いします♥」



「私の…お手手に♥おしっこぶっかけてください♥」
「ほぉ〜狙いを定めるのを手伝ってくるわけか」
「私知ってます♥男の子っておしっこするといろんな方向に飛んでっちゃうって」
「じゃあ動かすなよ。もう出るんだからよ」


「おら！出るぞ」
牧原は栞の手目がけて小便を排尿しはじめた。
「すごい…♥あったかいっ♥」
「ふぅ～出る出るw
女の手に小便かけるの
なんか気持ちいいぜ～笑」



「おい、田所こっち向け！
おめぇの小便器顔見せてみろ」
「ひゃい…♥
お手手…気持ち…い
先輩の小便器に
なってるぅ♥」
栞の手はびちゃびちゃと
卑猥な水の音を立て
臭い飛沫をまき散らしていく。
「だが…ちょっと油断すると～」
ぷる
ぷしゃ～～



「あ〜狙いがずれちまったぜ笑」
牧原のちん先が栞の顔へ向き、栞の顔に小便がぶっかかっていく。
「ひゃあ♥あぶぼぼぼぼお」
「お手手小便器もいいが顔面小便器も捨てがたいよな〜笑」



「おら、口に含んだ分は全部ちゃんと飲めよ～」
「ひゃい…♥おぶぼじゅぶぶぶ♥おしっこぷはぁ…濃いですぅ♥」
モワ
ぶる
栞の顔は牧原の小便まみれになり、零れた分は胸や身体に流れていく。
「うへぇ～小便臭っさ…笑」


「ふぅ～やっと出きったぜ」、
「ごくごく…ぷはぁ♥
先輩のおしっこで
体中満たされちゃいました」
モワ
「全身小便まみれで
何喜んでんだ、このマゾ！
もう練習始まるんだから
おめぇも準備しろ！ｗ」
「はーい♥」
ずる


3回裏
スカっと練習！気張ってこーぜ！


野球部の合宿は継続中だ。俺と先輩たちは初夏の日差しの下、全身から汗を吹き出しながら練習に励んだ。
「おら、盗塁練習だ。高橋、投げるぞ！」
「うっす！」
「しっかし、暑いっすね。まだ夏前なのに」
「練習試合はさらに暑いだろうな。おい、マネージャー！水くれ！水！」


栞は冷えたペットボトルを持って
俺たちのもとへと駆けてきた。
「はい、どうぞ～♥」
「おい、お前なんでジャージ着てんの。
暑っ苦しいな～」
「この暑さでその格好だと
汗だくになるだろ～」
「え～私はみんなほど
汗かきじゃないですよ？♥」
「ほんとか～？
よし、見せてみろよ」



栞は俺たちに促され、服を脱ぎ、上裸になった。
「ほらっ汗かいてませんよ？♥」
「両手も上に上げろ！腋汗もチェックしねぇとな～」
「腋…ですか？♥こ、これで見えるかな？」
栞は両腕を頭上にあげ、もわんとした腋を俺たちに見せつけた。


俺と牧原は服を脱ぎ、
栞の腋に顔を近づけた。
くいっ
「くんくん…ぶほ！めっちゃメスの汗臭がするぞ？ｗ」
モワ
「汗まみれじゃねぇかｗこんなエロい腋汗噴き出しやがって」
あっ
モワ～～～ン
ぞる
「やん♡腋汗嗅いじゃやだめだよぉ…恥ずかしいよぉ…お」


牧原は立ち上がると、栞の腋にちんぽをそそり立たせた。
「腋汗まみれの嘘つき腋まんこにはお仕置きしなきゃなぁ！」
ぐいっ
「わぁ…♥すっごいバキバキぃ…めっちゃ反り返ってカリ首ビンビンだよぉ…」
「うっわ…腋コキ！」


俺も栞の腋に興奮し、
勃起したちんぽを近づけた。
モワ
「胸の付け根のとこ
グリグリすると
柔らかくていいぞ～ｗ」
あっ♡
俺は腋と胸の間の肉に
ぐいぐいと亀頭を押し付けた。
「まじっすか！
やります！」
「んんんぁっ♥
固いので両側から
グリグリされてるよぉ…♥」
ぐり
ぶる


「汗でぬるぬるしてて気持ちいいぞ〜栞」
「腋汗がローションみたいに噴き出してくるからなぁ」
ぐいっ
あっ♡
「おちんちんがアツアツで熱気で汗かいちゃうよぉ…♡」
「おい、栞！このまま腋に挟んで腋コキしてくれよ」
ずるっ


「えっ…うん♥
こ、こうかな♥」
栞が腕を下すと、
俺のちんぽが腋に挟まった。
ムチムチとした肉に
挟まれてとてもあたたかい。
「うおっおおお！
すっげ…これが腋コキ」
「あはは！
まるで腋まんこだなぁ」


「腋が擦れて…
んんっ…くすぐったいよぉ♥」
「腋毛があれば
さらに刺激いいだろうな。
もしかしてお前
剃ってんの？」
「うん♥」
ぐに
「なんだ、田所。
お前腋毛剃ってるのか？」
「えーだって…
腋毛ボーボーだなんて
恥ずかしいもん…♥」
ぶる


「まん毛とケツ毛ボーボーのくせになに言ってんだよw」
「そ、それは…♥また別物だよぉ…」
ぐい
あぁ
「よーし、俺らの精液で男性ホルモンを腋に塗りたくってやろうぜ」
「いいっすね！腋毛が生えやすくなるようにぶっかけてやりましょうよw」
ずる



俺と牧原は腋を使ってちんぽを扱いていく。
モワ
あっ
「あ～気持ちぃ…そろそろ出ちまいそうだ」
「俺も…イきそう！」
「あぁんんぁ♥おちんちんから我慢汁いっぱい溢れてくるよぉ…」
「腋まんこに種付けだ…うおお！」


「射精る！」
「熱いのきたぁ♥」
「あぁ〜出る出る」


栞の腋と胸元がどろっとした精液でべたべたになっていく。
「すっげ…いっぱい出たぜ」
「おっぱいも腋もベトベトだよぉ…♡」
「ふぅ~青空の下でぶっかけるのも開放的でいいだろ?」
「良さがわかってきましたよw」


射精して一息ついていると、
監督が近寄ってきた。
「おら、休憩が長いぞ！
さっさと服着て練習だ！
レギュラーメンバーだけで
千本ノックするぞ！」
「まじすか！
うへ～こりゃハードだ」
「ってことは田所…
また出番だなw」
「ボールですよね？♥
じゃあ…頑張って挿れてきます♥」


「ボールはここにある。
準備はここでしなさい。
あーお前ら2人で手伝ってやれ」
監督はボールがどっさりと入った篭を
俺たちの側に置いた。
「10分後にはじめるからな」
「りょうかいっす!」
「だとさ、田所。
急ぐぞ〜w」
「え…ここで…
挿れるんですかぁ?♥」


俺と牧原は栞のスカートを剥ぎ、しゃがませてケツの穴を突き出させた。
「あの…えと…今日はまだ浣腸洗浄してなくて…」
「あん？お前いつもそんなことしてたの？」
「今…ボール入れられたら…さすがにうんこが…」
「前も糞カスついてたから大丈夫だってw俺はむしろ興奮するぜ」



俺と牧原は篭からボールを掴み取った。
「で、お前はいつもこんなでかい球どうやってケツの穴に挿れてるわけ？」
「えと…頑張ってセルフフィストしてますぅ…♥」
「まじかよ笑じゃあ俺らもフィストしてケツの奥に入れないとな～」
「よーし…まずは俺が突っ込んでやるぜ」
牧原はボールを握ると栞の肛門にあてがった。



ズボっと音を立てて
牧原の太い腕がズルリと肛門に吸い込まれていく。
『ふんぐうう♥』
「うおおすげぇ！
まじで腕入ったw」
「おぢりいいいい♥
太っ…ふんぐうう♥」
「ピッチャーの腕は太いぞ〜
肛門の開き具合すっげw」
はー


「よーし奥に入れてっと…抜くぞ！」
「はにゃあ…♡」
牧原が腕を引き抜くとぱっくり開いたアナルの奥にボールがしっかりと確認できた。
くぱぁ
「すっげ～腸内丸見えw」
「ケツの中まじでぬるぬるwお前もやってみろよ」
「よーし、いれるぞ、栞！」
今度は俺が肛門に腕を伸ばした。


「奥に一気にぃ～おらっ！」
「深ついーいい♥」
「えっぐいなケツ穴ぁ田所も脚ガックガクで気持ちいいのか～？笑」
ぐい
栞の肛門はめくれあがり腕を包み込むようにまとわりついてくる。
ずる
「お尻穿られてイっちゃうよお…んん♥」


「しっかしこんな1球ずつだと時間が足りねぇなぁ！」
「2人でフィストして一気に入れるのはどうっすかね？笑」
「そうだな、そうすっか」
俺と牧原はボールを握ると2人で肛門に手を突きつけた。
「はにゃぁ…！？♥ も、もしかして…同時に…挿れちゃうの！？♥」
ぶる
くぱぁ
ぐい
はー
はー
はー


俺と牧原の2人の腕が同時に栞のケツ穴に突っ込まれた。
『ケツ穴いくぅ♥』
「うっへ〜さすがに腸ガス漏れてきたぜ〜」
「臭いっすね〜笑
めっちゃ下品で最高」
「いやぁ…嗅がないでぇ…♥」




栞は這いつくばりながらバッターボックスへと向かい、いつもの姿勢になった。
「よーし、ちゃんと球の用意はできてるな?」
「はいぃ…♥鬼頭監督♥」
「じゃあいくぞ!しっかり球拾えよ!田所!気張れ!」
「ひゃっいぃ♥ふんぐぅぅぅぅぅ♥」


「よーしいいぞ〜
勢いよく飛び出したな〜
くんくん…なんだ田所
今日はいつもより
屁が臭いぞｗ」
「ひゃっ…♥
下品で臭っさいの…
漏れちゃうぅ…」
ぶぼ〜
栞のケツからは
ボールと同時に
大量の悪臭ガスが
噴き出していく。


監督がボールを打ち上げ、俺のいる一塁へ飛んでくる。
「よしキャッチ！…くんくん…臭っさ！めっちゃ糞まみれw」
「田所の糞味噌付きだ！お前らしっかりと拾って嗅いでやれ！」
「うーっすw」
「いやぁん♥うんこ嗅がないで～臭っさいうんこぉ…いっぱい出ちゃうのぉ…♥」


栞のケツからは止めどなく糞付きボールが噴き出していく。
「よーし…次は…あん？おいおいｗ次の球は糞の塊だなｗ」
栞の肛門にうんこが顔を覗かせた。排泄をするためにどんどんガスを吹き上げていく。
「うんこ…が…♥だめだめだめぇえ♥うんこきちゃってるぅ♥肛門閉じないよおお♥」
「仕方ねぇ！田所、ここで大便ぶちまけろｗ」
「そんな…みんな見てるのにうんこ…漏れちゃううううう♥」


『脱糞るぅ♥』
琹の肛門から凄まじい勢いで糞の塊が飛び出した。下品な屁を響かせ大量の糞カスを周囲にまき散らしていく。
「すげぇ量だなぁ」
「うんごぉお…♥うんこボール噴き出しちゃううう♥」
ぶる
ぐぃ


「んんんごほ♥」
栞は自ら排泄した糞を
顔にぶちまけ
糞まみれになった。
「おいおい～ダイジョブか～？」
「うんこ…んん♥
うんこでイぐう♥」
栞は糞に埋もれながら
身体をびくびくと震わせ
脱糞アクメの余韻に
浸っていた。


4回表
練習試合だ！ダグアウトに響く声援！


厳しい強化合宿を終え、俺たちは他校との練習試合の日を迎えた。
「ついに練習試合っすね…今日の相手って…」
「真婦台場高校（まふだいばこうこう）。実績から見るに実力は俺らと変わらないがどうやら今年入った1年に剛腕鉄壁のピッチャーがいるらしい」
「天才ってやつですか」
「何の情報も無しだとさすがにやばくないか？ずっと守られたら攻めれねぇよ」



俺たちが不安げに話をしていると
監督が話に割って入ってきた。
「なーに…心配すんな」
「か、監督！
でも…やばいピッチャーが
いるんですよね？」
「データさえあれば
選手の対応なんて容易いことよ」
「え、データあるんですか？」
「きっと収集中だろうな～
我が野球部の敏腕マネージャーが」
「え？」


ところ代わり、グラウンドのバックネット。栞は他校のピッチャーと二人きりで向かい合っていた。
「で、俺に何の用？試合前なんだけど？」
「ご、ごめんね…大切な試合前に呼び出したりして…♥」
「い、いや…まあ…いいけどよ…」
「山城君だよね？♥私は田所栞。野球部のマネージャーなの」


「私…山城君と…ずっとエッチなことしたいって思ってたんだ…♥」
栞はスカートをたくし上げノーパンパイパンまんこを山城に曝け出した。
「ちょ…！？何してんだよ！か、揶揄うのもいい加減に…」
「山城君のために…ノーパンできたんだよ♥生でしたいなら…アナルも…準備してきたよ…♥」
（アナルで生ハメ…だと！？お、俺の性癖ドストライクじゃん）


「ね…？♥
試合までまだ時間あるし…
私の身体を使って
1発スッキリさせてみない？♥」
栞の甘い誘いに
山城は心を揺さぶられていく。
「だが…いや…急に
アナルセックスしていいと言われても
まだ納得が…」
「じゃあ…まずは…
私に山城君の臭っさいところ
舐めさせて欲しいの♥」
「あぁん？
臭っさいところ？…」


栞はその場にしゃがみ込んだ。
「服を脱いで、私の顔にお尻を突き出して♥」
「はぁ…！？誰かきたらどうすんだよ！」
「今日はうちの学校野球部だけだから大丈夫だよっ♥」
「わ、わかった…ケツを突き出せばいいんだな」


栞に言われるがままに山城はユニフォームを脱ぎ全裸になり、栞の顔前にケツを突き出した。
「こ、こうか？」
「あぁん♥山城君の濃いい匂いがぷんぷん漂ってくるぅ♥」
はーっ
はーっ
「おい…まさか股間の匂い嗅いでんのか？」
「そうだよ～♥すうはぁ～すううう」


栞は山城の足を掴み引き寄せ、今度は直に顔を股間に埋めた。
「ちょ…！鼻が…唇が…金玉とケツ穴に当たって…」
「毛深いんだね♥とっても濃いオスの匂いだ～すうはぁ…くんくんすうう♥」
「田所さんって…その…変態なんだね…笑」
「そ、そうかなぁ…？♥山城君の匂い…もっと嗅ぎたいな♥」


栞は右手を伸ばすと、ブランと垂れさがったちんぽを優しく指先で包み込んだ。
「うおおお…さ、触ってる？」
「お尻の穴舐めながら手コキしてあげるね♥」
はーっ
あっ♥
「ま…まじ？」
（こんなプレイ…元カノもしてくれたことねぇよ）


栞はまるで牛の乳を絞るように
山城のペニスを上下に扱いていく。
「う…うおおお…！」
「扱くたびに
オスの熱気が噴き出してくるぅ…
すうはぁ…んんっ♥」
「…うう…あ…やべ…
田所さん…あの…
気持ちよすぎておなら出そう…」
「おなら出ちゃう？♥
いいよ…我慢しないで
私の鼻にぶっこいて…♥」
ぐい
モフ
ぶる



山城の肛門からけたたましい音を立てながら屁がぶちまけられた。
「んんっごほぉ♥すっごい量のおなら…あ♥」
「ご、ごめん…今日は腹にガスめっちゃ溜まってて…」
あっ♥
「いいんだよ？♥もっと…山城君の屁くんくんしたいよ…お♥」
「ま…まじ？」


「うすぅはぁ♥
どんどん臭っさいのが
噴き出してるよ？」
「田所さんは臭いのが
好きなの？マゾ？」
「え？♥
う…うん…あの…
私…マゾだよ♥」
「なるほどなぁ…笑
もう我慢できねぇわ」
山城は腰を上げ振り返ると、
栞を地面に押し倒した。



「きゃあん♥」
「ケツ穴挿れるぞ！挿れていいんだよな？」
「うん…♥山城君の好きなようにケツ穴めちゃくちゃに犯していいんだよ？♥」
「まんこはパイパンなのにケツ穴はケツ毛びっしりか笑変態すぎだろ」
ぷる


山城は両手で栞のケツを掴み、左右に大きく拡げた。
「うぉお…柔らけえ！ケツ穴拡がって菊門が丸見えだぞ〜」
くぱぁ
「いやぁん♥そんなに拡げられたら恥ずかしいよぉ…♥」
「よーし…拡げたままぶちこんでやるぜ」
ぶる


山城は栞に覆いかぶさり、ちんぽの先端を肛門にあてがう。
「山城君のおちんちんの先っぽあたってるよぉ…♥」
「うぉ…入り口キッツ！いいか！挿れるぞ…！生でぶちこむからな！」
「うん…♥山城君のぶっといちんぽで私のアナルこじ開けてぇ♥」
「うぉおおおお！」


山城は腰をおろし、ちんぽの根本まで一気にアナルへ挿入した。
「ぶっといのきたぁ♥」
「すっげ！キッツ！ケツ穴あっつ！すげ！これがアナルセックスか！」
（元カノがやらせてくれなかった夢のプレイ…！）


「あぁ～気持ちいいぜ～
勝手に腰が動いちまう」
山城は身体を上下に動かし、
腰を栞のケツへ打ち付けていく。
「亀頭のカリが…あ、
腸壁擦って
気持ちいいよおお♥」
「すげぇなこりゃ！
あ～ケツ肉がちんぽに
絡みついてくる」
「激しっ…いいよお♥」
ぐぽっ
パン
ずる


「おらおらおら！俺のちんぽでケツ穴こじ開けてやる！」
「んいぐいいいあ♥」
山城はどんどんピストンを激しくしていく。栞のお尻は突かれるたびにぐわんぐわんとケツ肉を躍らせる。
ズポッ
「よーし一度抜くぞ～ケツの力抜けよ～おらおらおら！」
「ひや…ひやいい…♥」
ぶる


栞のアナルから
勢いよくちんぽが引き抜かれた。
「うぉ…すっげぇ
ケツの穴がぱっくり
開いたままになってるぜ！
これこれ…笑
まじでエロいわ」
「お尻…い…♥
スースーするぅ♥」
「よーし…今度は
空気を押し込むように
ピストンしてやるぜ」
くぽぉ
あ♡


「おらおらおら！こうやって空気の境を押し込むように…い！」
「ひゃあんん♥それだめだよお〜おならが…出ちゃうよお…♥」
ズポッ
「そのためにやってんだよw いいか〜勢いよく抜くからな！今度は気張れよ〜」
「なにそれ…すごいよお…♥」
ぶる


くぱぁ
「おら！気張れ！」
「ふんぐぅううう♥」
栞が肛門に力を込めると、押し込まれた空気が下品な音を立て噴き出した。
「やべっ下品すぎ～田所さん、最高だよ笑」
「えへへ…♥山城君…もっと…もっと突いてぇ♥」
ぶる


「しょうがねぇな！このマゾ女ぁ！ケツ穴掘られて感じてんのかぁ！」
「ひゃぁいい♥太っといちんぽでケツ穴犯されてイってますぅぅ♥」
「おらおらおら！臭っせぇ屁漏らしながら奥までグリグリ突かれるのがいいんだろ！おらっ！」
「いい…いいよおおお♥」


山城の金玉が膨張し、
ちんぽも膨らみ太くなっていく。
「やべ…そろそろ
イきそうだ…っ!」
「イっちゃう?…♥
山城君の子種汁出ちゃう?
いいよ…ケツまんこに…
いっぱいどぴゅってきて♥」
「うおおお!
ケツまんこの奥に
ど真ん中ストレートの中出しして
孕ませてやるよお!おら!」
「きてぇええ♥
お尻で妊娠させてぇええ♥」



ブビュッ!!
栞のアナルの中に
大量の精液が射出され、
結合部から溢れた分が
逆流して噴き出した。
「ケツでイっくぅ♥」
「射精とまらねぇ」
「お腹にいっぱい…
あっついの出てるぅ♥」
ぐぃ
ぷっ
ぶる




栞はケツからちんぽが抜けると勢いよく精液をまき散らしながら特大の屁をぶっこいた。
「おなら出ちゃうう…♥」
「おいおいぃ！屁で精液が噴き出してるじゃねえか」
くぱぁ
「精液出ちゃううう♥ゼリー精液排泄気持ちいい♥」
「エロすぎ…最高かよ笑」


地面の上でイキ続けている栞を横目に
山城は服を着直し、立ち上がった。
「田所さん、最高だったよ。
俺、もう試合の準備があるから…
あの…連絡先だけ…」
「うーん、今日は…だめ♥」
「え？なんで？」
「だって敵チームでしょ？♥
情報リーク疑われちゃうもん。
だから～今日うちに君のとこが勝ったら
もっとエッチなことしてあ・げ・る♥」
「…もっと…エッチな
…こと…ごくり」
「負けたらお預けだよ？♥
うちの野球部も猛者ぞろいだから
頑張ってね♥」
「はっ…負けねえぜ！笑」


監督の携帯が鳴った。
「鬼頭だ…ふむ…うむうむ…
そうか、よくやった。
お前も準備してグラウンドに集合しろ」
「栞からですか？」
「あぁ、うまくいったそうだ。
相手のデータを収集できたぞ」
「まじっすか笑
さすがマネージャー」
「よーし、やる気でてきたぜ」
「そろそろ試合時間だ。
お前らも最終調整しとけ」


Muffdivers
真婦台場高校
VS
Smellers
栖夢流高校


ついに試合開始だ。
まずは俺たちの先制。
1番の俺がバッターボックスへ向かう。
（こいつがピッチャーの山城か）
同じ1年とは思えない。
高身長に強靭な肩の持ち主。
おそらく俺よりも間違いなく実力は上だ。
（こいつはたしかファーストの1年…
どうせ欠員が出て適当に入れられただけの
やっつけ指名だろう。
俺の自慢の豪速ストレートをくらいな）
俺はバットを構えた。


山城は大きく振りかぶる。
（だが…俺たちには
最高のマネージャーが付いている。
あの癖は…ストレートだ！）
俺はタイミングを合わせ
大きくスイングした。
カキンと良い打撃音を響かせ、
ボールが山城の頭上を越えていく。
「ば、馬鹿な…！？」


ボールは左中間を抜け、
俺は全力で走り、
2塁まで足を進めた。
「見たか！山城！
ツーベースヒットだ！」
外野の部員たちが
大声で歓声を上げている。
「ありえない…！
俺の最強ストレートが
初球から打たれるだと…馬鹿な！」
山城はひどく動揺しているようだ。
すると、歓声の中に
黄色い声援が混ざり始めた。
「高橋～ナイスバッティング～♥」


声の主はチアガール姿の栞だった。
チアポンポンを両手に持ち、
ダグアウトで声援を送っている。
「フレ～♥フレ～♥
ス～メ～ルッ♥」
「おお！頑張るぜぇ！」
栞は大きくたわわな胸を
上下にぶるんぶるん揺らしながら
ポンポンを可愛らしく振っている。
（まさか…あれは
…田所さん！？
あんなハレンチなチア姿で…
こいつら…許せねぇ！）


その後、2番3番と凡退になり、
次は4番の片岡がバッターボックスに立つ。
（さすが、1年でピッチャーを任されただけはある。
俺に初球を打たれても
平静を保とうとしているな）
（ふん！初球はただのまぐれだ。
このまま抑えてやるぜ）
「なーにが剛腕ピッチャーだ笑
俺たちには…
最高の声援が付いている」
「フレーフレー片岡っ♥
ガンバレガンバレ…あん♥」


「おい、田所！甘い声が漏れているぞ！」
「お尻を振って応援するの恥ずかしいですぅ…んん♥」
栞はメンバーたちに囲まれ短いスカートから丸見えのお尻を可愛くフリフリと揺らしていた。
「フレ〜フレ〜スメル…んん♥あ…だめ…なんか…んん♥」


プスぅ〜と小さな音を立て
栞のお尻から小さな屁が漏れた。
「きゃっん♥
山城君とのアナルセックスの
空気がまだ残ってて
漏れ出ちゃう…ぅ♥♥」
ずる
「田所お前、あいつと
アナルセックスまでしたのかｗ
んじゃその敏感アナルを
直に見せてもらおうか！」
メンバーたちは栞のパンティーを
ぐいっと下に引きずりおろす。
「きゃっ！」


「おい、田所！大きな声を出すと気づかれちまうぞ～」
「そうだぞ～気づかれたら試合が終わっちまうからなw」
ビクッ
ぐい
ダグアウトのメンバーたちは栞のお尻の周りに顔を寄せヒクヒクと動く肛門を観察した。
「ごめんなひゃあい♥みんなの息がおまんことお尻にかかってるから…♥」


「見ろよ、このパイパン笑
ケツ毛だけ残したんだぜw」
「うぅ…股間がスースーして
慣れないんですよぉ？♥」
栞はお尻を小刻みに振り
もじもじと
恥ずかしそうにした。
ぷる
あぁ
ぐい
ぷに
「クリトリスも
まんこのビラビラも
丸見えだからなw」
「おい、お前ら！
今は片岡を応援する時だ」


「いいか、田所！お前の声の応援だけでは片岡にはパワーを届けられない」
「うう…♥私…声量そんなにないですもん…」
あっ
ずる
「しかし、お前には立派なケツ穴がある。大きなおならをまるで吹奏楽の楽器のように響かせることができる」
ぐい
「え…っ！？お…おならぁ♥」



「おら！時間がないぞ！肛門に力を込めろ！」
「ひゃぁいい…♥ふんぐぅうう♥おならっ…出るかなぁ…♥」
栞は肛門に力を込め、おならを出そうと気張っている。
ぐぃ
あっ♡
「すげぇ笑 ケツの穴がヒクヒク動いて生き物みてぇだ」


「全然出ないじゃないか！
仕方がない！
お前ら、これ使うぞ！」
監督は空気浣腸用の器具を取り出すと、琹の肛門に躊躇いなくぶち込んだ。
あっ
ズポッ
「きゃっ♥
お尻に…チューブが…
入ってきたよお…お♥」
「おおｗ
こりゃいいっすねｗ」
「おら！急げ！
どんどん注入してやれ！」


部員たちはポンプをしゅぽしゅぽと押し、栞の腸内に空気の塊を勢いよく注入していく。
「お腹にどんどんどん空気が…くるぅう…♥ガスが溜まって…苦ぢぃ…ぃ♥」
ぐい
「おらおら！試合に勝つためだ！全員田所を手伝え！しゅぽしゅぽ！」
あっ
ずっ
ぞくっ
ぶる
「おらおら！しゅぽしゅぽ！」
「だめっ…あん♥お腹で空気動くの気持ぢぃいいいぃ♥」



栞の肛門からは限界を迎えた放屁が隙間から漏れ始める。
「よし、ようやくか。時間がない。いいか、田所！片岡に盛大に屁ールを贈れ！」
ぶる
あっ
ぷぅ〜
ぷっ
ぷしぃ
「ひゃいぃあいいい♥苦ぢぃ…お腹…あ…もう出ちゃううう…う」
「俺らも応援すっぞ！フレーフレー片岡！」

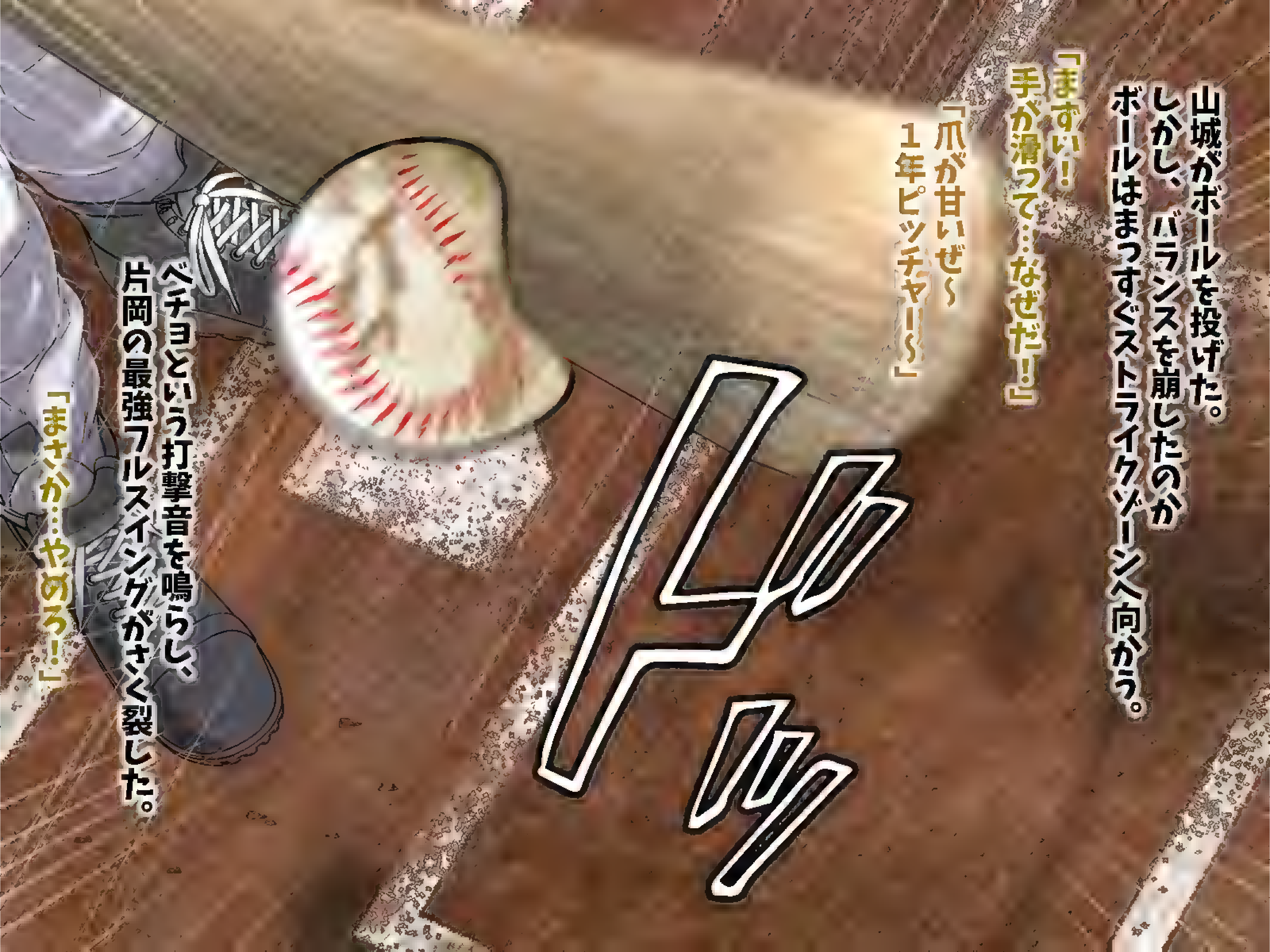

監督が勢いよく肛門のチューブを引き抜くと、大量の屁ガスが噴き出した。
「フレ～♥」
「フレ～♥」
ブッブッ♥
ブリリリリリィ♥
ブップスううう♥
ぶぶぶぶううううう♥
あっ
ぐぃ
ぞくっ
ぶる
「片…っ岡あ♥」
ブッ♥ぶううう♥
甘い声の声援と下品な穴からの声援だ。


栞は肛門からけたたましい音と
鼻が曲がりそうな匂いを
周囲にまき散らしながら
ポンポンを上下に振り続ける。
「私の屁ールでぇ…
打ってくだしゃあい♥」
「いけ！片岡！」
「がんばっ…って…
くだひゃいあいぃ…♥
屁で…イっくぅ♥」
栞は屁をこき続けながら
その場にしゃがみこんだ。


「お腹…苦ぢぃ…ぁ
臭っさい屁出るぅ♥」
「すげぇ量だな…w」
「ベンチの中が
田所の屁で充満して
カオスっすねw」
「そんな…みんなが
注入したんだよぉ？♥」


「んんぐぅ♥
残ったガス屁出るっ…
ふんぐっ…きゃん♥」
「すうはぁ…
あ～精力の出る
下品な匂いだぜぇ」
「いいか、田所！
きっとこいつらは
タイムリーを
連発して戻ってくる。
その時はご褒美として
お前の穴に即ハメだ！」
「試合中にですかぁ？♥
すっごい…わくわくしますぅ♥」


「貴様らのダグアウトは宴会場か？
何をさっきから騒いでいるんだ」
「最高の声援が
俺らの耳にも
届いたってことよ」
「あぁ…！」
「ほざいてろ！
次で終わりだ…」
（4番バッターには隠し玉の
チェンジアップで決めてやる）
片岡がバッターボックスで
バットを構える。


山城がボールを投げた。
しかし、バランスを崩したのか
ボールはまっすぐストライクゾーンへ向かう。
「まずい！
手が滑って…なぜだ！」
「爪が甘いぜ～
1年ピッチャー！～」
ベチョという打撃音を鳴らし、
片岡の最強フルスイングがさく裂した。
「まさか…やめろ！」


片岡の打った球は大きくのび、
フェンスを越えた。
「ホームランありっす～♪」
「うおおおお……！」
「バカな…あり得ない…
こんな雑魚に…先制点だと…」
外野の部員たちが
大歓声をあげて喜んでいる。
「よくやった2人とも！
計画通りだな」
「栞のおかげっすね……！」


栞から聞いたデータで
山城の癖はメンバー内で共有され、
監督が少ない基礎データと合わせ
精度の高いものにした。
チンポジを右にズラしたら、ストレート。
左にズラしたら、スライダー。
そして、ちんこを直に触って直すときは
チェンジアップを投げる合図。
栞とのアナルセックスで
山城のちんぽは
栞の腸液まみれのままだ。
シャワーに行く時間は無かった。
（腸液まみれのボールに
気づかなかった山城、…
お前の負けだ）
俺と片岡は悔しがる山城を横目に
みんなの待つダグアウトへ戻り、
すぐに服を脱いだ。


「おら！本塁打記念生ハメだ！」
「ひやぁん…いきなりきたぁ♡」
「試合中なんだから時間かけてられねぇだろw
おら！喉でしごけ！」
俺と片岡は栞の口とまんこに即ハメした。
「おらおら！こっちのバットもフルスイングだぜ～」


「なんかまんこ突くたびに屁こいてるぞ、田所ｗそんなに気持ちいいのか～ｗ」
「しょれわぁ…♥さつきの応援で…ぇ…」
「あぁ～聞こえたぞ！栞の屁ールｗ最高だったぜ」
俺と片岡の呼吸が荒くなっていく。
「やべ！もう出るわ」
「俺も…出る！」


「口に射精る！」
「あぁ～出る出る」
「イッぐぅ♥」
俺と片岡は顔を見合わせた。
「俺、トイレ行きたいと思ってたんだわ…笑」
「奇遇ですね、俺もっすw」



俺と片岡はぶるっと震えると、じょばじょばと小便を目の前の穴に排尿し始めた。
「何これ…ふぇ？♥あったかくて…苦くて…おしっこおお!?」
「あ〜膣内放尿すげ！めっちゃ出るわー〜」
じょろろろ
「うおお…口便器に小便するの気持ちぃ〜」
「お口も…お…おまんこもお…お おしっこで…満たされて気持ちぃいいいい♥」



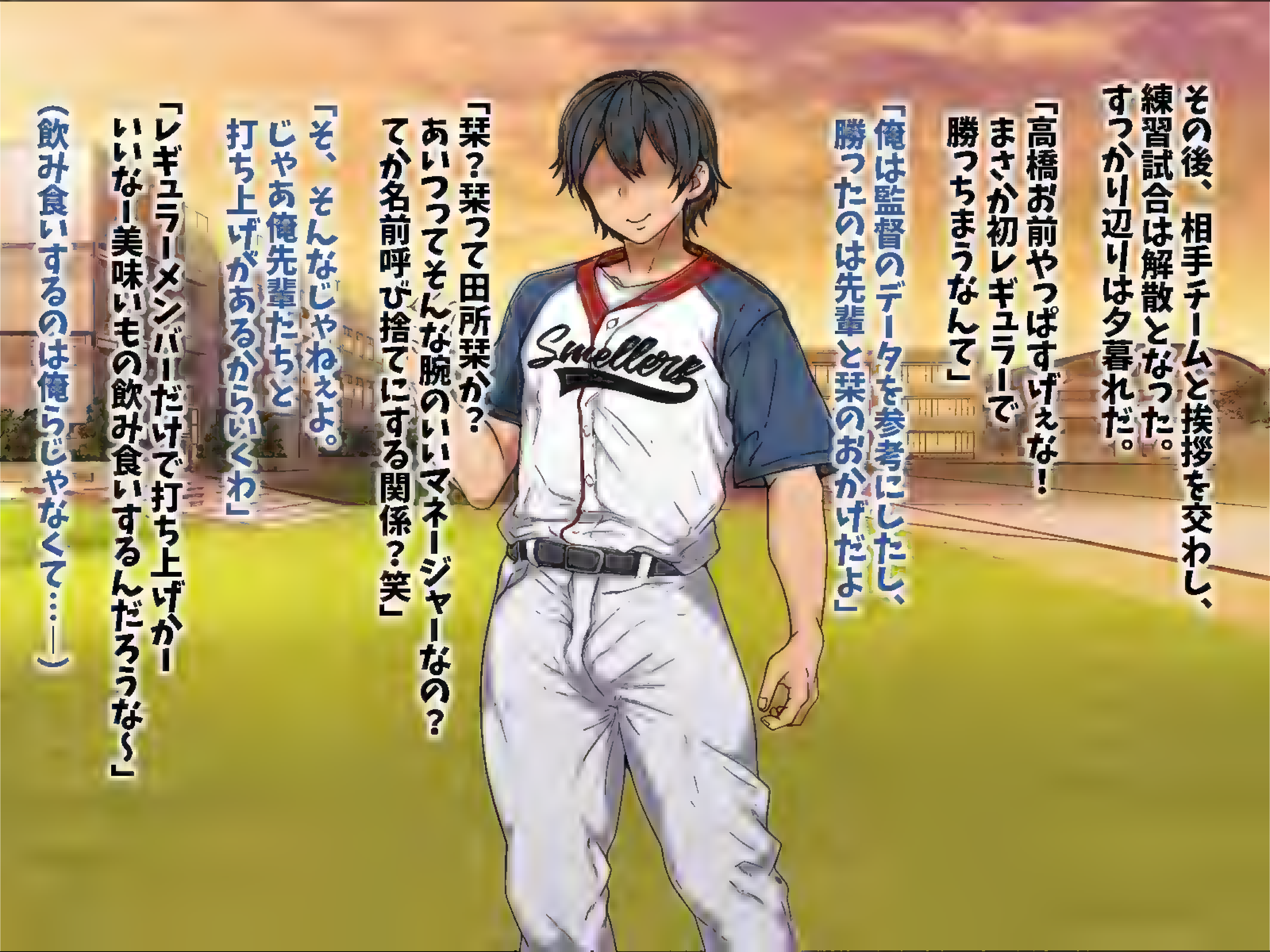
「ごくごくごく…ぷはぁ…うっぷふぅ♥高橋のおしっこ濃～っ♥」
「試合で緊張してっからな～超黄色かったぜ」
「まんこの中小便で満たしてやったぜ～ふぅ～この後の試合も頑張れそうだ」
「2人とも…お♥試合まだまだ頑張ってね♥」


「よーし、お前ら！このまま勢いを止めるな！」
「相手は動揺してます。栞のデータをフル活用しましょう」
「タイムリーを打てば俺らみたいにご褒美が待ってるぜ～」
メンバーたちは続々とバッターボックスへ列を作っていく。
「まるで穴があくのを待ってるAV男優みたいだな～」
「フレ～♥フレ～♥ス～メ～ルッ♥」
栞は小便まみれの子宮をたぷたぷ揺らしながら応援を再開した。


4回裏
勝利のぶっかけパーティ！


試合は9回裏2アウト。
点差は1点という拮抗状態だ。
最後は山城と牧原の勝負で決まる。
（牧原先輩頼みます…！）
山城がバッターボックスに向かう。
（まさか俺たちを
ここまで苦しめるとは…
栖夢流高校…一体どんな練習を…）
「これで…終わりだ！」
そして、バッティングが不得手な山城は
そのまま3ストライクをとられた。


ゲームセット！
試合は俺たち栖夢流高校の勝利となった。
メンバーたちがダグアウトから飛び出し
外野の部員たちからは歓声が飛び交う。
「うおおおお！」
「よくやった！」
「みんなすごい♥」
「やったな〜」
「おう！」
山城は栞の姿をちらりと見て
悔しそうな顔を浮かべながら
とぼとぼグラウンドから退場していった。


その後、相手チームと挨拶を交わし、
練習試合は解散となった。
すっかり辺りは夕暮れだ。
「高橋お前やっぱすげぇな！
まさか初レギュラーで
勝っちまうなんて」
「俺は監督のデータを参考にしたし、
勝ったのは先輩と栞のおかげだよ」
「栞？栞って田所栞か？
あいつってそんな腕のいいマネージャーなの？
てか名前呼び捨てにする関係？笑」
「そ、そんなじゃねぇよ。
じゃあ俺先輩たちと
打ち上げがあるからいくわ」
「レギュラーメンバーだけで打ち上げかー
いいなー美味いもの飲み食いするんだろうな～」
（飲み食いするのは俺らじゃなくて…―）


体育器具庫に入ると、
もわんとした熱気が身体を包んだ。
「遅いぞ～高橋！」
「すんません！」
栞は先輩たちに囲まれ、
両手に空のジョッキを
持たされていた。
「やっと出せるぜw」


「今回の功労者であるマネージャーへの感謝を込めて俺らのジュースを注ぎ入れるぜ！」
「もう喉カラカラだよぉ♥」
「高橋、お前もジョッキに出せよ～」
「うっす！」


「よーし、お前ら、いくぞぉ!!」
監督の合図で部員たちが一斉に精液や小便をジョッキに注ぎだした。
「すごい勢い…あは♥どんどん重くなってくぅ♥」
空のジョッキは瞬く間に満たされていく。


「おいおい、ジョッキから溢れちまうぜ！国所、どんどん飲め！」
「零すんじゃないぞ～ごくごくと一気に行け！」
「う、うん…じゃあいただきますう♥」
栞は小便の入ったジョッキを口に近づけるとそのまま一気飲みをするようにジョッキを傾け喉を鳴らし飲み始めた。


「ごくごく…ぶはっ！ごくごくぅ♥」
「俺らの小便は美味いか～？笑」
「ごくごく♥ぷはぁ…はい♥とっても濃くて生温くておいひぃ♥」
「おら！田所！ザーメンの方も溢れそうだぞ！」



「牛乳だと思ってじゃんじゃん飲めよ〜」
「ひゃい…ごくごく♥ごほ！生臭っ…い♥」
あっ♥
「ザーメン一気！ザーメン一気！〜」
「ごくごくごく♥ぶふっ…ごほ…じゅる♥」
栞は噎せながらも喉を大きく鳴らしながら固形に近いぷりぷりザーメンを胃に流し込んでいく。


ジョッキには止めどなく
おかわりの小便と精液が注がれる。
「栞！どんどん飲め！」
「も…もう…お腹ぱんぱんだよぉ…♥」
栞の腹が膨らんでいく。
小便と精液で胃が満たされ
辺りに生臭い匂いが充満していく。
「どうした田所！部員たちが出したものは全部飲んでやるのが真のマネージャーだぞ！」


「ひやい…ごくごく♥
…ごく…」
『ごふっ…♥』
あっ
栞は鼻から勢いよく
白いねばねばした液体を
逆流させた。
「うっわ汚ねぇなぁ
鼻から噴射しやがった」
『口の中に
飲み込めないで
残してんじゃねぇか？
おい、一気に行け！』
ずる



「お腹…いっぱいで…飲み込めないよぉ…♥」
「鼻から零しすぎw」
「精液はもぐもぐして飲み込みやすくしろよw」
「うん…もぐもぐ…ぐふぅ…ごっくん…♥」
「ちゃんと飲んだか？口開けて舌出して見せてみろ！」



「ひゃい…飲みまし―」
「げぇぇエぷふぅ…♥」
あっ
んぷっ
ゲェ
ぷぅ♥
栞は口を開けると舌を垂らしながら下品なゲップを噴出した。
「うへぇ～ゲップでか」
「ザーメンと小便で栞のゲップめっちゃ生臭せぇ」
「ゲップ止まんないよぉ…」


「あーやべ…興奮してきた。シコるの止まんねぇわw」
「よーし、お前ら次は勝利のぶっかけパーティだ」
「すごい…熱気…♥」
「田所！野球帽を脱げ。お前の野球帽をこいつらの精液便器にしてやれ」
「俺も…はやく射精したいぜ…！」


「野球帽…ですか？♥
こ、こうですか？」
栞は監督の指示通り、
野球帽を脱いで
両手で抱えて差し出した。
「監督、ここに
出すんですか？」
「そうだ、田所の野球帽便器に
たっくさんぶちまけてやれ！」
「こうおおお！
出すぞ！いくぞ！」


「あ〜出る出る…
田所の野球帽に出る〜」
「あんん…私の帽子が…
みんなのでどろどろに
なってくよぉ…♥」
「すっげ！笑」
栞の野球帽には
みるみるザーメンが溜まり、
大量のチン毛が浮いている。


「どうだ、田所。頭から被りたくなるような大量のザーメンだろう」
「くんくん…すぅはぁ～♥イカ臭くて好きぃ…い…精液まみれになりたいですぅ…♥」
「そうか、ならやることはわかるよなぁ？笑」
部員たちは下衆い笑顔を浮かべる。
「あは♥うん…じゃあ…見ててね♥」
モワ


「えい…♥」
栞は精液まみれの野球帽を頭に乗せ、深くかぶった。溢れ出したザー汁は栞の髪の毛を伝い垂れ落ちていく。
「うっわ…臭っさ笑」
「イカ臭せぇ～鼻がおかしくなるぜ笑」
モワ
まるでビールかけのように栞は頭から液体を浴びていく。部員たち十数人のちん毛入りザーメンだ。


「すっごい…よぉお♥
髪の毛がみんなの精液で
ベトベトになってくぅ…♥」
「やばすぎ笑
お前今日帰り
そのまま帰れよ？ｗ」
部員たちが
満足し終えるのを見て
監督が立ち上がった。
「おら、立て田所！
俺からも感謝のザーメンだ」

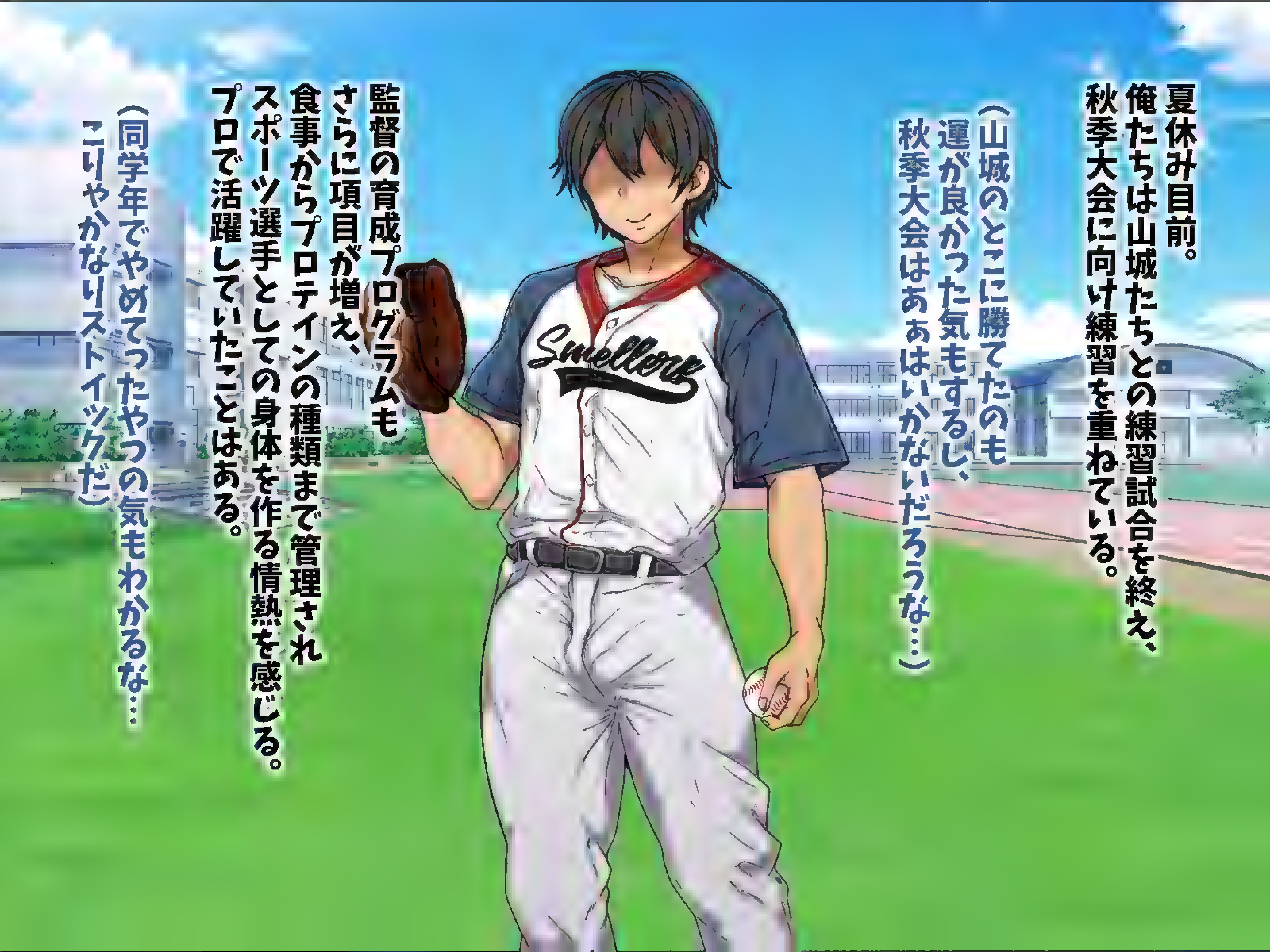

監督は栞を起き上がらせると
躊躇いなく口にちんぽを突っ込んだ。
「おら！咥えろ！」
「鬼頭監督のお♥
おちんちん…っ♥
今日も匂いが濃いよお…お♥」
「大人のちんぽの味も
覚えていくんだぞ～
お前をプロでも通用する
敏腕マネージャーに調教してやるからな」


「うぢゅぼっぢゅるる♥
ぶぼっっじゅぶぶ♥
喉深っ…気持ぢぃいい♥」
「田所は監督のイラマで
いつもイっちまうよなw」
あっ♥
ぐい
「喉奥のGスポットを
ガンガン突いてやるんだ。
そして…一気に喉奥に挿れる」
監督は栞の帽子のツバを掴み
ぐいっと喉奥へちんぽを突っ込む。


栞は喉奥を突かれるたびにお尻から屁を漏らし始める。
「田所ぉ！屁が漏れてるぞ！さっきの空気浣腸がまだ残っていたかぁ」
「ごめんなひゃいぃ…♥イラマされて放屁して…気持ぢっいぃ…んんぁイく…♥」
「今日は頑張ったからな。お前には俺からも特濃ザーメンをくれてやろう！イくぞ…っ！」


「あ～射精るぅ」
「喉イっくぅ♥」
監督の親父精液が
栞の口にどくどくと射出されていく。
栞が足を小鹿のように震わせ
何度もイってしまっていた。
「すっげ…田所のやつ
イきすぎだろ…」
「俺、また勃起してきた…笑」
その後も俺と先輩たちは満足するまで
栞に精液や小便をぶっかけまくった。


5回表
もしドマゾの女子マネが
エロ本の『排泄管理』を読んだら


夏休み目前。
俺たちは山城たちとの練習試合を終え、
秋季大会に向け練習を重ねている。
（山城のところに勝てたのも
運が良かった気もするし、
秋季大会はぁぁはいかないだろうな…）
監督の育成プログラムも
さらに項目が増え、
食事からプロテインの種類まで管理され
スポーツ選手としての身体を作る情熱を感じる。
プロで活躍していたことはある。
（同学年でやめてったやつの気もわかるな…
こりゃかなりストイックだ）


「監督…！私も…みんなと同じように…」
「すまんが俺には…」
「…そんな…」
栞と鬼頭監督が真剣な面持ちで何かを話している。
（栞と監督…どうかしたのか？）
俺は2人に声をかけた。
「何かあったんですか？」


「高橋か、実は田所の特訓メニューなんだが
選手のものを作るので精いっぱいで
マネージャーまで手が回らなくてな」
「私ももっと…マネージャーとして
みんなと一緒に成長したいの…」
「気持ちはわかるけど…
監督にこれ以上無理させるのは…
何か手はないですかね…」
「ふむ……あぁ…そうだ。
良いマネージャーというのは
選手たちの願望を形にしてくれるものだ。
屁をこけと言われたら屁をこき、
小便をしろと言われたらおもらしでもする」


監督は俺の肩を叩いた。
「高橋、しばらくお前が田所の特訓メニューを決めてやれ」
「えええええ……！？俺ですか？でも俺……マネージャーの業務とかわかんないっす……」
「大丈夫だよ、高橋。さっき監督が言ったように……願望を形にするのが……私の役目♥」
「何をするのも……お前の……自由だ」
「何をするのも……俺の……自由……ごくり」
そう告げると監督はグラウンドへ向かってしまった。


「栞…本当に俺の言ったとおりの
特訓を実践するんだな？」
「うん♥
みんなのためだったら
私なんでもするよ？♥」
「…わかった。
なら、明日までに
この本の内容を読み込んでおけ。
そして実践をはじめろ」
「…？この本？
えーと『マゾ豚の排泄管理』…？」
「いいからちゃんと読めよ？
これは特訓なんだからな」
「うん♥ありがと、高橋♥」
栞は役目を与えられてウキウキしながら
俺の差し出した本を受け取った。


その後、夏休み前の定期試験で
部活動は１週間近く休みになった。
学業も疎かにしてはいけない。
１週間ぶりの部活動だ。
「先輩、テストどうでした？」
「２年の範囲難すぎ。あんなの解けるかっての」
「それはお前が授業寝すぎ」
「テスト期間中、田所便器が使えなかったのもあるぜ…手コキオナニーじゃ満足感が無ぇわ」
「それ、言えてる。おい！田所！」
「は～い…っ…♥」
Smellers


栞は俺たちに近寄ってくると、
ジャージのファスナーを下げ
大きなお腹を見せつけた。
「うお、お前、なんだその腹
今日は千本ノックの日じゃねえぞ」
「ボールは挿れてないですよ」
「あっ？じゃあなんだよ
まさか、妊娠したとか
言う気か？」
「違うよぉ～♥
高橋からもらったこの本に
書いてあることを実践中なんです」


「先週俺が栞に実践するように言ったんです笑」
牧原は本の表紙を覗き込んだ。
「えーなになに……うはっ…エグ笑」
「本に書いてあったんです…う管理された者は管理者の許可なく一切の排泄を禁止することって」
「じゃあお前、この1週間ずっと糞我慢してんの？笑」
「は、はい…結構キツくなってきましたぁ…それにうんこだけじゃなくて…おしっこも…我慢してるんですぅ♥」


「頭イカれすぎだろ笑
この腹には1週間分の
糞と尿が詰まってるのか〜笑」
牧原は手を伸ばすと
栞のカエル腹をさすり出した。
「ひぎぃいいい♥
せ、先輩…今は…
触っちゃやだめぇ…！」
あっ♥
ぎゅる
「すっげ…笑
腹がぎゅるぎゅる言ってるの
手にも伝わってくるぜ」
「んぐぅっ…ぁあ
はぁ…はぁ…♥」


カエル腹を揉まれるたびに栞はとんでもない匂いの屁を漏らしていく。
「うわ…臭っさ！栞の屁やべぇ笑」
「便秘中の母ちゃんの屁より臭せぇなこりゃ笑」
「おなら…んぁ♥漏れりゅ…っ」
ぐい
ぷ～
「1週間分の屁ガスが撒き散らされてるなぁ」
「先輩…下腹はだめ…んんぁそこ…膀胱…んんぁ♥」


「もう…だめ…立ってられないよ…お♥」
栞はその場にしゃがみこんだ。
ぶる
「膀胱がたぷたぷでぇ…♥
苦しいけど…ぞくぞくするぅ♥」
「うっわ…エロ笑
俺…我慢できないっす」
「俺も」


俺たちは服を脱ぎ、栞の周りを取り囲んだ。
「栞、初回だからなおもらししてもいいぜw」
「え…パンツ履いたままおもらしするの？♥」
「我慢できねぇんだろ？おもらしするんだからやっぱ履いたままがいいだろ笑」


「うん…♥じゃあパンツ履いたまま
おしっこ…だ…出すね…♥」
そういうと栞は股間をもじもじさせ、
甘い吐息を吐き出した。
「お、パンティーが
黄色く染まり始めたぞ？」
「おいおい、なんだよその量は
尿道開いてねぇぞ！」
「でもぉ…♥
勢いよく出したら…
尿道壊れちゃうよぉ…♥」
「いいから我慢せずに
思いっきり出せ！」
ぶる


「あぁ…出ちゃううう♥
おもらし止まらないよぉ♥」
琴のパンティーから
勢いよく小便が漏れていく。
グラウンドの地面が
黄色い液体で染まっていく。
「すっげ笑
パンティー越しで
この勢いかよw」
「我慢してた小便だから
めっちゃ黄色いなw
匂いも濃いのが漂ってくるぜ笑」
「ダムが決壊したみたいで
勢いが普通じゃやねえなw」


「あぁ…いっぱい…♥
まだお腹にいっぱいいっぱい
残ってるよぉ…んんぁ♥」
「すげぇ量だな〜」
「なぁ栞！
そのパンティー使って
手コキしてくれよ」
「ふぇ？♥
でもこのパンツ…
おしっこでびちょびちょだよ？」
「だからいいんだろ〜
ほら、はやくしろって」


栞は小便をしながら
パンティーをさっと脱ぎ、
俺のちんぽを手とパンティーで
包み込んだ。
あ♡
「こ、こうかな？♡」
「うおおお！
あぁいいぞ…
栞の人肌おしっこで
ちんぽ包み込まれてる」
「高橋もなかなか
変態だよなぁ
ま、人のこと言えねえけど」
「あ～小便の匂いで
手コキとまんねぇ」
ぐい
プシャ～～



「あぁんっ♥おしっこ止まらないっ♥おならも漏れちゃうぅ」
栞は小便をしながら臭っさい屁を撒き散らす。
「外にいるのにめっちゃ臭せぇなw下品すぎるぜ」
「あー射精しそ！栞の小便にぶちまけてやるぜ」
「俺も…イきそ！」


「ああ射精る！」
「ひやぁん♥すごい…おちんちん跳ねてるぅ♥」
「やっぱ射精は生の女をオカズにするに限るぜ〜ミ」


「ふう出た出た。田所の小便と混ざりあってるぜ～」
「ふう～すずげ…小便手コキ気持ち～」
「小便も出し切ったようだなぁ何リットル分出したんだよ笑」
「う…うん…んっ♥でも…今度はお腹が…もう限界っ…い…♥」



栞の肛門からはどんどん濃いおならが排出されていく。
「お腹ぎゅるぎゅるいって苦ぢい…んんぁ♥」
「その割には何で嬉しそうな顔してんだよ笑」
「苦しくて…ぞくぞくして…その…感じちゃうんです…う♥」


「あ、そうだ、これ履けよ笑」
俺はさっき脱がせた小便と精液まみれのパンティーを栞に履かせた。
「ふえっ！？♥もう…お腹限界なの…」
「あぁ、排便は許可してやるよ。そのパンティーの中にな！ｗ」
「小便漏らしたんだからうんこも漏らさないとなｗ」
「パンツにおもらし…っ♥」


栞はお腹を押さえながら
ぎゅるぎゅると下痢のような屁を
漏らし始める。
「はんぐぅぅ…♥
もう…出ちゃう…う
一気にきそう…♥」
ぶる
「1週間分の糞を
お漏らしだぜぇ」
「あ…だめっ♥
出る出る出る…ううう♥」
「おら！ぶちまけろ！」


「脱糞りゅうう♥」
栞のパンティーが一気に茶色く染まり、
こんもりと膨らんでいく。
そして糞汁がボタボタと垂れ下ちる。
「脱糞気持ちいい♥
うんこでイくぅ…あ
うんぢ…うんぢぃぃ♥」
「1週間ぶりの排便は
さぞかし気持ちが
いいだろうなぁ」



「あぁんんぁ…♥
パンツの中が…んんぁ
うんこでいっぱ～い♥」
「うへぇ～パンティー
糞まみれでエロすぎ笑」
「はぁ…はぁ…♥
お腹…引っ込んできた…」
栞のカエル腹は
糞をひり出したことで
元のサイズに戻っていった。


片岡は栞の持っていた本を手に取り、
中身をパラパラとめくった。
「おいおい、この本によると
1週間なんて
初歩レベルじゃねぇか笑」
「う…うん…♥
でも…自分でやってるだけだと
すぐ挫折しちゃうでしょ？♥」
「誰かが栞の排泄を
管理してやる必要がありますね～笑」
俺と先輩たちは顔を見合わせ
下衆い笑みを浮かべるのだった。


5回裏
うちのマネージャーってマジのマゾ?


その後、俺たちは栞の排泄を管理し始めた。
我慢できなくなったら、
俺たちに連絡をとり、
指定された場所で排泄をする。
排泄するなと言われたら
そのまま我慢しなければならない。
栞は、我慢して冷や汗をかく感覚が
ぞくぞくするので気に入ってしまい、
排泄我慢でイくようになっていった。
俺はお腹を圧迫させるために
栞にパンストを常時履くように命令した。
そして、直近の排泄から2週間が過ぎた…。


「おい、田所！
って…糞の時間かw」
栞はグラウンドの真ん中で
パンスト姿でうずくまっていた。
もこ
ぶる
「もう無理ですぅぅぅ♥
お腹破裂しちゃうよおお」
「おいおい、今度は
何日許可与えなかったんだ」
「田所がもっともっともっとって
言うもんで、2週間ですねw」


「まだ許可出してないんだから今はうんこ禁止～」
「む、無理だよぉ…♥もう歩けないもん…っ出ちゃう…のぉ♥」
「さすがに腹膨れすぎだなw」
「いいのか、栞。パンスト履いたままだぞw」
「もうどこでもいいからうんこしたいのぉぉ♥」



栞はパンストの中に
どぶどぶどぶとけたたましい音を立てながら
大量の糞をひり出していく。
「脱糞るのおお♥」
「うっわ…今までで
一番すげぇ量…笑
まだまだ出るじゃん」
「2週間ぶり脱糞
気持ちいいいいい♥
うんこでイくっ…んんっ
脱糞アクメしゅるぅぅ♥」
ぶる



「何ひとりで楽しんでんだよっ!!w」
俺は栞のパンストを掴むとパンティーと一緒にズリ下ろした。
「きゃっ♥脱糞中なのに…♥グラウンドに落ちちゃう…♥」
「グラウンドで野糞だと!笑
田所!お仕置きだな!」
監督は栞の身体を引き寄せた。




「このっガバガバ肛門がっ!w」
パン!という良い音を響かせ俺は栞のお尻を叩いた。
「ひゃぁん♥ペンペンだめぇえ♥」
ぶる
パ
ぐぃ
「お仕置きといえばお尻ペンペンだよなw おら、ケツ上げろ」
「部員の体調管理はマネージャーの役目。マネージャーを躾けるのは部員の役目だぞ~」


「うへぇ肛門糞まみれじゃん笑
このスカトロ女ぁ！反省しろ～！ミ」
パン！パン！
「ひやぁいぃい♥
うんこ漏らして…
ごめんなひゃい…んんぁ♥」
「ケツが手の形に
真っ赤に腫れてくぜミ
スケベすぎミ」
「おら！田所！
口も使って反省しろ！」


「はむぅっじゅっぢゅ♥
おなりゃも…出ちゃうぅ♥」
栞はケツを叩かれながら肛門から屁をこいていく。
「うっわ臭っせ！熟成されたおならだぜ」
「おらおら！ケツぶっ叩かれて感じてんのか！田所！」
「ひゃい…お尻叩かれておまんこもアナルもびくんって反応しちゃいますぅ♥」


『だめぇ出りゅ♥』
栞はしゃがみこむと
さっき出した糞の上に
追加の糞をひり出していく。
「すげぇ勢いよく
飛び出してくるぜw」
赤く腫れたお尻から
肛門を大きく広げ
糞の塊がぶちまけられていく。


栞の足元には巨大な糞の山ができ、肛門は糞の形に大きく開いていた。
「はぁ…はぁ…うんこ出た…ぁ♥」
「なんだよ、この量w 狂ってやがるw」
「おら！田所！糞出して満足したか？w フェラの続きだ！」
「ひゃい…い♥」


「はむぅ…じゅるるぅぅ♡」
栞は監督のちんぽをフェラし始めた。
俺と牧原は栞のお尻に近づき、
山になっている糞を指さした。
「すげぇ糞の量だな。
一度で出すには多すぎ笑」
「なんかもったいないっすね笑
もう1回排泄させるとか
できないっすかねぇ？」
「あぁん？笑
おい、それ名案」



「なんでって…こうするためだよっ!」
「ひやうう♥」
糞を握った牧原の腕が栞のケツの奥へ突っ込まれた。
「せっかく脱糞したのにぃ…戻しちゃやだよお♥んんぁあ♥」
「何度でも脱糞を楽しめるんだぜ?ｗお前は監督のちんぽを舐めるのに集中してろよ笑」



「俺も…奥に…っと!」
『ぶぼぼおお♥』
「おぉ…フィストされると喉の奥が締まって気持ちいいぞ~」
おご
ぐい
モワ
栞の肛門からはどろっとした腸汁が溢れ出し、ひどい悪臭を漂わせている。
ずる
「お尻ほじほじ…もうだめぇぇ…っ♥」


「何言ってんだ～お前が出した糞がまだあんだよ」
「一気に突っ込んじゃいましょ」
「てか押し込まないと入りきらない量だぞ≡どうやって貯めこんでたんだか≡」
ぶる
あっ♡
ぐい
モワ～～ッ
モワ
俺と牧原は糞を掴み取ると2人で肛門に手を伸ばす。
「あぁ…イきそう！」
「じゅっりっぢゅっぢゅ♡」



俺と牧原の腕が同時にフィストされ、糞汁を噴射させせながら糞が戻されていく。
「いぐううううう♥」
「あ～喉締まるぅ！精液出る…ぁぁ…全部飲めよ～」
監督の精液も口内射精され、口とアナルを同時に責められた栞は身体を大きく揺らし絶頂した。
「あぶぢゅぼぉおおお♥精液…ごく…じゅるる♥ケツ穴ぁ拡がりゅ…ぁぁぁ♥」


栞のケツ穴は再び糞で溢れ、
雑に詰戻したせいで
栞の腹はぎゅるぎゅると
拒絶反応の腹痛音を奏でている。
「お腹…苦ぢいぃ♥
またうんこで…
いっぱいになってるよぉ…」
ぶる
くぽぉ
ぐぃ
「すっげ…糞まみれw
こんなの見たことないわw」
「無理だよぉ…♥
お腹痛いからすぐ
出ちゃうよぉ…お♥」
「まぁ慌てんなよ、栞」


俺は腹の膨れた栞を
地面の上に押し倒し、
まんぐり返しにさせた。
「きゃっ…ん♥
もうだめぇ…
またアクメきちゃう…」
「だから
慌てんなって笑
俺が出させてやるよ」
ドリュッ
栞はケツからおならを連発させ
すぐにでも脱糞しそうだ。


俺は栞の上にまたがり、ちんぽをまんこに突っ込んだ。
「ふぇえ…え♥今おまんこ突かれたら絶対うんこ漏れちゃううう♥」
「子宮をガンガン突かれながらブリブリ脱糞するのは気持ちいいだろうな～？ｗ」
「体重のせちゃ…んんぁあ♥」


「密着しながらピストンしてやるぜ！」
「高橋い♥だめぇえ！お腹に体重のせながらおまんこ突かれてぇ…あああ♥」
俺はわざと腹を押しながら栞のまんこを突いていく。
「すごいぞ、栞～子宮口突くたびに下品な屁が漏れてくる」


「らめぇぇぇぇ♥
激しっ…いいよぉぉぉ♥
お腹苦じぃぃ…イっちゃううう♥」
「おらおらおらおら！
セックスしながら
脱糞アクメしろ！」
腰をガンガン押し付け
俺はピストンを加速させていく。
「あひや…っ♥
もう脱糞るぅ…あぁぁ
糞の塊きてるううう♥」



「おら！出せ！」
俺は子宮の中へ
ぐいっと一気に
ちんぽを押し入れた。
「うんぢぃいで
イっくぅっ♥」


栞は大きな糞の塊を噴出し、身体をびくびくと痙攣させている。しかし、俺のピストンは終わらない。
「おら！何休んでるんだ！まだ腹は膨れてるぜ？全部出すんだろぉ！ｗ」
「イってるぅの♥キモぢいいあぁああ壊れ…りゅうぅ♥」
「あーイきそ…種付けするぞ！種付けされながら脱糞しろ！」

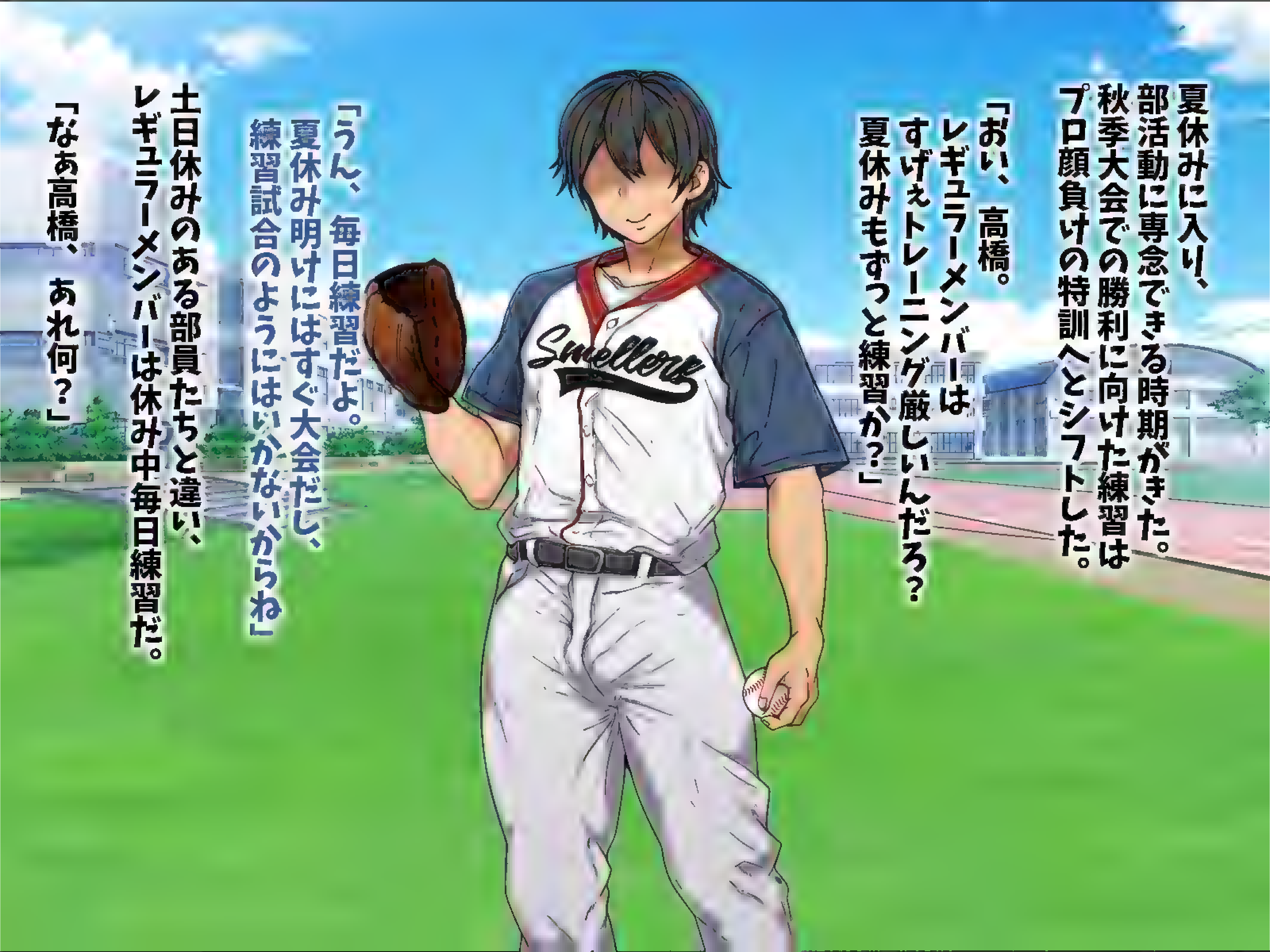

「奥に出る…!」
「あぎゃや♥」
栞の肛門は決壊し、糞の塊や糞カスなどを周囲にまき散らしていく。
ブリッ


「あ…あひゃ…あへぇ♥
うんこ…うんぢぃ…あぁは♥」
「ふぅ～出た出た。
うっわ…すげぇ糞の量ｗ」
あっ♥
「おひり…イくぅ…
おまんこ…気持ぢぃ…♥」
「膣内からも
糞が噴き出る感触がわかって
気持ちよかった～」
ぶる
モリ



まんこからちんぽを抜くと
栞はじょばじょばと小便を漏らした。
「おぢっこでイくぅ♥
おなりや…おならで
またイっく…いくいく…ぅ」
「高橋、お前ドSだなーw」
「いや～うちのマネージャーが
マジのマゾなだけですよ」
栞はそのまま
小便を漏らしながら
失禁してしまった。


6回表
小麦色の眼鏡っ娘


夏休みに入り、
部活動に専念できる時期がきた。
秋季大会での勝利に向けた練習は
プロ顔負けの特訓へとシフトした。
「おい、高橋。
レギュラーメンバーは
すげぇトレーニング厳しいんだろ？
夏休みもずっと練習か？」
「うん、毎日練習だよ。
夏休み明けにはすぐ大会だし、
練習試合のようにはいかないからね」
土日休みのある部員たちと違い、
レギュラーメンバーは休み中毎日練習だ。
「なぁ高橋、あれ何？」
Smellers


同学年の部員が指さしたのは
ビキニ姿の栞だった。
「何って…しお…田所だろ」
「いや…なんで
ビキニ姿なんだ…」
「ジャージ姿だと暑苦しいからって
監督と先輩が涼しい服を勧めたんだよ。
そしたらあいつがアレ着てきたわけ」
「てかあいつ地味な女だと
思ってたけど
さすがにビキニ着ると…
エロく見えるな笑…」


栞のビキニはどう見てもスケスケで見せてはいけないところが丸見え状態だ。
（あれじゃあ他の部員たちにもバレるんじゃないか…？笑）
「俺、あいつのこと見る目変わっちまうかも…笑」
「バーカ、練習集中しろっての」
「へいへい笑」


夏休み練習に入って1週間。
今年の夏は猛暑となり、熱波が襲った。
グラウンドでの練習は滝のように汗をかく
地獄の練習場と化した。
「はぁ…はぁ…暑っつぅ…」
「今年は特に暑いな」
「ちんぽも蒸れ蒸れだわｗ」
「俺もだぜｗ全裸で練習したい気分だ」
「そんなことしたら全身日焼けしちゃいますよ笑」
「そうそう笑あいつみたいになるぜ？ｗ」


牧原が指さした先にはビキニの栞がいた。
栞の肌は炎天下に晒され、
数日で小麦色に日焼けした。
「え、呼びましたか？♥」
「随分とうまく焼けたなw」
「日焼けしたら、地味な女から
ヤリマンビッチに変わったみたいだw」
「ヤリマンビッチは元からっすよ」
「こんなに焼けるなんて
思ってなかったですぅ…♥」


「あーだめだ…ちんぽ蒸れるから1発抜かねぇと」
「俺も〜」
俺たちは栞の腕を掴むと体育器具庫へ連れ込んだ。
「きゃん♥ここでするんですか？♥」
「たりめーだろ！俺らは日焼けしたくねーの笑」
「栞、そのビキニの下。見せてみろよ」


「う…うん♥」
栞がビキニを脱ぎ全裸になると、くっきりと綺麗な日焼け跡が現れた。
「見事な日焼け跡だな～」
「乳首とまんこが目立ってドスケベすぎるだろ～」
「うう…全裸より恥ずかしいよぉ…♥」


「よーし…じゃあさっそく……ん？」
牧原は鼻をくんくんして顔をしかめた。
「なんか臭くね？」
「あ？ちんぽが？」
「くんくん…たしかに…匂いますね」
「き、気のせいだよ…きっと♥」
栞の反応に俺と牧原は気づき、近づいて腕を掴み持ち上げた。


「きゃっ…見ちゃだめだよぉ…♥」
栞の腕を持ち上げると、
腋毛の生えた卑猥な腋が露わになった。
「おいおい！いつの間に腋毛がこんなに生えてるんだ？ｗ」
「忙しくてその…剃る時間が無くて…」
「くんくん…うっ！先輩…この匂いっすよ」


俺と牧原は腋に顔を近づけ
その悪臭を鼻孔で感じた。
「くんくん…うっわ…臭っさ！」
「これ、腋臭っすねw」
「嗅いじゃやだめだよぉ…
恥ずかしいよぉ…♥」
「腋毛のせいで強烈だなw
だからいつも
腋毛剃ってるのなw」
あぁ


「臭っせぇけど、俺は腋毛は興奮しますw」
ぐい
「臭い臭い言わないでよぉ…♥ 汗もかいてるんだもん…」
ぞる
もっ
「女としては屁よりも恥ずかしいかもなw 腋臭がこんな臭いとw」
「じゃあその腋毛まんこで1発抜いてくれよ笑」


「も…もぉ…♥
みんな変態すぎるよぉ…」
「お前に言われたくはねぇよ」
俺はちんぽを栞の腋に突っ込んだ。
腋毛がもさもさとちんぽを刺激し、
もわんとした腋臭の匂いが
辺りに舞い散った。
あっ
モワ
「うおっ…腋臭の熱波だw」
はー
はー
はー
ぷる
「ごほぉ！おいw
器具庫が腋臭で
充満しちまうだろw」
ぐい
ぐい
ぐいっ



「うぉお…腋まんこいい…やっぱ腋毛があると刺激が違うぜ…ぇ！」
「んんぁ…おちんちん熱くて…汗かいちゃううう…♥」
「汗腺刺激されて腋汗噴き出てやがる」
「日焼け跡の乳首に亀頭押し付けんのまじエロくていいわ〜」
「押し付けてくださいって言ってるみたいだよな〜」
ぐい
モミ
モミ〜〜
ぷる


「あ～腋毛でカリが刺激される～」
「腋汗ぬるぬるで滑りもいいぜ～」
ずる
「んんぁあんんぁ♥おちんちんから濃いカウパー汁の匂いがするぅ…」
「腋臭と混ざって噎せそうなんですけど…w」
「強烈だな、こりゃw」


「あ〜腋臭でクラクラする…
そろそろ出ちまいそう…！」
「俺もイきそ！
日焼け跡おっぱいに
ぶっかけやるぜ」
モワ
「俺はこの腋毛に
精液ぶっかけて
ぐちょぐちょにしてやる！」
モワ
「んんぁ…おちんちんが
腋の付け根をぐいぐい押してきて
感じちゃう…んぁああぁ♡」
「おら！腋でイけ！」
ぶる


「腋毛に出る！」
「おら！イくぞ！」
「腋でイくっ♥」
栞はびくんと上半身を揺らし、
両腕をぷるぷると痙攣させた。



「腋にたっぷりぶっかけたぜ～」
栞の腋毛に俺の精液が絡まりどろどろになっていく。
モワ
モワ～～♡
あ♡
「んんぁ…腋気持ちぃ…♡」
たぱっ♡
「腋臭とザーメンで臭すぎw」
「腋毛もいいけど腋臭がキツいっすねw
栞、さすがに剃っといたほうがいいぞw」
「うう…わかってるよぉ…♡」
ぶる


「おら！俺も混ぜろよ」
片岡は栞の背後に回ると
腰を持ち上げ
まんぐり状態にした。
「きゃっん♥片岡先輩♥
このポーズ恥ずかしいよお…」
「うおお…日焼け跡で
まんことケツ穴が際立って
さらに下品に見えるなぁ」
「股間からメスの匂いを
プンプンさせてますね」
「おら！
突っ込むからな～
ケツの穴緩めろよお！」


「おぢりいいい♥」
片岡はビンビンに勃起したちんぽを
栞のケツの穴にずるりと挿入した。
「あ～ちんぽ生き返るわ～
やっぱケツハメ最高ぉ」
栞の肛門が
片岡のペニスを飲み込み、
ぎゅぎゅうと締め付け
扱いているのがわかる。
「すっげぇ…
アナルに即ハメえっぐ笑」



「深っ…いぁいぁんんぁ♥
お尻の奥まで入ってくるぅ…
カリがゴリゴリ腸壁こしゅるのお♥」
「アナルの中熱すぎ〜
ちんぽサウナみてぇだわ〜」
「気持ちっ…んぁあケツ穴ぁ♥」
あ♥
ぐぃ
「まんこもヒクヒクして
ちんぽ欲しがってるな」
「ほら、牧原！
まんこにちんぽ突っ込んで
サンドウィッチしようぜ〜〜」


牧原は栞の上に跨ると
まんこにちんぽを勢いよく挿入した。
「おら！田所ぉ！
まんこにもちんぽ来たぞ～」
ズポッ
「ひぎゃっ…♥
2本ちんぽ入ってるぅぅ♥
いぐいぐ…挿れられただけで
感じちゃうぅぅ…ぅ♥」
「うっおお…っ
ケツの穴がさらに締まって
キッツキツだ～」


まんことアナルに入ったちんぽは各々のペースでピストンをはじめ、時折シンクロしたように同時にGスポットを刺激していく。
「あぁんんぁあんんぁっ♥」
「まんことケツから同時にGスポット擦るの楽しいぜ～w」
「激しっ…あぁあんんぁ♥先輩のちんぽ太すぎっ…あ♥」
「よ～し一度抜くぞ～ケツ穴よーく見せろよ～」


片岡がアナルからちんぽを抜くと
ぶぼぼっと音を出しながら
空気の塊が噴き出した。
「どうだ～いきなり抜かれると
アナルがびっくりして
呼吸するんだよ笑」
「おぢりぃ…あぁ…♥
スースーするぅ♥」
「うわ…肛門開きっぱなしw
腸内丸見えっすよ笑」
「つはは笑
もっと突いてやるぜ！」



「うおら！おらおらおら…！」
「あがっ…あぁあ♥」
「やば！まんこ超締まるっ！
こんなのイくって…w」
「あぁ〜俺ももうイくわ！
ケツの奥に出すぞお！」
「2本のおちんちんがぁ
中で膨らんでるぅう…う
きちゃうう…♥
すごいのきちゃうよおお♥」


「ケツで孕め！」
「気持ち～い」
「んぎゃあああ♡」
3人は同時に絶頂を迎え、
まんことアナルには
溢れ出るほどの精液が注がれていく。


「ふぅ〜たくさん出た〜
まんこ痙攣してちんぽ気持ち〜」
「イぐ…んんぁっ♥
あんんぁ…あぎゃ…♥」
「ケツ穴さらに締まって
尿道の精液も搾り取ってくぜ」
「奥に…んんぁあ…
あったかいのいっぱい…
たぷたぷしてるぅ…ぅ♥」
「うへぇ〜子宮の中
どろどろ…笑」


「おら、ちんぽ離せ‼ 抜くぞ…おおらっ！」
「んんぎぃぃ♥」
2本のちんぽが抜かれた栞の穴は
ぱっくりと開いたまま
だらしなく精液を垂らしていく。
くぱぁ
「うっわ…エグ笑
俺も突っ込みてぇ！」
「ふぇ…ぇ♥
待って…まだイってるのぉ…♥」
「まだ絶頂したばっかで
敏感だからよ～
すぐ突っ込むと楽しいぜ～ミ」


俺は脱力した栞を持ち上げ
栞のお尻にちんぽを近づけた。
「た…高橋…待ってぇ…
まだ…どっちの穴も…
イってるのぉ…♥」
あっ♥
「わかってるっての笑
さっきからお前のイキ尻が
俺のちんぽにかかってんだよ」
「あぁん…♥
だって肛門が勝手に
ぶっこいちゃうんだもぉん…♥」
「ったく臭っせぇ女だぜ…笑
じゃあその敏感アナル
俺がもっと可愛がってやるよ」


俺は栞に後ろからキスをしながら
アナルの奥にペニスを挿入した。
「んぁ～ケツまんこに入る～」
「んんんっ♥いぐいぐイぐぅう♥」
はー
はー
栞はアナルに挿入されたと同時に
尿道から弧を描くように
小便を漏らし始めた。
「おいおい、挿入されただけで
失禁したのか？ｗ」
ブポッ
プシャ～～


「おら！ガンガン動かすぞお！
上下にそらそらそらそら！」
「あぶぼおお…お♥」
俺が栞を上下させるたびに
小便の軌道がぐわんぐわんと遊ぶ。
「精液まみれのまんこから
小便噴き出てるのエロ…笑」
「見ろよ笑
尿道も丸見えだぞ笑」
「おぢりい深すぎっ…りゅ♥
おっぢっごおお…止まんにゃいい…♥」
はーっ
はーっ
はーっ
ぶるっ


「あ～もう出そう笑
日焼けビッチ女のケツに
種付けしてやるからなぁ！」
「またきちゃうぅ…♥
ケツアクメくるくるぅぅぅ♥」
はー
はー
はー
「おらおらおら！
腸内を俺らの精液で
たっぷりと満たしてやるから
ちゃんと味わえよぉお！」
「ひゃあいい…ああ♥
いくぅ…ケツくるぅ…
ケツでぶっとんじゃうぅぅ♥」
ブポッ
4195
171



「ケツでイく！」
「…ケツぅ♥」
栞のアナルにどくどくと俺の精液が注ぎ込まれていく。
「腸が…踊って…ぇ♥
精液喜んでるぅ♥
頭…真っ白になりゅぅ♥」
「痙攣すごっ！
射精止まらねぇよ」

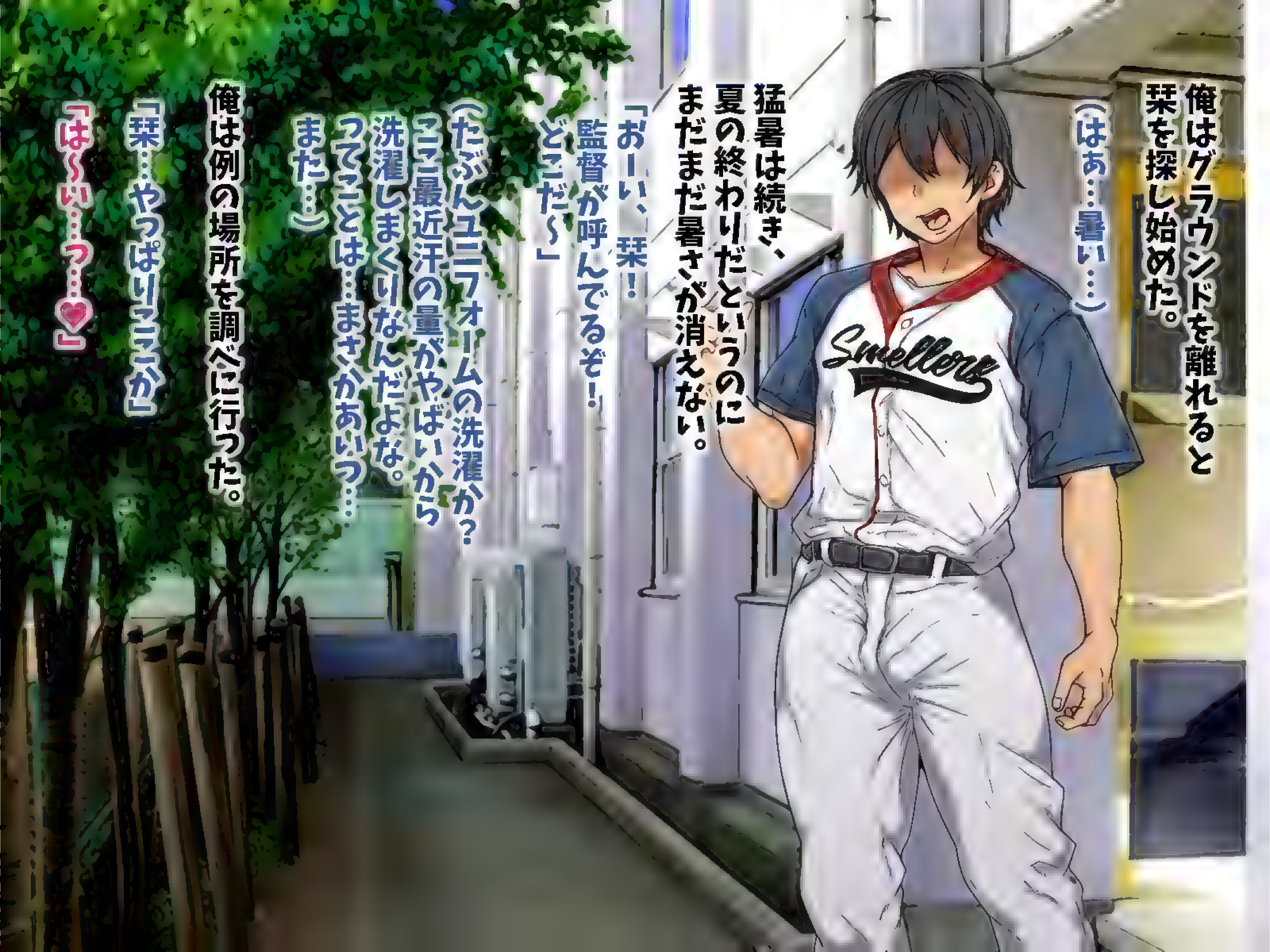

「あ…がっ……♥」
栞はだらんと脱力し気絶した。
俺はケツアクメで気絶した栞のケツにちんぽを挿入したまま、濃厚なキスをした。
「うぢゅ…こいつエロすぎ」
はー
はー
「さーて満足したし
練習に戻るぞ～」
「田所…日焼け跡もエロくていいけど
さすがに今度からは
日焼け止め塗っとけよ～笑」
「ひや……い……♥」
まだまだ俺たちの汗臭い夏は続く。



6回裏
くんくんくん！噴き出す汗！


夏休みも終盤に入り、
いよいよ秋季大会が迫ってきた。
俺たちは千本ノックや送球練習を繰り返した。
「あーまたバット折れたわ。
さすがに酷使しすぎたか」
「じゃーねーよ、消耗品だ。
代わりのバットあんだろ？」
「えーっと……あれ？
もしかして尽きた？」
「えーまじっすか！
か、監督！
バットがなくなりました！」


「何！？
まずいな…新しく注文したとしても
2、3日はかかる」
「ど、どうします？
今日の練習リスト
作り直しですか？」
「うーむ…あ…いや待てよ。
そうだ、アレが使えるかもしれん」
「アレっすか？」
「…アレ…？」
「場所は田所が知ってるはずだ。
高橋、お前あいつ呼んでこい」



俺はグラウンドを離れると
栞を探し始めた。
（はぁ…暑い…）
猛暑は続き、
夏の終わりだというのに
まだまだ暑さが消えない。
「おーい、栞！
監督が呼んでるぞ！
どこだ～」
（たぶんユニフォームの洗濯か？
ここ最近汗の量がやばいから
洗濯しまくりなんだよな。
ってことは…まさかあいつ…
また…）
俺は例の場所を調べに行った。
「栞…やっぱりここか」
「は～い…っ…♥」
Smellers



茂みに隠れた栞が汗びっしょりのユニフォームをくんくん嗅いでいた。
「…おい！お前また洗濯サボってこんなとこで…！」
「くんくん♥すうはぁ…ん♥高橋の匂い…」
あっ
「あ？…ってそれさっき俺が着てたユニフォームじゃねぇか」


「はぁ…すうはぁ♥
高橋…これすごいよお…
絞らなくても
大量の汗があふれてくるぅ♥」
「そりゃそうだろ…
どんだけ汗かいてると
思ってんだ」
「ねぇ…高橋の蒸れた股間…
嗅ぎたくなって
きちゃった…♥」
「はぁ？ここでかよ笑」
「すぐ終わるから♥
ね、お尻こっち向けて♥」
モワ
ずる


「しゃーねーな！」
俺はズボンを脱ぐと、栞の顔前にケツを突き出した。
「んひゃ…暑っ♥
高橋の股間から
すごい熱気出てるぅ」
「男には金玉があるから
蒸れやすいんだよ」


「すぅはぁすぅぅ♥
この金玉の付け根のとこ
ほんと臭っさくて好きぃ♥」
あむ
「ザーメンを作る場所だからな。
男性フェロモンが
一番濃いところだぜ？笑」
「あは…♥
高橋の肛門が
汗まみれでぴちょぴちょ♥」
「汗かくせいで
ケツも痒くてな～
舐めて綺麗にしてくれよ」
ぐい
ぷる


「うん…お尻に舐めたい…♥
はむぅ…れろれろ…
おちんちんも触っちゃお」
栞は俺の肛門を舌で舐めながら
ちんぽを握り扱きだした。
「…うぉおっ…
それやば…気持ちぃ…」
あっ♥
「はむぅ…つぢゅる♥
ケツ毛ボーボーで…
汗びっしょりぃ…♥」



「くんくん…ぐふぅ♥高橋のお尻…ちょっぴり…うんこの味がするよ？」
「まじ？笑さっき糞した時に拭き取ったんだけどな～ケツ毛に糞汁ついたまま残ってたのかもなw」
「ちょっと苦いけど美味ひぃ…ぃ♥」
「この変態女…っ！そんなに臭いのが好きならこれでもくらえ！」
ぐい
ぶる



俺は腸内から下りてきたガスを
栞の顔面に勢いよくぶっかけた。
「んんぐぉおふぅ♥
おなら…熱風ぅきたぁ♥」
「あ～やっぱ栞の顔に
屁をこくのは気持ちいいぜ～」
はーっ
ぐりっ
モワ
「ぐふっ…臭っさいよぉ…♥
漬物の匂いがするぅ♥」


「すぅはぁ…んんごほ♥
おちんちん扱くたびに
濃いおならが漏れてるよぉ…♥」
「あ～やべ…
股間が気持ちいい…
そろそろイきそう…」
「高橋射精る？♥
いっぱいぴゅっぴゅしちゃう？♥
いいよ…私のお手手とケツ舐めで
気持ちよくなってぇ…♥」
俺の金玉が大きく膨張し、
肛門がぎゅうっと締まる。



『…射精る！』
亀頭からどろっとした精液が放たれ、力みから解放された肛門から大量の放屁が噴き出した。
「シんぐふうっぶふ♥超臭っさいのきたぁ…♥」
あっ
「匂いで…イク…♥汗と屁でイくっ…ぅ♥」


俺はすっきりして
ズボンを履きなおした。
「ふぅ～……って！
そうだ、栞！
バットが全部折れちまったんだ」
「ふぇ？♥
バットってちんぽバット？笑」
「いや俺のは右曲がり…って違ぇよ！
野球のバットだよ！」
俺は監督たちとのやり取りを
栞に伝えた。
「代えがないなら…
アレを使うしかないかな…♥」


俺と栞は急いでグラウンドに戻った。
「高橋！田所！遅いぞ！何をしていた！」
「高橋の汗とおならチェックをしてましたぁ…ぁ♥」
「あ、バカ…！」
「おい、高橋ズリぃぞ！」
「俺らのもチェックしてもらおうか！」
メンバーたちは栞の服を脱がすとズボンのファスナーを下げた。


「おら！お前の大好きな
ちんぽの匂いだぞ〜♡」
栞の目の前にチンカスまみれの
ベトベトちんぽが突き出された。
「ごほっ…げほ…
なにこのチンカスの量お…♥」
「お前とセックスしたり
練習したりを繰り返してたら
こんな汚れちまったんだよ♡」


先輩たちは鼻の穴にチンカスまみれの亀頭をぐいぐいと押し付けていく。
「うへぇ…臭っせぇな～」
「くんくん…ぐふっ♥すっごい変な匂いぃ…ぼーっとするぅ…♥」
「お前のまん汁やら腸汁やらもこびりついてるぜ～」
はーっ
モワ
モワ～ン
「ぐふぅ…すぅはぁ♥汚いよぉ…もぉ…♥綺麗にしてあげるね♥」
はーっ
ぐい ぐい
はーっ


栞はメンバーたちのちんぽを1本1本掴み舐めていく。
「…ぺろ…んん…♥」
「おら！田所！ちんぽを舐めるときは俺の顔を見つめろ！」
「…ひゃい…ぺろ…♥ う…舌先が痺れちゃうぅ♥ チンカス多すぎるよぉ…」
ぐい
ぶる


「金玉もしっかり舐めろよ～
汗とチンカスで蒸れた股間で
臭っさくなった金玉だ」
「ひゃい…はむぅう…ぐふ♥
金玉にもチンカスの匂いが…
浸み込んでるよ…お♥」
あ♡
ぐぃ
モワ～～ン
「まじで俺らのちんぽ
臭すぎるなぁ
ま、夏だからしょうがないけど笑」
「臭くて…はむぅ…♥
ぞくぞく…します♥」
ぶる
モワ


「おら、田所！亀頭からじっくりとチンカスを舐めとっていけ」
「…はい…♥ つぢゅる…れろ…♥」
「そうだ、いいぞ～」
栞は亀頭とカリ首にこびり付いた大量のチンカスを舌で擦っていく。唾液でふやけたチンカスはさらに濃い匂いを発しだす。
「ごほっ…ごほごほ♥ つじゅる…んんぐ」


「よーし、口で咥えて口内でチンカスを味わえ」
「はむぅっ♥」
あ
「あ～チンカスが擦り取られていくのが気持ちいいぜ～」
「ぐふっ…っじゅるぢゅ♥口の中に汗とチンカスの匂いがぶわって広がるぅ…ぅ♥」
「よーし…そのまま喉の奥でも扱け！」
モワ



栞はちんぽを根本まで頬張り
喉の奥でチンカスを擦って
お掃除し始めた。
「ひやい……うぐ♥
じゅぼじゅぶぶぶぶ♥」
「あーこれこれ笑
この喉奥にチンカスを
擦りつけるのまじ最高」
「じゅぼぼぼ♥
しゅごい…臭いよお♥
汗と生臭さが口にあふれるぅ♥」


栞は顔を前後に動かし、セルフイラマでちんぽを扱いていく。
「じゅぽっぢゅるぅ♥ぐふっ…ごはっ…♥」
「いいぞ、田所ぉ！喉ちんこにもしっかりと亀頭が当たってるぜw」
「ひゃい…ぐぉほ…♥おちんちん…いっぱい…気持ちよくなってくだしゃいごほっ…うげ…っぢゅ♥」
「あーさすがに射精るわwおい、奥に出すからな！」
ぶる


栞の頭が掴まれ、
ぐいっと勢いよく
喉の奥にちんぽが突っ込まれる。
「おらっ喉に射精る」
「んんぶふぼおおお♥」
ゼリー状の精液が
栞の口の中へ勢いよく放たれた。
喉の奥にどぷどぷと流れ込んでいく。


「いっぱい…ごっほっ♥
濃いのがお腹に入ってくるぅ…」
栞はごくごくと精液を吸い、
胃の中に飲み込んだ。
「ふぅ～チンカス綺麗になったぜ～
すっきりすっきり笑」
「おいひい…っごくごく♥
っぢゅじゅるぅ♥」
「おい、田所！
アレは持ってきたか？」


「はい、持ってきました♥」
栞はゴム製のバットを監督に手渡した。
「よし、これで練習できるぞ」
「え、でもそれゴム製ですよね？」
「ボールは打てなくてもスイングの練習にはなるだろ？」
「だけどよ～ヒットの感覚を掴みたいんだよな～」


「なに、心配するな。
ヒットの感覚を養うために
ゴムバットで叩く最高の場所がある」
そう言うと鬼頭監督は
栞のお尻を指さした。
「あーなるほど笑
ケツバットっすね」
「おい、田所！
メンバーのために
お前のお尻をサンドバックに
してもかまわないな？」
「ふぇ……！？♥
は、はい、監督♥
準備はできてます…ぅ♥」


「だが、普通にやっても田所の訓練にはならん。だから浣腸我慢を行う」
監督は栞を地面に座らせた。
「え…えと…♥浣腸我慢…？」
「よし、片岡！ユニフォームを脱げ」
「りょーかいっす！」


「田所、お前は帽子をとれ。
浣腸するための器にしろ」
「は…はい…♥
な、なにをするんですか」
栞はメンバーたちを見上げ
はてなマークを浮かべている。
「いいか、田所。
お前は口でしか
メンバーの汗を味わっていない。
だが、真のマネージャーは
ケツの穴でも汗を味わえる」
「みんなの汗を
お尻の穴で…♥」
「これを絞って
汗を帽子に貯めろ！」


栞は手渡されたユニフォームを絞り野球帽の中に汗を貯めていく。
「ひやっ…♥すごい汗の量ぉ…滝みたいに流れてくるぅ」
「すっげぇ絵面ｗ」
「よーし、お前ら田所にどんどんユニフォームを渡していけ」
「ういーす！笑」
ジュワァ!!
ぎゅ
モワ
はーっ
ぼた
ぼた


栞は手渡されるユニフォームを次々に絞っていった。
「くんくん…すぅはぁ～♥野球帽の中が…みんなの汗でいっぱい…♥」
「うへ～野郎の匂いでくせぇな～」
「よし、片岡。そこにあるシリンダーで汗を吸いだせ」
「お、いいっすね笑」


片岡はシリンダーを使って野球帽の汗を吸いだしていく。
「こぼすなよ、田所」
「はい…い♥ シリンダーにいっぱい注がれていきます…っ」
「部員たちの練習の成果だ。この汗には部員たちの魂が浸み込んでいるんだ」
「それを今から…私のお尻に…ぶちこんでもらうんだ…♥ …考えただけでイっちゃいそうだよお…」


「よし、ケツを上げろ、田所！
お前のケツの穴で
部員たちの汗を味合わせてやる」
「ひゃい…んんぁ♥
お尻ヒクヒクしちゃうよお…」
「おら、田所！
肛門緩めろよ～
一気に注入してやるぞ」
片岡はシリンダーを握り、
栞の肛門に一気に突き刺した。
ぶる


「おらよっと！」
「ひぎゃっ…ぁ♥ ぬるい液体が…どんどん入ってくるぅぅ♥」
ぐぽぐぽと水の音を立て俺たちの汗が栞の肛門に注がれていく。
「すっげ笑 汗の浣腸なんて初めてみたぜw」
「どうだ～田所。部員たちの汗の味は」
「ひや…いい…っ♥ 気持ちぃ…いいですぅ♥」
ズポッ



「よーし全部入ったぜ～」
「よーし、ではバッティング練習に…」
「もっと…んんぁ♥もっといっぱい注入してくだしゃい…みんなの体液…もっとお♥」
「栞のやつこんなこと言ってますけどw」
「もっと突っ込んでやりましょうよ笑」
「いいぞ、好きにしろ笑」


俺たちは再び栞を跪かせ、
帽子を器のように持たせた。
「俺らの体液が
欲しいんだよなぁ！」
「ひゃい……い♥
みんなの体液を……
お尻で感じたいんですぅ♥」
「このマゾ女がっ！
よーし、小便したいやつ
この野球帽小便器に
たっぷり注いでやれ！」
数人のメンバーが
栞の周りを取り囲み
ちんこの先を帽子へ向ける。



強烈なアンモニア臭を漂わせ
メンバーたちの小便が
野球帽に注がれていく。
「あぁすごい…♥
みんなのまっ黄色の
濃厚おしっこ…♥」
「野球帽小便まみれ〜」
「外にいるのに
便所の匂いだな〜」


牧原はシリンダーへ小便を注ぎ、そのまま栞のアナルに突き刺した。
「んんぐううっ♥おしっこ…きたあぁぁ♥」
「すっげ…笑」
たぷ
ぶる
「どうだ～田所！小便浣腸の味はぁ！」
「腸の中で汗と混じってお腹がみんなの液で満たされてくのがわかるよお♥」


栞のお腹は大量の浣腸で大きく膨らみカエル腹になった。
「お腹…いっぱいい…♥重たいよぉ…んんぁ♥」
「めっちゃ膨らんでるぜ」
「いいか、ケツの穴しっかり締めておけよ」
「ひゃい…っ♥」
「いいぞ、準備万端だな」


「よーし、お前ら
そこにあるゴムバットで
バッティング練習だ」
「うっす！
バッティング練習は
毎日しないと
感覚狂っちまいますからね～」
「田所！お前は全員回るまで
浣腸を漏らさずに
部員の汗と小便を味わい続けろ！
それが真のマネージャーだ」
「は…はい♥
私もみんなと一緒に
頑張りますぅ…う♥」


まずは片岡がバッティングを開始した。4番バッターのフルスイングが栞のケツにぶち当たっていく。
「おらっ！まずはストレート想定！」
「あぎゃっ♥」
「今度はカーブ対応のスイング！」
「はにゃっ♥」
「おら！お前ら！ケツの肉は1つじゃないだろ～左右同時に使っていけ！」
野良猫の


「んじゃ、俺はこっちで！おらっ！フルスイング！」
『おぢりっ…あぁあ♥』
パンパンと高い音を響かせ、栞のお尻が赤く腫れていく。
「良い音で鳴るな～スイングするのがめっちゃ楽しいぜ～」
「お尻…んんぁ叩かれて…あぁんんぁ…おまんこ濡れて…きちゃう…♥」



「おら！田所！口はちんぽを舐めろ！集中するんだぞ～」
「ひやぁいいい♥はむぅ…うぢゅるぅぅ♥」
「おら！おら！このゴムを叩きつける感覚まじで最高っすね」
「いいか、高橋。スイングにもセンスが必要だ。例えば、こんな風にバットの先でまんこをちょいとぶっ叩くとかなぁ」
「らめっ…おまんっこぉ♥」
パン
パン
ぢる


「じゃあ俺も!!
肛門に刺激を送るように
おら！おらおら！」
「だめぇえ激しぃぃ♥
おなら出ちゃうよぉおお…お」
栞はケツを叩かれながら
ブブブと屁をこいていく。
「おいおい笑
まだ全員回ってねぇぞ！
漏らすんじゃねぇ！」
「勝手に漏れちゃううう♥
お尻叩かれて気持ちよくて
屁出ちゃうのぉ…♥」


パン！パン！パン！
俺たちはさらに激しく
ケツバットを行っていく。
「ひぎぃいやぁあ♥
だめだめだめえぇえ♥
もう無理ぃ…激しすぎて
出ちゃうよぉおお♥」
「ケツ真っ赤にされるまで
叩かれまくって
浣腸噴射しちまうのか！あぁ？」
「あ～屁臭っせぇなぁ
こりゃもう漏れるわ…笑」
「みんなの…んぁあぁあ
体液浣腸…出ちゃうぅう…♥
ふんぐぅうう♥」
パン
パン


「浣腸イッぐううう♥」
栞の肛門から蛇口をひねったように勢いよく黄色い液体が噴き出した。
「うっお笑 ケツから小便出てるw」
プシャ～～
「出すなら全部出せ！おらおらおら！」
「まだ出ちゃうううう♥いっぱい出るううう」




7回表
「琴はほんとに変態なんです♥」


夏休みが終わり、秋季大会目前。
「どうだ、広い球場だろう。まぁ市民球場レベルではあるがな」
俺たちは秋季大会の会場を下見にきていた。しかも鬼頭監督のコネで貸し切りだ。
「来週ここで試合っすか。しかも…対戦相手見ました?」
「ああ、真婦台場高校…」
「ってことは…山城か…」
俺たちの相手は練習試合をした山城たちの高校だ。


「せっかくの会場貸し切りだ。この球場の感覚を掴むんだ！田所！お前が率先してデータを収集しろ」
「はいっ…♥」
「よーし、ぐるっと一周すっか」
「そうっすね」
「田所、お前は会場の空気を全身で感じるためにもパンツ一丁になれ」
「え？♥ う、うん…いいよ♥」


俺たちはパンティー姿になった栞と
グラウンドを下見して回った。
「どうだ～田所。
初めての球場でのお散歩は」
「誰も見てないかな…あ？♥
ドキドキしちゃうよお…」
「さすがにうちのグラウンドより
維持管理がしっかりされてますね」
「だな笑
お、そこにあるの
スプリンクラーじゃね？」
「田所、確認しとけ」



地面に仕込まれたスプリンクラーがぐいんぐいんと異音を発していた。
「なんかこのスプリンクラー変な音がしてますぅ♥」
「たしかにな。スイッチどこだろうな 田所、調べてみろ」
「えーっと…」
ぶる
じぃ
栞がスプリンクラーをガチャガチャと触った。


次の瞬間、勢いよく水が噴射し、俺たちの頭上から雨のように水が降り注ぐ。
「きゃっ♥すごい勢い」
「ちょ…！さすがに勢い可笑しいって笑壊れてますよ」
監督も急いで駆け寄ってくる。
「おい、何をやってる！」
「田所がスプリンクラーを壊したらしいです」
「なんだと！おい、田所！なんとかしろ！」


「どうにかってどうすれば…ぁ…♥」
「とりあえず水を止めろよ笑
これ使えそうだぜ」
牧原は近くにあったホースでスプリンクラーと栞の肛門を繋いだ。
「ひぎいいい♥
お尻の中にいいいい
大量の水があああああ♥」
「すげえな…笑
スプリンクラー浣腸かよ」
「よし、今のうちに修理しろ」


栞の腹はみるみる膨らんでいく。
「んぁあ…はぁ♥勢いが…しゅごいぃぃ♥お腹冷たくて…んんぁ苦ぢぃぃ…いい」
「うへぇ…俺らもびちょぬれ」
ぶる
「腸の奥にブシャーってて…んんぁ水圧攻撃されてるぅう♥」
「これから練習なんだからこれ以上濡らすなよ？服脱いで修理しろよな」


「はぁ…はぁ…♥
お腹たぷたぷすごいぃい♥」
俺は服を脱ぎ、スプリンクラーを弄る。
「え〜っと…
これかな？どうだ」
「ひぎゃっ♥あぁああ♥
高橋、それ違うぅうう♥
勢い強くなってるぅうううううう♥」
「え、まじ？笑
じゃあこっちかな」
「頑張れよ〜田所〜ミ」



「お腹重たいよぉ…♥
しゃがむのも…キツいぃ…」
「ちんぽ握って
支えてろよ笑」
「うん…♥
はぁ…はぁ…」
「腹の中を
一気に洗浄されてる気分か？笑
常人じゃそうそう気絶ものだな」
「んぁあ…っはぁ…ん♥
冷たくて苦ぢぃい…けどぉ…
お腹たぷたぷするの
気持ちいいよぉお…お♥」
「この変態エネマ女が！ｗ
カエル腹すげぇな」


俺はスプリンクラーの奥に止水用の蛇口を見つけ、回した。
「これか…おら！」
「あ…あ…きた…ぁ…ぁ♥お水止まったよぉ！」
「高橋、よくやった」
栞の肛門からはブリブリっと空気が漏れ、俺たちにも聞こえるほどの腹のうめき声が鳴った。
「お腹…ぎゅるぎゅるぎゅるって すごい…腹痛が…んんぁ♥ もう…無理ぃ…いい！」


モ〜
「漏れりゅ♥」
栞の肛門からスプリンクラー顔負けの下痢便が噴き出した。
「おい、田所！ここは大会の会場だぞ！糞をするならうちに帰ってからだ！」
「でも…おお勝手に出ちゃいますぅ…♥」
「野球ボールで栓しておけよ〜」
ぶる



俺たちは栞の肛門をボールで塞ぎ、
どうにか球場を汚さずに済んだ。
「まったく焦らせるな…笑
出場停止になったらどうする」
「ごめんなひゃい…♥
でも…お腹痛くてぇ…
おトイレに……」
「そんな目立つ腹で
単独行動したら見つかるっての笑」
「お前は帰るまでそのまま」
「そんなぁ…♥」


午前中の球場視察から帰校した俺たちは
冷や汗まみれの栞を器具庫に連れ込んだ。
「もう限界ですぅ♥
はやくおトイレに…」
「そんな腹で校内を
うろつくつもりか？」
「今トイレ
用意してやるから
ちょっと待ってろよ」
「高橋、
手伝え」
「うっす！」


「膨らませ完了！」
俺たちはビニールプールを膨らませ、
栞の足元に設置した。
「ふぇえ…？♥
なんですか…この…
ビニールプール…」
栞は腹痛に耐えながら
足をガクガクと震わせている。
「何ってそりゃ
お前の便所だよ笑
ここにスプリンクラーで
注いだ水を出せ」


「ええ…ぇ！？♥
こ…ここに出すんですかぁ…♥
そんな……あ」
琹の決壊寸前の肛門の
栓代わりのボールから
糞汁が漏れだす。
「ほら、もう限界じゃん笑
さっさとぶちまけろよ」
「だめ…んんぁ♥
もう我慢でき…にゃい…い♥」
「排泄するときは
勢いよくぶちまけろよ！」
「あぁ…あぁああぁ……っ♥
もう…だめ…
ふんぐううううう♥」


「あ゛あああ゛ああ゛あ゛あ♥」
栞は今まで聞いたことのないような
雄たけびならぬ雌叫びを発しながら
決壊した肛門から
下痢便をまき散らしていく。
「うっわ…すげ笑
腸内の糞
全部出てるんじゃやね？笑」
「下痢だけじゃなくて
固形のものまで
勢いよく出すぎw」
「おぢりい壊れるううう
ふんぐううう♥」


ビニールプールには
栞の糞汁が貯まっていく。
「すっげ～こんな浣腸噴射
AVでも見れないっすよ笑」
「はぁんんぁ…はぁ♥
見ちゃだめだよぉぉ…
恥ずかしいよぉ…」
「俺らに脱糞見られて
興奮してるくせに
何言ってんだ、マゾ女！」
「んんぁあっ♥
ブリブリイって
臭くて汚ったない音が
漏れちゃううう♥」
栞は腸内にあった水を
ビニールプールに出し切った。


器具庫の中は栞の糞の匂いで充満した。
「あっはっは、ひどい匂いだな」
「あんっ…監督…嗅いじゃだめですよお…」
「よし、田所。お前の糞汁プールに入ってみろよ笑」
「えええ！？こ、この中に…？汚いよお…♥」
「いいから、はやくしろ」
「…うん…♥」


栞は腕を持ち上げながら恐る恐る糞汁プールに入水した。
「うぅ…げほっ…♥臭っさいよぉ…お」
「おら！ちゃんと座って腰まで浸かるんだよｗ」
「どうだ、栞。自分で排泄した糞のプールに浸かる気分は？ｗ」
「ぬるぬるしてて気持ち悪いよぉ…♥」



「固形の糞が漂ってるぜ〜ｗ」
「こんなおっきな塊が一気に出ちゃったんだぁ…すごいよぉ…お♥うぇえ…げほっごほ♥」
「あー俺興奮してきました笑このままプールの中でこいつ犯していいっすか？」
「お前も変態だなｗ好きにしろよｗ」



俺は栞をプールに押し倒した。
栞の体は糞汁の中でうつ伏せになり
体中が糞まみれになっていく。
「おらっ…！」
「きゃっん…♥」
ぶる
ぐい
あ
「ちょっと…げほ♥
うんこまみれになっちゃうよぉ…」
「もうなってんだよ笑
おら、ケツ上げろ！」
俺も恐る恐るプールに入水し、
栞のケツの穴に
一気にちんぽを突っ込んだ。


ズポッ
ぶる
ぐい
あっ
「うっらぁ!」
「おひりぃいい♥」
大量の浣腸でユルユルになったアナルに俺のちんぽがすんなりと挿っていく。
「うっわ臭っせぇ笑 糞の中でセックスするのまじで興奮するぜ」
「2人とも糞まみれだなぁ」



「お尻いまだ敏感なのぉ…♥
おちんちんうんこみたいぃぃぃ♥」
「あぁ…ケツ穴
ずっと痙攣しっぱなしぃ」
ぶる
モワ〜〜ン
ぐぃ
俺はうつ伏せで無防備な
栞のアナルをちんぽで
ぐいぐいと押し広げていく。
「腸壁擦れりゅ…♥
んあぁ…んぐぅ♥」
「…ん？
あ、田所ぉ！
良いもんがあるぞ〜」
モワ


「プールから外れた糞があったぜ～」
牧原はプールの傍に落ちていたうんこの塊を手に取った。
「おいおいちゃんと狙ったのか～？」
「ごめんなひゃい…♥」
「プールに追加だ。ほれ、匂いも嗅いでみろ。まじで臭いぜ」
「くんくん…うげ♥ごほっ…げほっ♥」



ぶる
ぐい
「うお…糞嗅がせたら
アナルがぎゅーって締まりやがったw」
「糞の匂いで
興奮してやがる笑」
「あぁんんぁ…♥
うんこ…イくぅ…ぅ♥」
もわ～～ん
あっ
「あー俺も
もう射精るぞ！
汚ったねぇケツの中を
ザーメンで洗ってやる」
「あひや…あぁ♥
私の糞穴をお…んぁ
ザーメンで洗浄
してくだしゃいい♥」
もわ


「おらっ…！」
「ぎゃあああ♥」
栞の肛門から
糞汁と精液の混ざった
どろっとした茶色い液体が
逆流し噴射した。
「うっわまた糞出てるぜ〜」
「田所のやつ
ずっとイきっぱなし〜」
そうして俺たちは
秋季大会に向けた準備を
着々と進めるのであった。


真婦台場高校
VS
Smellers
栖夢流高校


秋季大会当日。
「とうとうこの日が来た。
お前らの実力を遺憾なく発揮してこい！」
「はい！
ついに来ましたね。
この日のために
過酷な練習を重ねてきたんですから」
「ここで勝てなきゃ
次もないからな」
「緊張してちょっと腹痛えけど
こんなとこで負ける俺らじゃねえぜ」
「みんな、ファイトだよ♥」

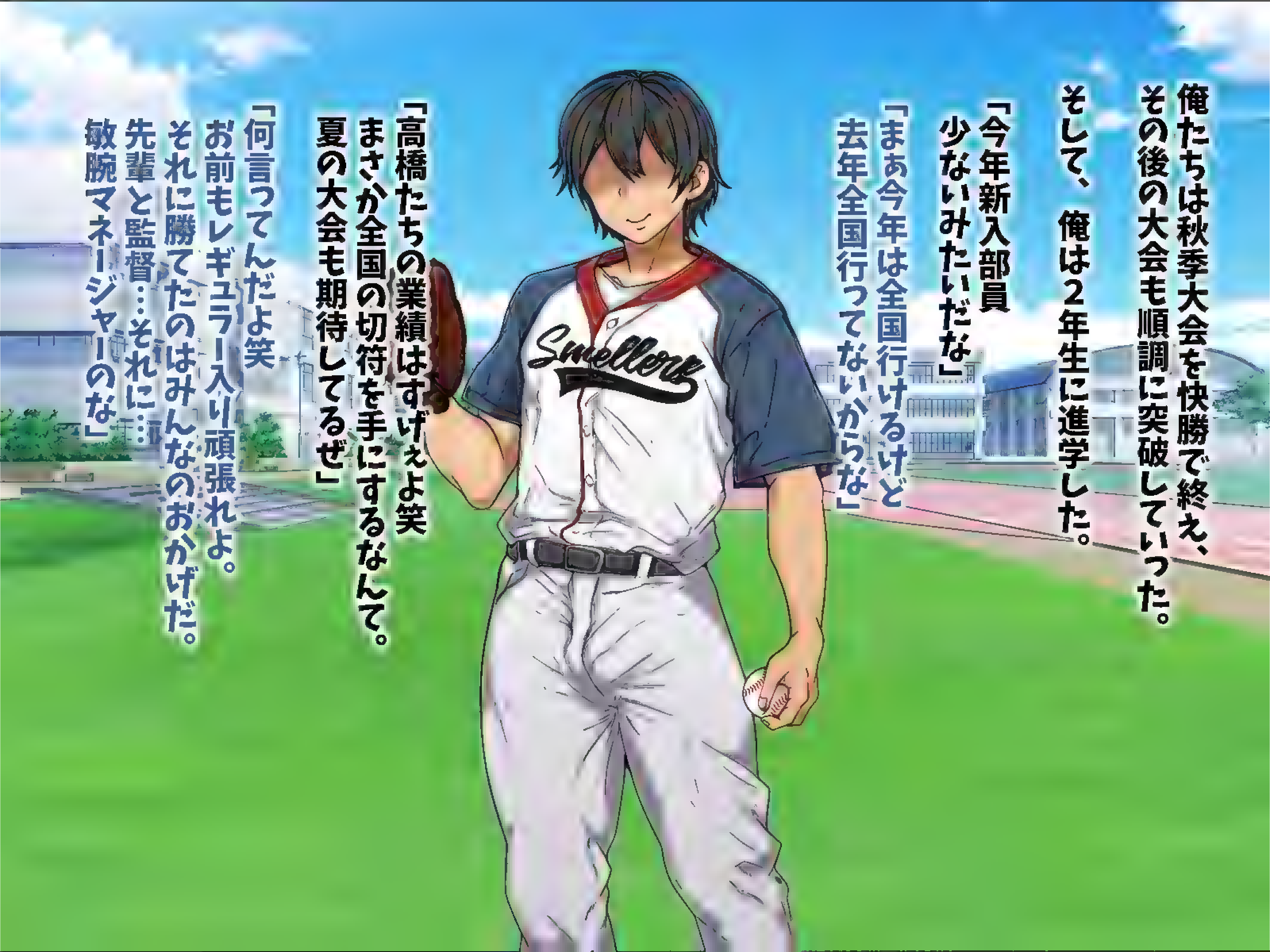


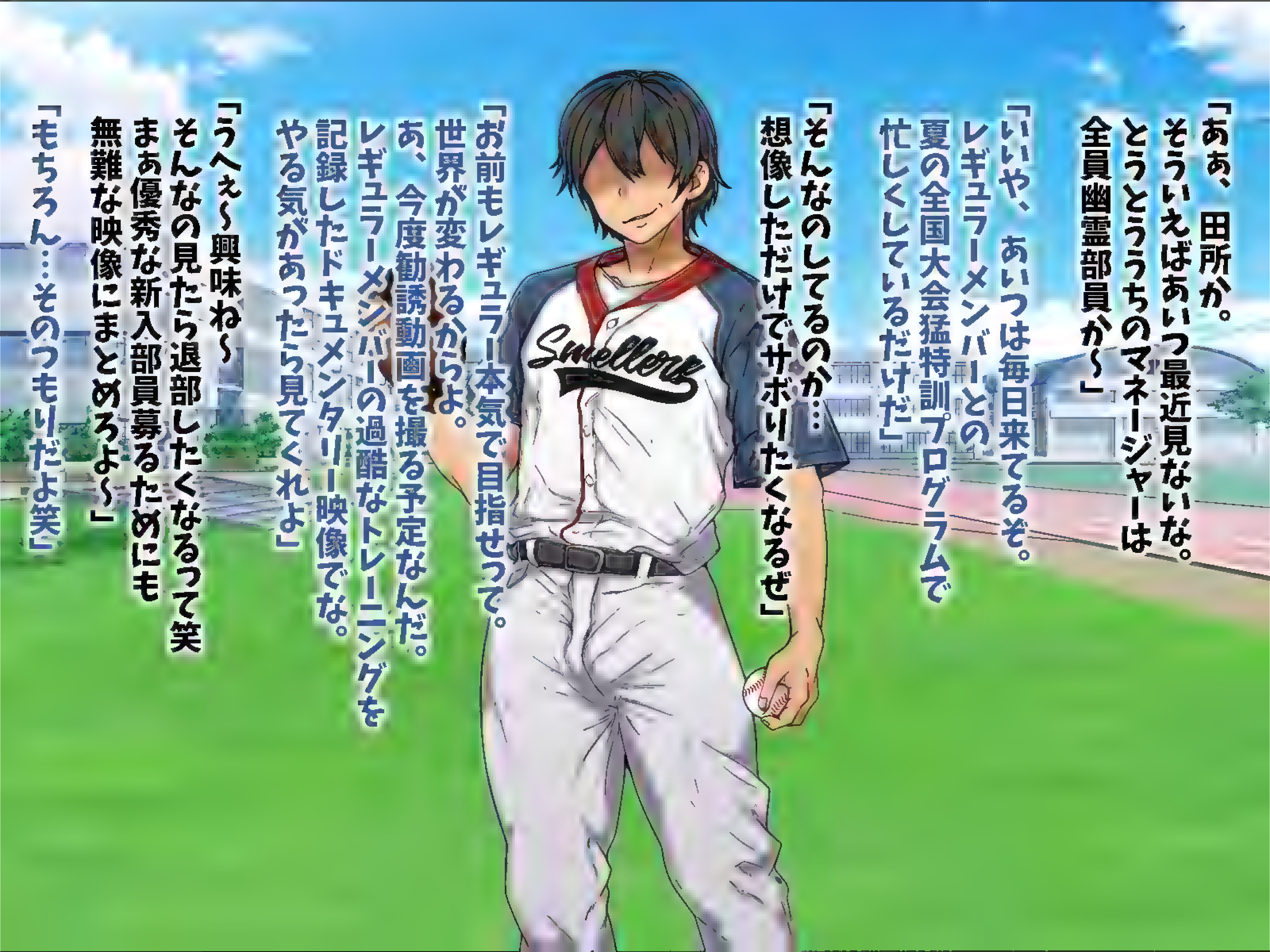
すると、栞の傍に山城が近寄ってきた。
「田所さん…久しぶり…」
「あ、山城君…♥今日は対戦よろしくね」
「それで…その…前回は負けちゃったけど今回勝つ予定だから」
「…？そうなの？」
「え…う、うん。だから…その…今日俺らが勝ったら連絡先…いや…いっそ…俺と付き合って…―」
栞は山城にシーっと静寂を促した。


栞はスカートを持ち上げた。
その勢いでパンティーが垂れ下がり、
精液まみれの股間と
大量のコンドームが晒された。
「ごめんね、山城君♥
私には野球部のみんながいるの♥」
「田所さん…何を…!?
野球部の…みんな？
まさかあいつらに…脅されて…」
「あはは♥
山城君って妄想すごいね笑
本番前にみんなから
い～っぱいお守りザーメンもらったんだよ♥
こうやってパンティーに吊るすと
勝負に勝てるって噂なんだから♥」
「そんな…まさか……」
栞は山城の懐まで近寄った。


そして、ジャージのファスナーを下げ
膨れたお腹と精液まみれの胸元を
山城に見せつけた。
「このお腹にね
みんなの精液とおしっこ
汗と痰が～詰まってるの♥」
「嘘だ…嘘だぁ…」
「栞はね…♥
ほんと～に
変態なんです♥」
「嘘だあああああ！」
その後、メンタル崩壊した山城は
試合中ボロボロのプレイをし、
詳しいことを語る必要がないほど
あっけなく俺たちの勝利となった。


7回裏
あの娘は最高の穴マネージャー！
ボールはアナルから
取って使ってネ♡
ちんぽ大好き♡
←部員専用
正正正T


俺たちは秋季大会を快勝で終え、
その後の大会も順調に突破していった。
そして、俺は2年生に進学した。
「今年新入部員
少ないみたいだな」
「まぁ今年は全国行けるけど
去年全国行ってないからな」
「高橋たちの業績はすげぇよ笑
まさか全国の切符を手にするなんて。
夏の大会も期待してるぜ」
「何言ってんだよ笑
お前もレギュラー入り頑張れよ。
それに勝てたのはみんなのおかげだ。
先輩と監督…それに…
敏腕マネージャーのな」


「あぁ、田所か。
そういえばあいつ最近見ないな。
とうとううちのマネージャーは
全員幽霊部員か～」
「いいや、あいつは毎日来てるぞ。
レギュラーメンバーとの
夏の全国大会猛特訓プログラムで
忙しくしているだけだ」
「そんなのしてるのか…
想像しただけでサボりたくなるぜ」
「お前もレギュラー本気で目指せって。
世界が変わるからよ。
あ、今度勧誘動画を撮る予定なんだ。
レギュラーメンバーの過酷なトレーニングを
記録したドキュメンタリー映像でな。
やる気があったら見てくれよ」
「うへぇ～興味ね～
そんなの見たら退部したくなるって笑
まぁ優秀な新入部員募るためにも
無難な映像にまとめろよ～」
「もちろん…そのつもりだよ笑」



部活動が終わり、レギュラーメンバーは体育器具庫に集合していた。
「よし、録画開始だ。いいか、田所！ちゃんと魅力的な勧誘をするんだぞ」
「はいっ監督♥」
00:12:06:5
モミ
あれから栞の身体は変化し、乳首は黒く色素沈着し、お腹はボテ腹へと変貌した。
ズル
「おいおい、先週よりさらに腹が膨らんできたなぁ」
グイ


勧誘ビデオの録画が始まり、部員たちに囲まれた栞はカメラに向かって喋りだす。
「えぇ…っと…んん♥うちの野球部はみんな仲が良くて…♥でも練習はとっても真面目に取り組んでますぅ♥」
「ニヤリ…」
俺と片岡が背後に回り喋っている栞の黒乳首を鷲掴みした。
「おら笑」
「ひやっ…んんぁ♥おっぱい…んんぁ♥そんな強く握ったら…出ちゃっ…んんん♥」


栞の黒乳首の乳腺からプシャーっとどろどろした乳が搾りだされていく。
「おい、田所！勧誘が止まってるぞ！」
プシャ〜〜
「ひや…ひやいいい♥レギュラーに選ばれた子は特別なトレーニングがあるよぉ♥」
「監督や先輩たち…あと…マネージャーの私と一緒にいっぱい練習しようね♥」
「すっげ…母乳まみれ笑 甘い匂いが漂ってくるぜ」


栞は母乳を搾られアクメしたのか
股間から小便を漏らした。
「あっ…イくっ♥
おっぱいでぇ…イぐ♥」
「おいおい、栞。
母乳だけでイったのか」
「手が母乳でべとべとだぜ〜」
「おら、田所！
次の映像に移るから
ちゃんと言え！」
「ひやぁい…では…あ♥
レギュラーのみんなとの
トレーニング映像をお…
見てくださいね♥
あぁん…イっくううう♥」


映像が切り替わる。
ボテ腹妊婦の栞がまんぐり状態にされている。
「よいしょっと重くなったな、田所おミ」
あ♡
「ええ…だってぇ…♥」
「乳首も黒ずんで腹もパンパンに膨らんでめっちゃ下品な女体だぜw」
「おら！今日のトレーニングは脱糞我慢アナルセックスだ」



片岡は栞のケツの穴へ
ずぶっとちんぽを突っ込んだ。
「おぢりいいいい♥」
「うぉ～ケツ穴締まるぜ～
しかも奥に何か当たるぜ？
何が当たってんだ？あ？」
おっ♥
「うんちですぅぅ♥
栞の便秘うんちがぁ
先輩のおちんちんの先で
突かれてます♥」
「そうだよなぁ!!笑
何日我慢させたんだっけか」
「2週間脱糞させてませんねｗ」


「我慢しないと漏れちまうぜ～」
「あぁんんぁ…♥
刺激…されちゃうよぉ…お♥」
ずる
「何言ってんだよ笑
ケツだけじゃなくて
まんこからも刺激してやるぜ」
今度は牧原が
栞のボテ腹まんこへ
ちんぽを押し込んだ。
「ぎゃっ…ああああ♥」
ぐい


まんこからの刺激も加わり、栞の肛門の隙間から下品な音が漏れ始める。
「ひやぁんんんぁっ♥2本のおちんちんがぁ…お腹に響くぅ♥」
あっ♥
「おらおらおら！ガバガバまんこしっかり締めろや！」
「あぁあ…ちんぽの先を便秘糞が押してくるぜ～」
「あんんあっ♥深いよおお…んんんぁ♥」
ぶる
ブポッ


「うおら！閉じた子宮口にガンガンピストンしてやるぜ！」
「そこらめぇぇ…ぇ♥イっちゃう…イっちゃうよぉお♥」
「ああちんぽ気持ちいいぜ〜そろそろ出そうだ笑 田所、ケツでも孕ませてやるからな〜」
「射精してぇえ♥いっぱい射精してぇええ♥」
2人のちんぽが膨らんでいく。
ぐい
ビュ♥
ブポッ


「ケツに出るっ！。」
「うお射精るぅ」
「ひぐぅぅぅ♥」
２人の精液が勢いよく放たれ栞の膣とアナルを満たしていく。その刺激で栞の黒乳首からはどばっと濃厚な母乳が噴き出した。


「うへぇ～出た出た。しかもこいつの母乳で身体ベタベタだわ…ｗ」
「お腹ぁ…先輩たちの精液であったかいよぉお…お♥」
「うおお…っ！糞の塊がすごい勢いでちんぽを押してくるっ！」
「んんぁ…んぐぅ♥も…もううんちがぁあ…限界だよぉおお♥」
「つくはは笑ザーメン浣腸で便秘糞おもらしか～？笑」


『脱糞りゅうう♥』
片岡のちんぽが抜かれると、開いた肛門から精液と糞の塊がどばっと大量に噴き出した。
くぱぁ
「うへぇ～どろどろ笑
ちんぽに糞がかかってるぜ？」
「ごめんなひゃあい…♥
くんくん…げほっごほ♥
便秘うんち臭っせぇ♥
栞のうんこ臭くてごめんなひゃいい♥」
モリ
栞は鼻の曲がりそうな悪臭便秘糞をひり出しながら失禁アクメした。



ところ変わってグラウンド練習。
「はーい…入部希望のみなさん♥
次はグラウンドでの
練習風景をお届けします♥」
「よーし、栞。
ケツをこっちに
突き出せ」
ぐいっ
あっ♥
ずる
「はーい♥
みなさん見えますか～？
栞のもっさもっさの陰毛♥
まんこもアナルも
剃るの禁止なんですぅ♥」
俺はその卑猥なケツに
顔を近づけた。


「あぁあ…肛門エロ！
つぢゅるる…れろれろ
つぢゅつちゅじゅぼぼ」
「はにゃあ…♥
お尻の穴舐めちゃだめだよぉ♥
んんぁ…くすぐったい♥」
あっ
ずる
「うじゅるるるぅ！
あ〜栞の腸液うめぇ〜
水分補給にもってこいだぜ」
「んんぁあっ♥
舌がお尻の中に
入ってきてるよぉ…♥」
ぐい
「良いこと思いついた。
このままこの穴に
口で空気を
送ってやるよ笑」



俺は息を吸うと
栞の肛門の中に
ぷわぁと息を送り出した。
「ひぎゃああ…♥
あったかい空気が…んぁ
お尻の中に入ってくるよぉ♥」
「おら、ケツに
力を入れてみろ」
「う…うん♥
んぐっ…ふんぐぅ」
プス～ブップっ！
と肛門から空気が漏れ、
卑猥な音と匂いが
辺りに漂いだす。


「おら！もっと力んで空気出してみろ！」
俺は栞のケツ肉を手のひらで叩いていく。
「ふんぐぅぅうっ♥
あっ…んんぁああ…
お尻叩かれたらっ…
んんぁ…いっぱい
出ちゃううう♥」
あっ
「いいぞ～
もっとケツの穴を
いじめてやるからな～」
「ああんんあっ♥
叩かれるの気持ぢいい♥」


俺はさらに大量の空気を
栞の肛門に吹き入れていく。
「おらっふぅぅううう！
ぶっぢゅるるるっぶほ」
「お腹苦ぢぃい…んんぁあ♥」
ブッブッ♥
ブぅぅう♥
ぶぶぶぶっぅぅう♥
俺の顔に栞の屁が
熱波のように吹きかかる。
「よーし、大量に
注ぎ込むからな～
一気に出せよ～？笑」


俺が空気を注入し、ケツを強くぶっ叩くと栞の肛門からグラウンドに響くほどの大きな放屁が放たれた。
「おなら気持ちぃいい♥」
「臭っせぇ匂いがすると思ったら田所だったか笑」
「田所の肛門は良い音で鳴るよなぁ」
メンバーたちが栞のケツを取り囲みケツに落書きをしていく。



「いい感じだなw
肉便器感が増してくぜ～」
「おなりゃ…んんぁあ
しすぎちゃった…んんぁ
大きいのも
下りてきちゃったよぉ…」
「さっきから
屁が臭すぎんだよw」
「入部希望の連中に
お前の脱糞応援
見せてやれよw」
「ひゃい♥
みなさんよーく
見ててくださいねぇ♥
フレーフレースメ…ー」



「りゅうううううう♥」
栞の肛門から勢いよく大量の糞が飛び出していく。
ズボッ♥
「おぉ出た出た出たw」
「練習中でもぉ…♥
栞の野糞を見て…
疲れを癒せますぅ♥」
栞はグラウンドに大量の野糞の山を作った。


REC
00:12:06:57
器具庫に画面は戻り、栞の無修正まんこがばっちりと映し出されている。
おっ
「みなさ～ん♥今から部員のみんなに連続中出ししてもらうんですぅ♥妊娠してるから好きなだけ出せるんだよ？♥」
「おら、田所！妊娠検査薬を見せつけてやれ！」
「ひゃいぃ♥見えますか～？ばっちり妊娠してますぅ♥みんなにた～っくさん中出ししてもらったおかげでボテ腹妊婦さんになっちゃいましたぁ♥」
ぶる


「よーし！マネージャーへの日頃の感謝を込めて俺が最初に出してやろう」
「んんひやぁ♥監督のぶっ太いちんぽ奥まで入ってくるぅ♥」
あっ
モワ
鬼頭監督の親父ちんぽが栞の妊娠まんこをガツガツと突いていく。
ぐぃぃ
「妊娠しているのにいい締まり具合だぞ！おらおらおら！」
ムリュッ
ぬる
ブポボッ




メンバーたちは代わる代わる
栞のまんこにちんぽを突っ込んでいく。
「あぁ～射精るぞ！」
「お前3発出しただろ？笑
ちゃんとケツに
書き足しとけよ〜」
栞の身体には
部員たちが思い思いに
落書きを書き足していく。
「うへぇ～スケベすぎ笑」
「ほら、高橋♥
君がラストだよ♥」


「おらっ挿入するぞ！
栞！俺のちんぽを感じろ！」
精液まみれのまんこに
俺のちんぽが一気に挿入される。
「深っ…いいいい♥」
おご
俺は亀頭で子宮口をぐいぐいと
ピストン責めしていく。
その刺激で栞の肛門に栓をしていた
ボールから茶色い腸液が噴き出してくる。
「そんな…んぁ子宮ガンガン突かれたら
お腹に響いちゃううう…んんぁ♥」
ズポッ
HENTAI
便器利用可♡
ちんぽ大好き♡


「おらおらおら！
どうだ、栞ぃ！
俺のちんぽバットの味はぁ！
子宮ガンガン突かれて
気持ちいいか！」
「んんぁ…うん…ああ♥
高橋のちんぽバット
気持ちいいよおお♥」
あっ
ぐいっ
モミ
「このちんぽバットで
お前を全国大会の決勝戦へ
連れて行ってやるからなぁあ！」
「ひゃあいいい♥
みんなとお…んんぁ
高橋とっ…んぎゃ♥
イきたい♥イくのおお♥」
HENTAI
ずる



「イくぞおおおお」
俺はちんぽを奥に突っ込むと
子宮口とちんぽキッスしながら
精液をぶちまけた。
お♡
「イっぐううう♥」
栞は赤子のように
絶叫しながら絶頂し、
身体を仰け反らせた。
そして、肛門のボールが抜け…。




https://www.mushroom-mall.com
@shioiri_numa
うち
野球部の地味子
CGノベル
マネちゃん
~汚いプレイでもなんでもしてくれるってマ?~
*この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。
*作品の評価・レビュー・ご感想をいただけると励みになります


⚠食糞描写注意
本篇をお読みいただきありがとうございます！
ここから先はおまけエピソードです！
さらにハードなスカトロプレイがあります！
食糞や顔面糞便器などが苦手な方はご注意ください。
本篇以上にうんこまみれなのでスカトロ好きの方は
ぜひ、お楽しみください♪


日回表
マネちゃんはうんこが大好き


とある日の部活動。
俺たちはいつものように
大会に向けてチーム練習を続けている。
「高橋、今のは3ー6ー1で送球しろ。
でなきゃダブルプレーにならん」
「了解っす！」
「ふう～ちょっと休憩しようぜ～」
「そうだな。
おい、マネージャー、水くれ」
「は～い…っ…♥」
Smellers


栞はのそのそと重たい腹を抱えながら
俺たちのもとへ水を届けに来た。
「うへぇすげぇ腹だな」
「も…もう…♥
お腹重くて…うまく
歩けないよお…」
「お前がトイレに
行けないように
首輪で繋ぎとめたからな笑」
「くんくん…うへぇ～
腹から糞の匂いがプンプン匂いますよ笑」
栞は首輪を引っ張られ、
器具庫に連れ込まれた。


俺たちは服を脱ぎ捨て
栞の身体をまさぐりだした。
「ひゃっ…んんぁ♥
お腹触っちゃだめぇえ♥」
「うっわ…腹の中に
糞が詰まってるのがわかるなw」
「妊婦の腹の感触とは
全然違いますねw
うへぇ～近くに寄ると
さらに臭せぇぞ、栞w」
ぷる
ぐい
俺と片岡は
栞の身体をくんくんと嗅ぎ、
腹に大量の糞を貯めこんで
体臭が濃くなった栞をからかった。



ぐにっ
モミ
「きゃうっ…おっぱいぃ♥
乳首…だめっ…あん♥」
「もうビンビンに
なっちまってんなぁ」
「乳首カチカチっすねぇ
興奮してんのか～栞」
「練習で汗だくのみんなに囲まれて
くんくんすうはぁ…♥
匂いだけでイっちゃいそう
なんだもん…♥」
「よーし…笑」
俺は背後から栞を抱き上げた。



「おらっ！って…重っ！」
「きゃっ…ん♥私…重くないよぉ…」
「そんな腹しといて何言ってんだミ」
栞の肛門からは持ち上げられた衝撃で下品なおならが漏れだした。
「臭っせぇ屁が漏れだしてるぜ？」
「だってぇ…はぁはぁ…こんな態勢にされたら…うんこ下りてきちゃうよぉ…♥」


「うんこ何日分だ？」
「えーっと…んんぁ♥今日で17…ううん…18日♥」
「貯めすぎw最長記録だなw」
はーっ
はーっ
「はぁはぁ…♥も…もう…限界だよぉ…」
「しゃーねーな笑じゃあこのまま俺のちんぽにその糞ぶっかけろ！」
「ふぇえ！でも…汚れちゃうよ？」
「今排泄しないと1週間延長すっぞ！w」
ぐぃぃ
ぶる


「出しますぅ♥
ふんぐぅぅぅぅぅぅ♥
ふんっ…ふんっ！」
栞が気張ると
肛門からぶぼっと音を立て
大きな塊が噴き出した。
はーっ
はーっ
モワ
「うぉぉぉおっ！
ちんぽに重たいのが
ぶつかかってく…！」
「すげぇな、高橋のちんぽが
田所の糞でみるみる埋まってくぜw」
「んんぁあ…いぎぃ♥
18日ぶりうんこおおぉ♥
ぶりぶり出てるぅぅ♥」


「おらっ！糞しながら舌出せ！はむっ」
「んんんっ♥うんこしながらキスらめぇ♥」
俺は脱糞中の栞と唇を重ねキスをした。
はー
はー
はー
あむ
「イぐうイぐうう♥脱糞気持ちいいい♥」
「おらっ！もっと糞貯まってんだろ！ケツに力こめろ！」
「ひやぁい…♥ふんぐううううう♥」
ぐぃ
ぶる
モリ



「出りゅううう♥」
「うぉっおおっ!?なんだこの量ｗ」
「やば…ｗ」
はー
はー
ぐぃ
ぶる
栞の肛門からおびただしい量の糞がひり出されていく。
「高橋のちんぽがもう糞で見えねぇなｗ」
「うんこおうんこうんこおお…♥うんこでイくぅ脱糞アクメきちゃううう♥」


大量の糞を一気にひり出して
栞の腹は萎んでいった。
「あんっ…イぐ♥
排泄…すごい…い…♥」
「一気にでたなw」
「栞の便秘糞に包まれて
ちんぽもあったけぇ～
げほっ…匂いはひでぇけどw」
「ったく、こいつの糞で
器具庫の床が糞まみれじゃねぇか笑」
「こいつが汚したんだから
こいつに掃除させようぜ～笑」



先輩たちは床にまき散らされた栞の糞を掴み取った。
「うっわ…なんだこの大きさ。野球ボール以上だな〜」
「お、その糞の中にトウモロコシあるな〜」
「んぁあ…だめだよぉ…うんち見ないでぇ…♥」
「おら、田所！出した糞を掃除しろ」
「わ、私がですか…あ♥」
「マネージャーだろ？器具庫の衛生管理も立派な仕事だぜ〜？てかお前の糞だろ！」
あ♥
モワ
モワ〜〜〜


牧原は栞のリードを引っ張り
足元に引き寄せた。
「きゃんっ…♥」
「よし、田所！
口を開けて舌を出せ！
お掃除したいだろ？笑」
「ふえぇ…？♥
はい…お掃除したいですぅ♥
こ、こうですか？」
栞は牧原を見上げながら
だらしない舌を垂らした。


すると、牧原は
手につかんだ栞の糞を
栞の眼前に近づけた。
「きゃ…げほっ♥
先輩…それ私のうんこぉ…♥」
「お掃除するんだろ？
なら、お前のその口で
全部飲み込めよ」
「うんこ…食べるんですか…？♥
そんな…ほんとに？」
「自分で出した糞だろ？笑
お前の口便器で
汚物処理すんだよｗ
おら、口開けろ！」
ぶる


栞は眉をしかめ
ぷるぷると舌を震わせながら
舌先をうんこに近づけていく。
「いいぞ～
いやらしい口便器の中が
しっかり見えるぞ～」
「ごほっ…げほ…♥
うんこ臭いですぅ…う♥」
「よーし、田所。
うんこ食べたいだろ？
ちゃんとおねだりするんだ」
「ふぇ？…ひやい…♥
栞はぶりぶり排泄アクメして
糞尿で床を汚してしまいました…
罰として…私のお口便器で
うんこ綺麗にさせてくだしゃい…♥」
「…えっぐ笑」
ぐい
モワ
ぶる



牧原は手に持った大便を
栞の口にぐいっと押し込んだ。
「うぐっ…げぇ…ごぼ♥」
「どうだ～田所！
自分の糞の味はぁ！笑」
栞は顔をしかめながら
口に含んだ糞を
味わっていく。
ぶる
「すげ～まじで
うんこ食ってるぜ、こいつ！」
「どろどおして…うぇ♥
うぇえ…吐き…そうお…♥」


「だめだ、飲み込め」
「ひゃい…ごっく♥
もぐ…もぐぅ…ごっくん♥」
栞は噎せながらも
口の糞を飲み込んでいく。
モグ～～
モグ
「げほっ…うぇ♥
全部食べましたぁ…♥」
「よーし、口を開けて
よく見せてみろ」
栞の口の中からは
汚物の匂いが漂い、
糞汁がどろどろと垂れていく。
「糞まみれで汚ったねぇな笑
だが全部食べたのか
えらいぞ～田所」
ぐぃ
ずる


「じゃあご褒美に おかわりをやろう」
「ひぎぃいいぃ♥ ぶほっうげぇ…ごほ♥」
牧原は栞の口へ 次々に糞を運んでいく。
「先輩…ごほうげっ♥ もう食べられにゃいよぉ…お♥」
「うんこ美味しいか～？田所！ まだまだうんこあるからな～ もぐもぐしろよ～」
「んんぐっ…うげ…もぐもぐ♥ なんだか…だんだん…うぇ 美味しく感じてきましたぁ…♥」
「まじかよ笑」



「……げぇ……うげ……♥」
『ゲぇぇぇぷふぅ♥』
「うっわ、うんこゲップかよ〜 臭すぎ〜口から 放屁してるみたいだわ〜」
栞は大量に飲み込んだ糞で悪臭ゲップを繰り返していく。
「臭いっすねぇ〜 こっちにまで匂ってきますよ」
「あぁ〜興奮してきた！ 田所、そのまま俺のちんぽをパイズリしろ！」


牧原はズボンを脱ぐと
栞のおっぱいにちんぽを突っ込んだ。
皮が剥かれた亀頭には
チンカスがびっしりとこびり付いている。
「きゃっ…げほっ♥
先輩のおちんちん
チンカスすごいよ…♥」
ぷ〜ん
「お前のために
洗わないでおいたんだぜ〜
その口便器で
チンカスも掃除しろ!w」
「ひゃい…うぇ♥
お掃除しますぅ…げほ♥」
栞はうんこ臭い吐息を漏らしながら
牧原のチンカスちんぽに口を近づけた。
ぶる


「ぶぼおげええ！」
すると、栞は噎せ返り、口から汚い液体をぶちまけた。
「うわ！こいつ！ゲロ吐きやがったw」
「げほっげほっ♥ごめんなひゃい…げほ！ちょっともどしちゃいましたぁ…」
栞のゲロが牧原のちんぽにかかると、チンカスの匂いと混ざり鼻が曲がるような悪臭へと変貌する。


「お前のゲロでぬるぬるだわw
罰として残ってる糞も使って
俺のちんぽを気持ちよくしてもらうぞ」
牧原は糞の塊を栞に手渡した。
栞はゲロまみれのちんぽを咥えながら
うんこを受け取った。
「…げほっ…うぇ…
先輩…これ…
どうすればいいのぉ？♥」
あっ♥
「お前のそのおっぱいに挟んで
糞と一緒にパイズリすんだよ」
「おっぱいに挟むぅ…あは♥
はぁ～いい♥」


栞はうんこを谷間に置くと
そのまま糞をローション代わりに
パイズリを開始した。
「うぉおおっ！
糞とおっぱいで
ちんこが扱かれてくぜ～w」
「はむぅ…っぢゅ♥
うげっげほっ！
っぢゅるじゅるるぅ」
栞はゲロとチンカスと糞にまみれた
牧原のちんぽをフェラ愛撫していく。
「糞まみれパイズリとか
まじですげぇな笑」


「おら！先っぽぱっかじゃなくてちゃんと奥まで咥えて奉仕しろ！」
「ひやぃ…じゅぶぶぶ♥げほっ…うぇえ…うぷっぢゅっぢゅるる♥」
あぁ
ぷにっ
栞はおっぱいを激しく動かし、糞まみれのちんぽを口の奥まで咥えていく。
「あぁ〜気持ちいぜ〜生あったかい糞がこびり付いたチンカスをゴシゴシ擦っていくなぁ」
ぶる
ぶる


「あぁ～そろそろイキそうだ！
田所！お前の口便器に
精液ぶちまけてやるからな！」
「先輩のぉ…子種ザーメンっ♥
私の汚ったないお口便器に
ぶちまけてくだしゃい♥」
「おらおらおら！
汚ねぇ口便器の喉奥
しっかり開けろよぉ！
この糞女っ！」
「おぶぼぼぉおおお♥
うんこまみれちんぽで
お口イかされちゃうううう♥」
ずる
ずる



「おらっ飲め！」
「ぢゅげえぶぼお♥」
栞の口の中に
小便まじりの
黄みがかったザーメンが
どぷっと吐き出されていく。
それはさらに悪臭を加速させ、
栞の口に充満していく。



「げほっ…うぇええ…ごほ
いっぱい…ザーメンでてりゅ♥」
「おら！尿道に残ったのも
吸いだして綺麗にしろ」
栞は尿道に残ったザーメンを
ちゅるちゅると吸いだしていく。
「うぇえ…げほ…
っぢゅるう…っうぇえ…
もぐ…うぇえ…っぷぅ♥」
糞と交じり合い
茶色く濁った精液を
栞はごくごくと喉を鳴らし飲んでいく。


「あ…らめ…え♥
うげえええええええ♥」
栞はゲップをかますと
チンカスまみれの舌を垂らしながら
口から糞を吐き出した。
「おいおいw
何糞吐いてんだよw
ちんこがまた
汚れちまったじゃねぇかw」
「ごめんなひゃいい♥
嘔吐しちゃいましたぁ…あ♥」
その後、
栞はうんこが大好きになった。


日回裏
トイレの壊れた合宿で…


とある連休。
俺たち野球部は強化合宿で
山の上にある合宿場にきていた。
しかし、そこでアクシデントが起こった。
「先輩っ！大変です！
合宿場が断水して
水が全部出なくなりました！」
「なに！？
それまずくね？」
「監督が言うには
直るにしても合宿終わる頃みたいで…
つまり…合宿中はずっと断水っすね…」
「まじかよ…練習になるのか？」
「まあペットボトル飲料はあるが…
そうか…便所が使えないな」


「便所のことは心配するな。さっき田所から申し入れがあった」
「申し入れ？なんだ、田所」
「あの…みんなが良ければ…私を便器として…使っていいよ…♥排泄したもの…全部飲むから」
「まじで？笑」
「マネージャーがそう言うなら使ってやらなきゃな〜ミ」


栞は合宿中、文字通り俺らの肉便器となった。排泄をする時は栞の好きな穴に排泄する。
「あぁ〜小便漏れそう！栞、穴貸せ！」
「ひやぁい…♥おしっこくださぁい♥」
「口でもケツでもまんこでも排尿ＯＫとは…笑、最高の便器穴だぜ」
「じゃあ今日は〜まんこに出すぜ笑」



モワ
俺はちんぽの先をまんこに入れ
そのままじょろじょろと排尿を始めた。
「あぁ～まんこに包まれながら
小便すんの気持ち～」
「あぁんんぁ♥
高橋のおしっこ
あったかぁ～い♥
お腹にいっぱい
出てるよぉ」
「おい、高橋。
もっと奥で出せ！
床にこぼれてるぞ！！」
俺は小便をしながら
さらに奥にちんぽを突っ込んだ。




モワ
じょろろ
「あぁ～小便止まらないっす笑」
俺の小便は
子宮の許容量を超え、
ぷしゃ～とまんこから
逆流した。
びぃ
ぶる
「おぢっご…っ♥
中に出されて
イっく…ふんぐぅ♥」
あ♡
「うくはは！
身体びくびくさせて
イってやがるな〜」
「まんこ痙攣して
残尿も全部絞られるぅ〜」


片岡は小便まみれになった便所の床に
栞の身体を押し倒した。
「きゃん…♥
あんっ…床冷たいよぉ…」
あっ♥
「今度は俺の番だぜ～
お前の、その
いやらしい口に
小便飲ませてやる！
我慢してたから濃いぜ～」
「ひやぁい…♥
私のお口便器に～
先輩の我慢おしっこ
くだしゃいい♥」
ぐい
ぷる
モミッ



片岡は栞の顔の上にしゃがみ、金玉を鼻に押し付けた。
「ひやっ先輩の金玉ぁ♥すうはぁすうはぁ♥」
「先輩の金玉ぁ…あ おしっこの匂いがするぅ♥」
「我慢してるときにちょいとちびったからなぁ 小便の蒸れた香りが たっぷりと染みついてるぜ～」
ぐい


「おら！このまま咥えろ！」
「はい…うぢゅるぅ♥
はむぅっちゅれろれろ♥」
栞は顔に片岡の股間を押し付けられたまま
ちんぽを咥えた。
「あぁ～あったかいぜ～
口便器にちんぽ入れると
すぐに小便したくなるな」



「あ〜小便でるでる笑田所お！全部飲めよぉ！」
「あぶぶうじゅぼぼ♥ごく…ごく…つぢゅる」
あ
じょろろ
栞の口の中に片岡の小便は出されていく。勢いのあるそれを栞は喉を鳴らしながら飲んでいく。
「すげぇ…出した瞬間ごっくんしていくぜぇ俺の小便は美味いか〜？」
「先輩のまっ黄色おしっこぉ濃くておいひぃよぉ…じゅる♥」
モミ
ぐい
ぷる


「ああ～気持ちいいぜ～
亀頭舌で扱いちまう！
おらっおらっ！」
片岡は栞の舌に亀頭を押し付け
前後にゴシゴシ扱いていく。
「あんぶおおぶぼ♥
つぢゅぶっちゅごっくん♥」
「やべ精液もでちまうぜ」
「いいですよぉ…ごく♥
お口便器に先輩のザーメン…
排泄してくだしゃいい♥」
モグ


「射精るぞ」
「じゅぶぼお♥」
片岡のちんぽから精液があふれだし、栞の小便まみれの口をどろどろの液体で上書きしていく。
「ごほっ…じゅる♥
先輩の生臭っさい精液
いっぱい…お口に広がるぅ♥」


片岡がちんぽを引き抜くと
栞は精液でどろどろになった舌を
いやらしく垂らした。
「ぷはぁ…あ♥」
「ふぅ～でたでた。すっきりしたぜ～」
「じゃあ練習戻りますか～」
「んだな。田所、合宿終わるまでしっかり便所当番頑張れよ～ミ」
「ひやあい…げほ♥」



数日後。
俺と牧原は練習の休憩で
栞のいる便所へ足を運んだ。
「よお栞」
「高橋と牧原先輩♥
おしっこですか？」
「うへぇ小便臭さw
お前めっちゃ
アンモニア臭するぜ？」
「すみませぇん♥
さっきもいっぱい
おしっこ飲ませてもらいました～♥」
「別の用があるんだがな…
とりあえず俺も小便するわ」


俺は小便器の前に立ち、
ちんぽを構えた。
「ちょっと高橋？
断水中だから
小便器の水
流れないよ？」
「わかってるっての。
だからお前の穴に
出してんだろ？
でもこの汚ったない小便器に
小便ためたら
この便器の尿カスが浸み込んだ
汚ったねぇ小便ジュースが
できそうじゃね？笑」
「ふえ？♥
小便器におしっこためて
それを飲めってこと？」
「そうそう笑
だから小便手伝え」


「う、うん♥
じゃあおちんちん触るね♥」
俺は栞にちんぽを握られ、
まるで介護中の患者のように
ちんこの先を便器に
向けさせた。
ぶるる
「んっ…あぁ…あぁ～～～
出る…あ～小便出るぜ～」
「高橋のおちんちんが
ぶるって震えてるぅ♥
尿道から黄色いおしっこ
まき散らしてるよぉ…♥」


栞は手を伸ばすと
おしっこを触りだした。
「高橋のおしっこぉ♥
わぁ～人肌で
あったかぁ～い♥」
「なに人の小便
勝手に触ってんだよ笑
この変態女っw」
「すごいすごい♥
小便器の中に…
どんどんたまってくよぉ♥」



「すっげ…げほ!!小便器臭っせぇなw」
「すうはぁ…ごほ♥こびりついた尿カスが溶け出してるぅ♥」
ぬる
プシャ～～
小便器にたまった尿は尿カスで濁りだし、便器に付着していたチン毛が水面に漂っている。
「おら！栞、こっち向け」


俺は腰の角度を変えた。
「おっとお笑 狙いがずれたな≧」
「ひゃっ♥ じゅぶぶぶぶう♥」
ぷる
俺の小便が栞の顔で飛沫をまき散らす。
「おしっこぉ…んぁ♥ いっぱい…かけられてるぅ♥ んんぁ…あったかぁい♥」
モワ


「高橋のおしっこお…いつもより生臭いよお♥ごくっごくぅ♥」
「ふぇ～出る出る やっぱお前にかけるのが一番いいわ笑」
琹は上半身を俺の小便まみれにしながら舌を垂らし飲尿していく。
「高橋の膀胱のおしっこ残さず私にかけてぇ♥」
「おらっ全部飲め！」
ぷしゃ～～


俺はちんこをぶるぶる振り
小便を出し切った。
「ふう～出た出た。
たくさん出たぜ～」
「いっぱい
飲んじゃった♥」
「おいおい、まだ
飲むものがあるぜ～？
小便器にたまった
尿カスカクテルだ」
「これを…飲むんだね…♥
とっても汚くて…
美味しそうだよぉ…じゅる」


栞は小便器に顔を近づけると黄ばんだ便器を舌で舐め始めた。
「れろ…ぺろ…んんっ♥あ…ここ…便器のふちに高橋のおしっこ飛んでるよ？」
「げほっ…ごほごほ！ツンとした匂いが…げほ！臭すぎてクラクラするぅ♥」
「おら、ケツ突き出して便器に顔突っ込んで舐めろ！」
あっ♥
ずる
モワ


栞が小便器を舐めてる隙に俺と牧原はトイレにバケツを運び入れ、栞の足元に置いた。
「よいしょっと…うぇ…まじで汚ったね笑」
「重いっすね、これw」
栞もその悪臭に気づき、振り返った。
「臭っさ…♥え…なんですか、そのバケツ…」


「あ？俺らメンバーの数日分のうんこだよ、うんこ！便秘のお前と違って俺らは毎日うんこするの！ｗ」
「ふぇええぇ！？みんなのうんこぉ…！？♥」
「うぇえ～キモっ笑 なんで俺が野郎の糞を掴まなきゃならねぇんだ」
「仕方ないっすよ…俺らじゃんけんで負けたんですから笑 楽しみましょ？ｗ」
「このバケツの全部？♥ え…そのうんこ…どうするんですか…？」

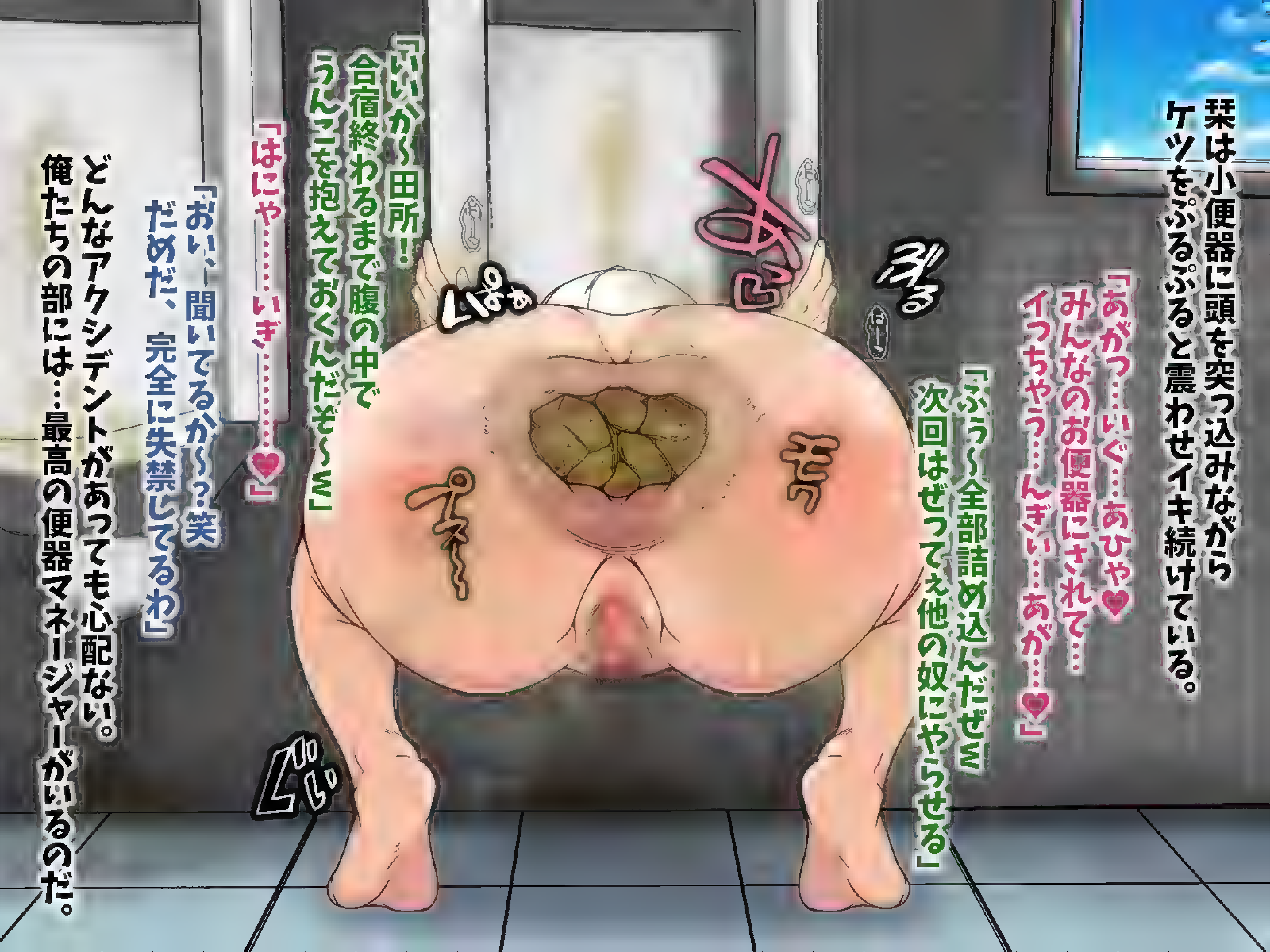

「はぁ？どうするって便器に突っ込むに決まってんだろっ！ｗ」
「んぎゃあああ♥」
メンバーの糞が栞のケツ便器にフィストでぐいっと押し入れられた。
「んんぎぃいい♥みんなのうんこがぁあ私のお腹に…入ってきてるぅう」
「栞が便器になってくれて助かったぜ～下手すりゃ野糞祭りだったからなｗ」
「ほんとほんと笑便器があって助かるぜ～」
ずる
ぐい

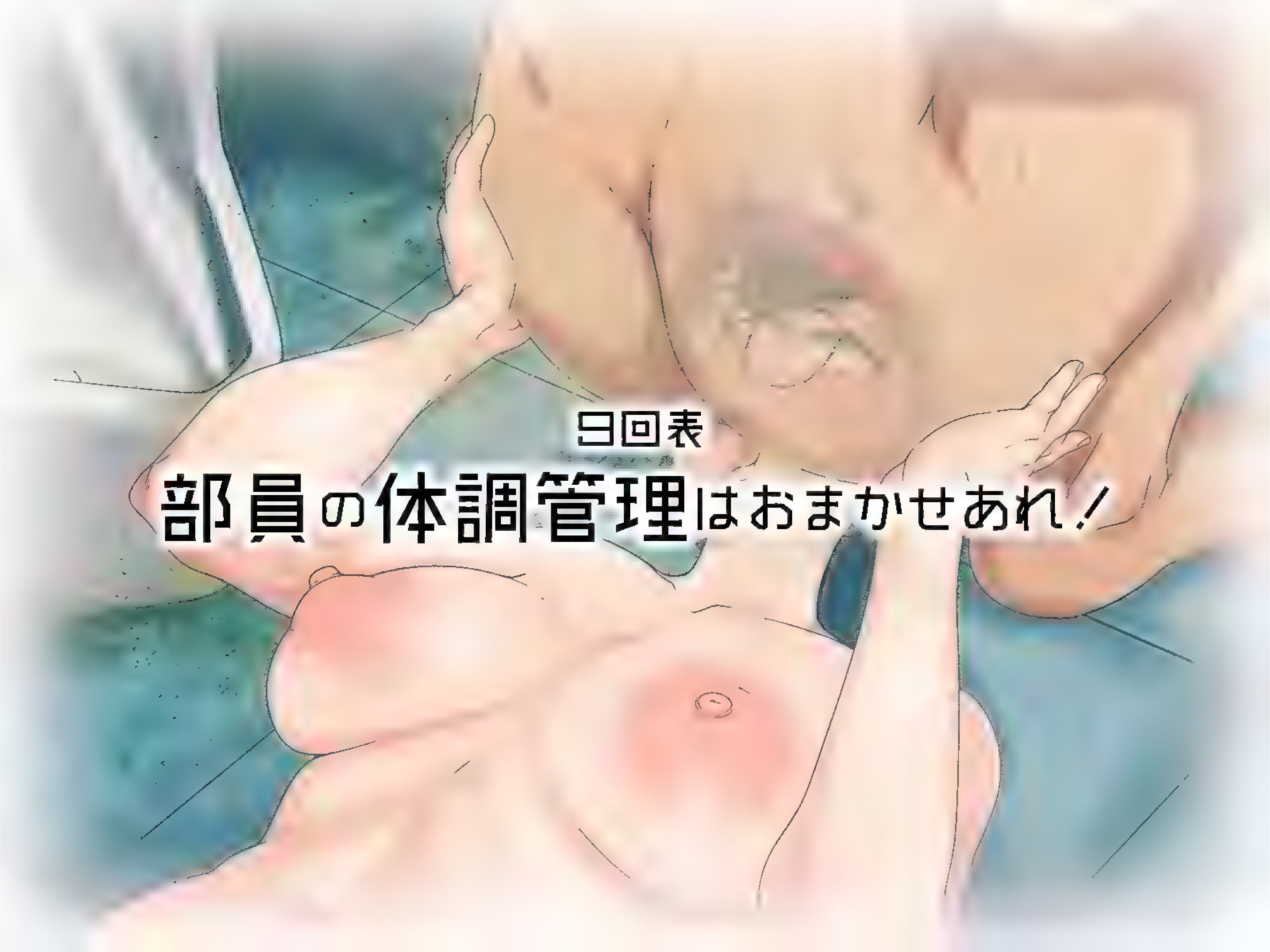

「何してんだ、栞！
便器の小便も飲むんだよ！」
「ひやあい…いぐう♥」
「小便飲みながら
ケツ便器穿られて
イキまくってるぜ、こいつっ」
あ♥
「んにぎいい♥
っごく…ごくごく…ぶふっ
おじっごおお…濃いよお…
おぢりぃ…深いいいい♥」
「メンバー分の糞だからな～
めっちゃ量があるぜ～」
ずる
ぐい


「ほら、栞！小便全然飲めてないぞ？顔突っ込んで一気に飲め！」
俺は栞のケツを強く叩いた。栞は貯まった小便に顔を突っ込み勢いよく飲み始める。
「ひゃい…うっぷふう♥ぶぼぼ…ごく…ぶふふうぇえ」
ぶるっ
あっ♡
モワ〜〜っ
モワ
「ったく糞の量が多すぎるぜ！休憩時間終わるっての」
「仕方ないっすね…いつものようにやっちゃいますか！笑」
「んだな笑」



俺と牧原は2本の腕を近づけ、琹のケツ便器へ同時に腕を挿入した。
「おらっ！部員たちの糞を奥に押し込むぜっ！」
「ケツ便器にたくさん突っ込んでやるからな〜嬉しいだろ？琹ぃ」
「ケツ便器イぐぅ♥」
「あぶぼぼぉ♥みんなの…うんこで満たされてぇお腹…苦ぢくて気持ぢいいいい♥」


栞は小便器に頭を突っ込みながら
ケツをぷるぷると震わせイキ続けている。
「あがっ…いぐ…あひゃ♥
みんなのお便器にされて…
イっちゃう…んぎぃ…あが…♥」
「ふぅ～全部詰め込んだぜw
次回はぜってぇ他の奴にやらせる」
ぷる
ぷる
「いいか～田所！
合宿終わるまで腹の中で
うんこを抱えておくんだぞ～w」
「はにゃ……いぎ……♥」
「おい、聞いてるか～？笑
だめだ、完全に失禁してるわ」
どんなアクシデントがあっても心配ない。
俺たちの部には…最高の便器マネージャーがいるのだ。


9回表
部員の体調管理はおまかせあれ！


とある大会当日。
俺たちの相手は強豪と名高い
出歯亀学園だ。
「今日の相手は毎年全国出場する
名門中の名門だ、気合い入れろ！」
「今までの相手とは
格が違うってことっすね…」
「だが…負けるわけには
いかない試合だぜ…」
「いいか！作戦を伝える！
…ん？おい！
片岡はどうした！
あいつのバッティングにかかってるんだぞ」
「なんか腹痛いって言ってたな。
さすがにプレッシャーすごいだろうな」


片岡は選手控室で
腹を抱えてうずくまっていた。
「くう…今日の相手は
あの出歯亀学園か……
テレビでよく見る超名門…！」
（監督が俺に期待しているのはわかる…
やれることはやるつもりだが…
さすがに…緊張で
手が震えるぜ…）
「あー緊張して腹痛てぇぜ…
朝から下痢で
ケツもヒリヒリするしよ！」
「あの…先輩…良ければ
先輩のお尻の穴…
私が癒してあげます…よ？♥」
声の主は片岡の腕を掴み、
選手用のトイレに片岡を引きずり込んだ。


片岡を便所に連れ込んだのは栞だった。
「おっと…あん？なんだ…田所じゃねぇか…俺のケツの穴を癒すって言ったか？」
「私のお口で先輩のお尻を舐めて試合に集中できるようにマッサージするんです」
「ぶほっ…！まじかよ…お前は本当にド変態で最高のマネージャーだな」
「は…はい…♥」
「じゃあ、すぐに頼むわ。試合までもう時間が無ぇからな」
「ユニフォーム脱いでください♥試合前に汚しちゃまずいです♥」


片岡は便所の床に寝そべった
栞の顔の上に腰を下ろし、
ケツの穴を口元に押し付けた。
「あ～この体制になると、
勝手に屁が漏れるぜ～」
「んんっ…げほっ…♥
先輩の…下痢屁
臭っさあいよお…」
「おら！ケツの穴癒してくれるんだろ！
さっさとその下品な舌で
マッサージしろや！」
ぐい


栞はビクビクと舌を震わせながら
片岡のケツ毛まみれのアナルを舐め始めた。
「はいぃ…♥はむぅ…ぅ！」
「俺のバッティングで試合が左右するんだ…
絶対失敗できねぇ…」
「先輩…っ♥
力を抜いてください♥
肛門がぎゅ〜って締まって
力んでるのがわかります…
リラックスです♥」
「ああ…そうだな…」
ぐい
ぷる


片岡は栞に言われた通り
緊張で力んだ身体を解いていく。
「リラックスリラックス～…
あーやべ……
このまま糞漏れちまうわ」
「ひゃいぃ…んんぁ…
いいですよぉ…ぶちゅる♥
先輩が出したいだけ全部ぅ…
私のお口便器に
ぶちまけてくださぁい…♥」
「うおぉ…あ～腹が
ぎゅるぎゅる言ってるぜ…
もう限界だわ…出すからなぁ！
口便器で受け止めろよ！」


『あ〜でるでる』
ぶりいいいいいびぢゅぢぃいいい！
けたたましい音を立て、
片岡のケツ穴から下痢が噴き出した。
「ぶぼぼおお♥
うげ…え…ごほ♥
つじゅる…うぇえ」
その下痢糞は
大きく開かれた栞の口の中へと
漏れず注がれていく。
「あぁ…すげ…笑
下痢便排泄気持ちいいぜ〜」


「あぁ〜まだ出るぞ〜
糞の塊も下りてきたぜ〜
お前の顔便器に全部出るっ！ミ」
片岡の排泄物が
栞の顔を埋め尽くしていく。
「んんぁぼお溺れ…りゅう♥
先輩のうんこで
溺れちゃ…んんぁあああ♥
うげえぇ…うぇ…ごほ♥」
「あ〜開放的で最高だ笑
お前の顔に糞ひり出すと
不安が吹っ飛んじまうぜ〜ミ」


「ふう～すっきりしたぜ～」
片岡が栞の顔からケツをどけると
そこには糞まみれの顔便器の姿があった。
「うんこで溺れえでぇ…イっぐ…うぇげほ♥」
モワ
モワ～～
ぐい
「くはは笑
我ながらすげぇ出たな。
サンキューな田所、
これでベストな体調で
試合に臨めそうだぜ～」
「ひやあい…い♥
がんばってくだしゃあい…うぇ♥」
栞は片岡の糞に埋もれながら
身体をびくびくと痙攣させ
絶頂していた。
ぷる


試合は順調に滑り出し、
強豪と互角の勝負を繰り広げていた。
「俺たちってもしかして強い？」
「押されてませんよ、俺ら！
勝てる試合です！」
「くぅ～しかし暑いぜ…
喉がカラカラだ…」
「良い調子だぞ、お前たち！
試合で全力が出せるよう
特製スポーツドリンクを用意したから
水分補強は怠るなよ！」
「あ～俺飲みたいっす！」



「田所ぉ！高橋にスポドリだ！準備しろぉ！」
「ひゃあい♥」
栞はケツの穴に蛇口を挿入した姿で俺たちの前に現れた。
「うぉお！？ｗなんすかこれ笑」
「冷たい水は試合中には非推奨でな。人肌のスポドリがベストな飲み物なんだ。田所がしっかりと人の体温に調整してきてくれたぞ」


俺は栞に空のジョッキを手渡された。
「はい、高橋♥蛇口をひねってそれにスポドリを注いでね♥」
ぶる
「おおありがとよ。よーし…じゃあこの蛇口をひねればいいんだな？笑」
「う…うん♥はやくひねってぇ…んぁもう…出ちゃいそお…んん♥」
ぐぃ



俺が蛇口をひねると、すごい勢いでスポドリがジョッキに注がれだした。
「でりゅううう♥」
「すげぇ勢いw こぼれちまうぜ？」
「んんぁあっ…♥ お尻…いっぱいぃ… じゃぶじゃぶ出るぅう♥」
「おいおい笑 田所！一度に出しすぎだぞ！」
ぶる
じぃ
ぷしゃ～～


監督は排泄中の蛇口を急に閉めてしまった。
「ひぎゃあぁ♥出てたのにぃ…ぃ…出ない…お尻出ないよぉ…」
「まったく笑 出すのが目的じゃないんだぞ！」
「んじゃこのスポドリはもらいます～ごくごく…うっ…生ぬるっ笑 それに…なんか臭っさw」
栞の排泄したスポドリはメスのエキスと腸液が溶け出し、下品な気分を醸し出す媚薬のような飲み物になっていた。


「おらっ！俺にもスポドリ出してみろ！
ケツ叩けばよくでるかな～」
片岡がケツを叩くと蛇口の隙間からスケベな音が漏れだした。
「おひり叩いちゃらめぇえ♥」
「おい、なんかすげぇ臭せぇけど…笑」
「蛇口ひねって確認してみようぜ～」
「先輩待って…っ♥今ひねられたら…っ♥」


片岡が蛇口をひねると
滝のように下痢便が
ジョッキに注がれ始めた。
「下痢糞でりゅ♥」
「おい、田所！ｗ
せっかくのスポドリが
下痢便になってるじゃないか！」
「ごめんなひゃい♥
お腹刺激されてぇ…っ
うんこと混ざっちゃったよお♥」


「はぁはぁふんぐぅぅ♥」
「おいおい笑 俺のスポドリどうすんだよ〜」
「代わりはあるから心配するな。田所…責任もってこれはお前が全部飲みなさい」
「ふぇ…？♥ 監督…まさか…この下痢便を…ですか？」
「当たり前だろう笑 相手チームに気づかれる前に急いで飲み干せ。お前らも手伝ってやれ」


俺たちは栞を死角のベンチに座らせ
下痢便ジョッキを
手に握らせた。
「ほら、栞！お前の下痢ジュースだ笑」
「うぅ…この量はさすがに…飲めないよぉ…お♥」
「仕方ねぇな～w じゃあこっちに小便注いでやるよ。それで流し込め」


牧原はもうひとつのジョッキに
黄色い小便を注ぎ入れた。
「ふぅ～試合中に
小便できて便利だな～w」
「うぅ…下痢便もぉ…
おしっこもぉ…
重たくていっぱぁい♥」
あっ♡
「おらっ！一気だ！」


栞は小便ジョッキを掲げ、口元へ運び飲み始めた。
「ごくっごく…うっぷ♥ 出したばかりぉお…んん 新鮮なおしっこだぁ…♥」
「おいおい、俺の小便ばっか飲んでどうすんだよw」
「その臭っせぇジュースをさっさと飲め！」
「うう…じゃあ…の…飲んじゃうよ…お♥」


「えいっ…んぐぅ…♥
うげえぇ…んぷぅ…ごほ」
栞は下痢便スポドリを
噎せながらごくごくと飲んでいく。
「うっわ…まじで飲んでるぜw
スポドリの味もすんの？笑」
「ううぇ…ごほっ♥
8割うんこの味ですぅ♥」
「そりゃいいなw
お前の大好物の
うんこの味だぜw
美味しいか〜栞！」


「美味ひぃ…ぐぶっ♥
げほっ…うぇぇぇ…っごうくん♥」
下痢便が蓄積され
栞の下っ腹が膨れていく。
ごきゅ
「ゲロ吐きながら
下痢便飲んで可愛いぞ～田所」
「残さず飲めよ～」
「ひやいっ…♥
っごくごく…うぇぇ…
っごくごく…んんぐ♥」
たぷっ

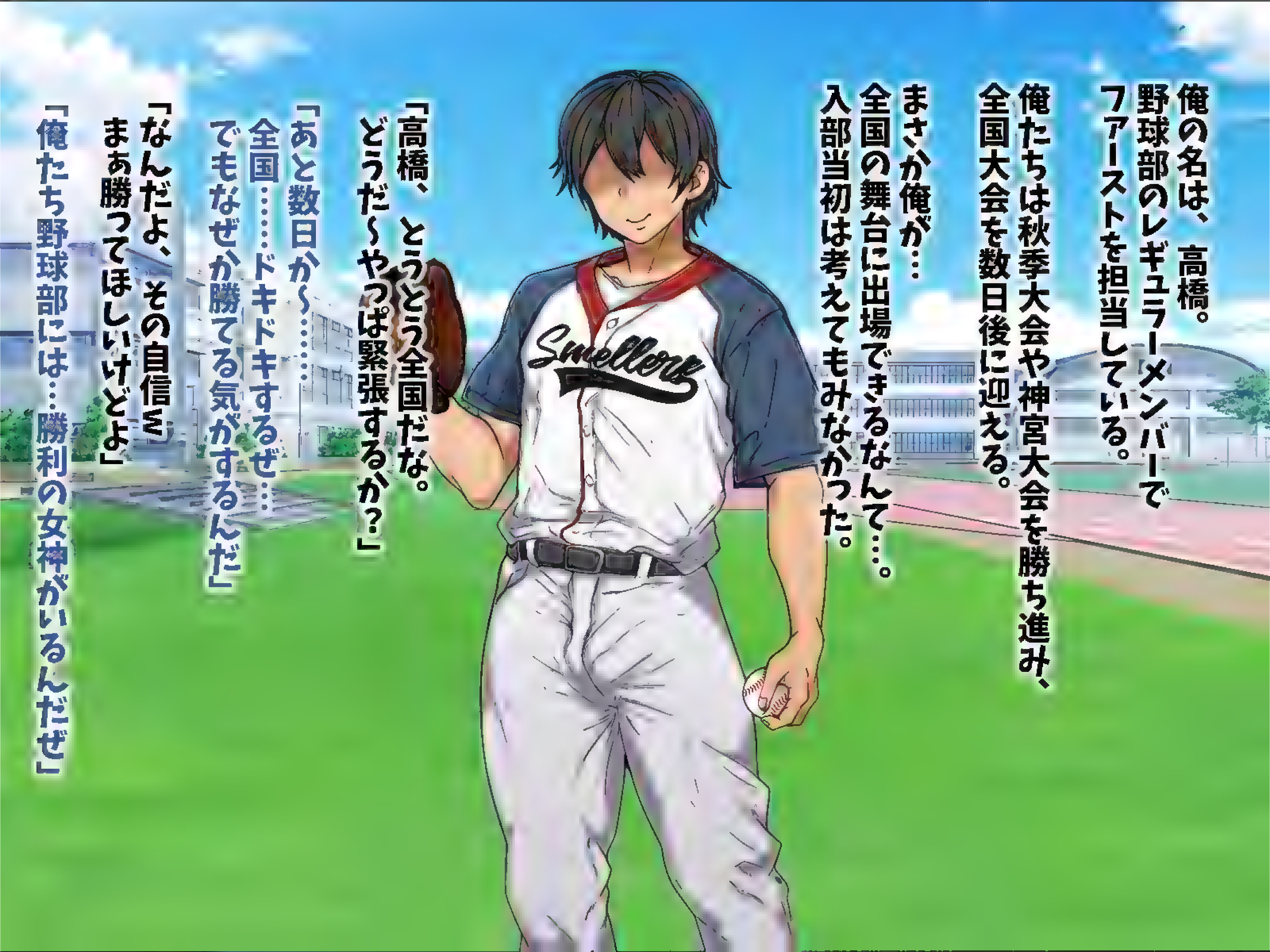


「全部…飲めまし…」
「だあっ…♥」
あっ
下痢便ジョッキを飲み干した途端、栞は鼻の穴から下痢を逆流させせた。
「うっわ…鼻から逆流させせやがったw」
「うへぇ〜これじゃあ鼻に下痢がこびり付いて洗うまで匂いが取れませんねw」
「田所ぉ！ちゃんとごっくんして口内を見せろ！」



「うごく…うう…飲めま—」
「ゲエぷふうごぼ♥」
菜は口を大きく開き、下痢便ゲップを周囲にまき散らした。
「ゲップ臭せぇw」
その後、スポドリを飲んだ俺は何かに覚醒したかのようにスーパープレイを連発し、試合を勝利に導いた。


9回裏
満穴ホームラン！我らが勝利の女神！


俺の名は、高橋。
野球部のレギュラーメンバーで
ファーストを担当している。
俺たちは秋季大会や神宮大会を勝ち進み、
全国大会を数日後に迎える。
まさか俺が…
全国の舞台に出場できるなんて…。
入部当初は考えてもみなかった。
「高橋、とうとう全国だな。
どうだ～やっぱ緊張するか？」
「あと数日か～……
全国……ドキドキするぜ……
でもなぜか勝てる気がするんだ」
「なんだよ、その自信w
まあ勝ってほしいけどよ」
「俺たち野球部には…勝利の女神がいるんだぜ」


そんな噂の女神は……
牧原とスケベプレイの最中だ。
「よーし、田所！
これはお前が昨日排泄した
便秘うんこだ」
あっ♡
ぐぃ
モゾ〜〜ッ
「私の…うんこぉ…昨日の？♥
ばっちぃですよぉ…んんぁ♥」
「まぁ少しカピカピだが
ローション代わりにには
なるだろうぜ〜」
牧原はしっかりとうんこを握ると
腕をまんこにあてがった。
ずる
ムリッ
モゾ


そしてそのまま、まんこに腕を押し入れた。
「おまんごっおお♥」
「よーし…まんこに腕入ったぜ～
このまま糞を膣の中に
塗りたくってやるからな～」
牧原はまんこの中で指を動かし、
糞を膣壁に塗りたくっていく。
「先輩らめぇえっ…♥
おまんこ…んんぁあぁ
うんちまみれになってるぅ♥」
「腕だけじゃやりにくいな…
よーしこのままセックスするぞ！」


「おらっ……!」
「んぎっいい♥」
まんこに牧原のちんぽがずぽっと挿入され、栞の糞がぐいぐいと奥に押し込まれていく。
「うぉ～お前の糞があるせいかいつもと違う感触だぜ～笑」
「うんごっ…押し込まれてぇ気持ち…いいよおおお♥」
ぐい
ぐちゅ
ずる


牧原がピストンをする度に栞のまんこから糞カスが舞い上がっていく。
「いぐっ…うんこおお♥」
「うおおおお～ちんこに糞が絡みついてどろどろで最高お…♥」
「先輩ぅ…んんぁああ♥そんなにおまんこ突かれたらうんこ…漏れちゃうよおおお♥」


「うんこ出ちゃう出ちゃううぅ♥
まんこにうんこ押し込まれながら
ケツからうんこ漏らしちゃううう♥」
「うへぇ～臭っさ笑」
「奥に一気に押し込むぞぉ～
おらおらおらおら！」
「おまんこぉおお♥
うんこでイくっ…いくのぉお♥」
栞は脱糞しながら
まん屁をぶっこいていく。


「おらっ抜くぞ!」
『らめぇえっ♥』
牧原のちんぽが抜かれた栞のおまんこにはうんこがぎゅーぎゅーに押し込まれ圧縮されていた。
「らめぇえ…おまんこー…イっちゃう…出ちゃうう…♥」
「出るか?出るのか、田所!しっかり見ててやるぞｗ」



『うんこ出産しちゃうぅ♥』
「うぉおっ…出たな笑」
栞はまんこからぶりぶりぶりぶりと
ぶっとい糞便をひり出していく。
まるで赤子を出産するかのように
息を荒げ、まんこを痙攣させていく。
「すっげぇ…エロいぜ…
一度でいいから
やってみたかったんだよな」


「ふう～満足したぜ～大会前最後か～なんか名残惜しいぜ」
「大会が始まるまではオナ禁してくださいね♥」
「あーそうだったw忘れるところだったぜ…監督からの指示なのに」
「もぉ…もう一度伝えておきますね♥」
「大会が始まる数日前から順番に日替わりで私と好きなだけセックスすること！終わった者は大会当日までオナ禁して大会当日に金玉を満タンにすること！」
「そうそう笑じゃあ…次は大会だな。頼んだぜ、マネージャー」
「はい♥先輩もですよ♥」


翌日は片岡と栞がマンツーマンでセックスをした。
「う…げほげほ♥ また下痢便プールでエッチするんですかぁ…？♥」
「またってなんだよ笑 俺はしてねぇよ～ いやぁ～興味はあるからよ…！ 大会前に試してみたくなったわけよ」


「しっかし…くんくん…なんか糞だけじゃなくてお前のその腋からも臭い匂いがするぜ？笑」
「きゃっ…これは…嗅いじゃだめですぅ♥」
栞の腋毛から腋臭の匂いも漂ってきた。
「嗅ぎたくなくても漂ってくるっての！おら！四つん這いになれ！後ろからハメてやるぜ」
「ひやあい♥」


ブポッ
ぶる
ぐい
「おらっちんぽ入るぞ！」
「あんんんぁ♥片岡先輩のちんぽがぁお尻に入ってきたぁ♥」
「うへぇ～糞汁まみれ～想像以上に臭せぇな～」
モワ
あっ
「うんこまみれで…お尻掘られるのぉ…気持ち…いいよぉ♥」
「このスカトロ女がっ！」
モワ～～

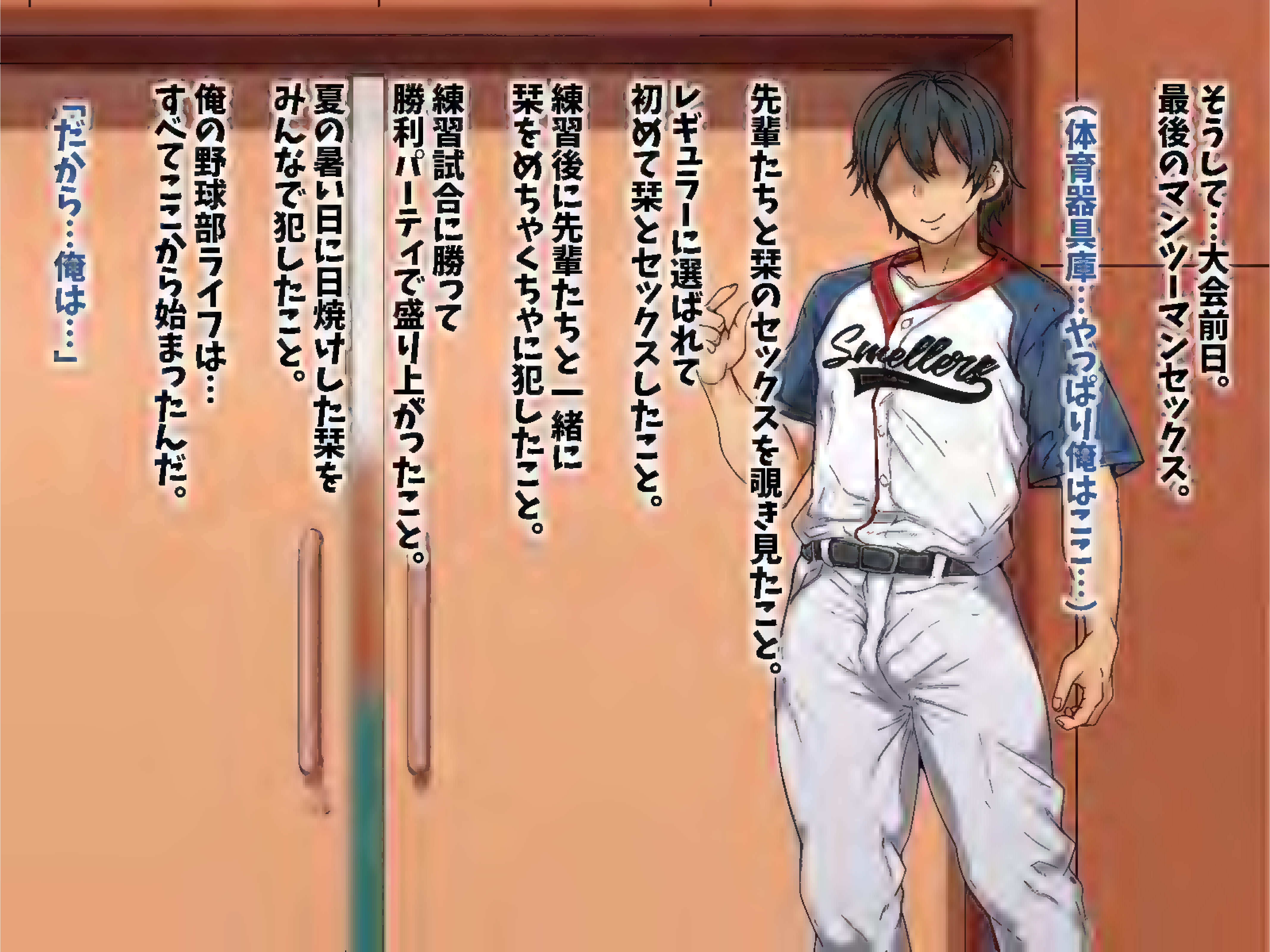

片岡はうつ伏せアナルに
ぐいぐいとちんぽを
押し込んでいく。
ぶる
「あぁ〜やっぱケツ穴は
ぎゅうぎゅう締まるぜ〜」
「腸壁カリで擦れてぇ
イぐっ…あひゃあ♥」
ぐい
あ゛
「そういえば
お前はうんこが
大好きだったなぁ！笑
これ…いや…これにするか」
片岡はプールに浮かんでいる
糞の塊を1つ選び取ると
栞の口元へ手を伸ばした。
モぐ
モぐ〜〜っ

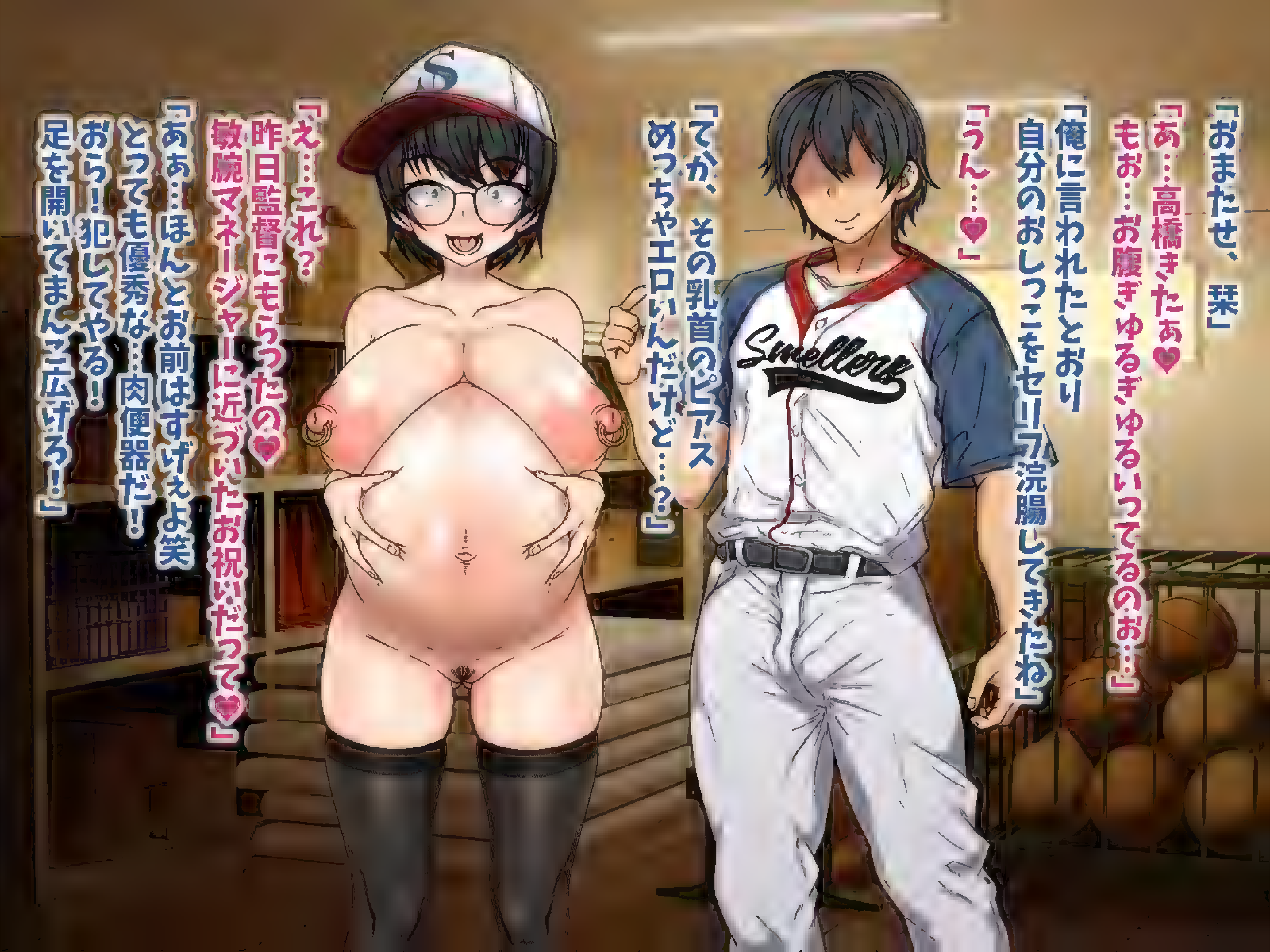

「おらっ食えっ≡」
「ひゃっ…んぐうぇ♥
うんごご…ごほ」
片岡は栞の口に
糞の塊をぐいっと押し込んだ。
ズボッ
ぐいっ
「くへへ笑
いいぞ～
アナルがさっきより
締まりだしたぜ」
「んぐうぇげほ♥
もぐ…もぐう…うぇ♥」


ぶる
ぐぃ
「どうだぁ田所ぉ！
糞に浸かりながら
糞を食わされ
糞穴を犯される気分はぁ！」
「あひゃ…あぁ♥
うんこのことしか
考えられにゃいよお…お♥」
「はぁ…はぁ…
下品すぎるぜ、
イキそうだ…」
お前…
「出してぇ♥
先輩のザーメン…
糞穴に注入してぇぇえ♥」



『糞穴イっくうっ♥』
『射精るぅ…』
びゅる
栞の糞穴にザーメンが注ぎ込まれる。
栞はお尻をびくんと跳ね上がらせた。
「ふぅ～出た出た笑
大会前に濃いのがいっぱい
ぶちまけられたぜ～
当日もよろしくな～田所」
「ひやぁい…げほ…♥
よろしくお願いしますぅ♥」


そうして…大会前日。
最後のマンツーマンセックス。
（体育器具庫…やっぱり俺はココ…）
先輩たちと栞のセックスを覗き見たこと。
レギュラーに選ばれて
初めて栞とセックスしたこと。
練習後に先輩たちと一緒に
栞をめちゃくちゃに犯したこと。
練習試合に勝って
勝利パーティで盛り上がったこと。
夏の暑い日に日焼けした栞を
みんなで犯したこと。
俺の野球部ライフは…
すべてココから始まったんだ。
「だから…俺は…」
Smellers



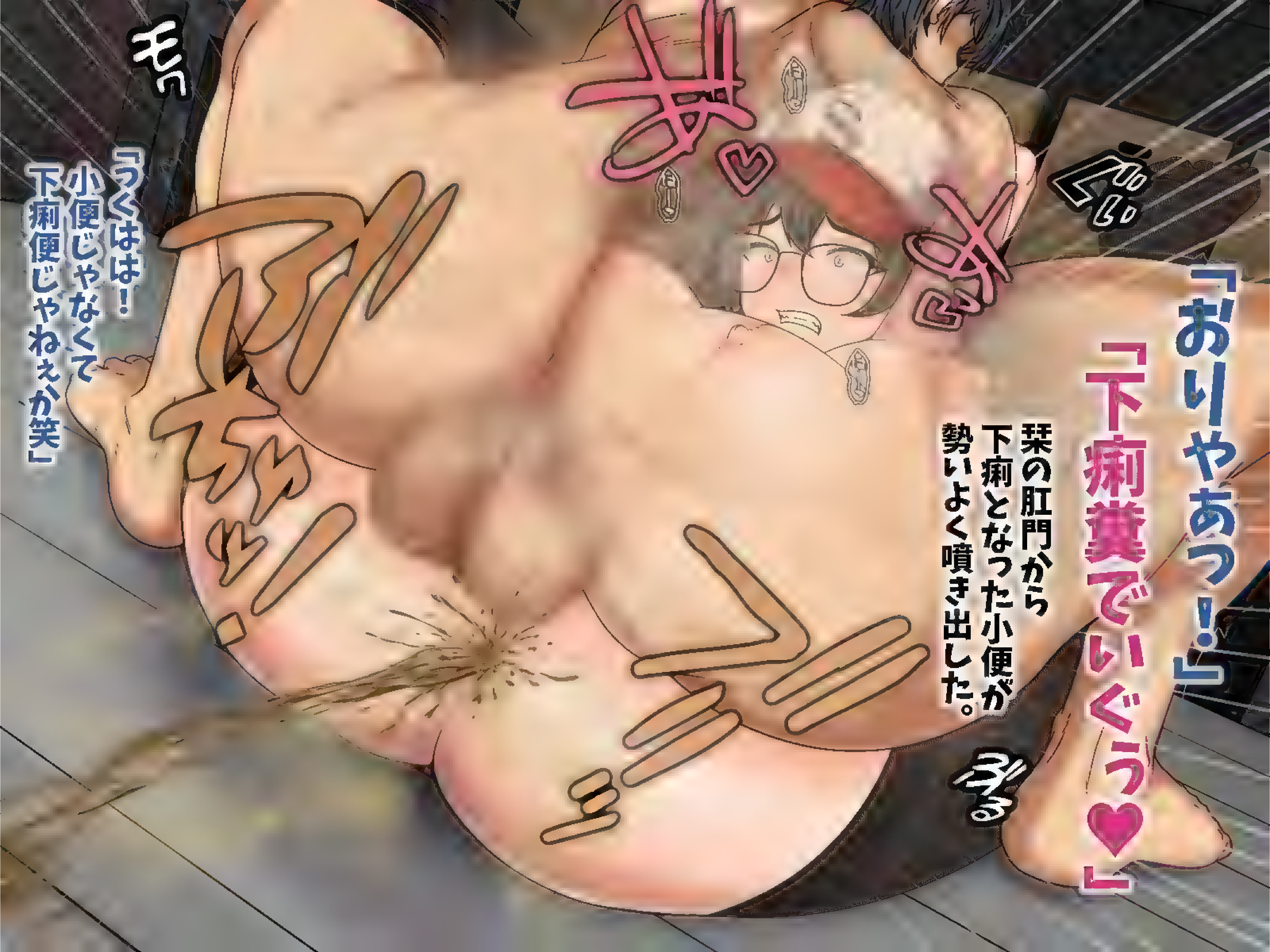
「おまたせ、栞」
「あ…高橋きたぁ♥ もぉ…お腹ぎゅるぎゅるいってるのぉ…」
「俺に言われたとおり 自分のおしっこをセリフ浣腸してきたね」
「うん…♥」
「てか、その乳首のピアス めっちゃエロいんだけど…？」
「え…これ？ 昨日監督にもらったの♥ 敏腕マネージャーに近づいたお祝いだって♥」
「あぁ…ほんとお前はすげぇよ笑 とっても優秀な…肉便器だ！ おら！犯してやる！ 足を開いてまんこ広げろ！」


栞はマットの上に身体を寝かせ、
足を大きく上げて
まんこをさらけ出した。
「きゃっ…ん♥
このポーズすると…
おなら漏れちゃう♥」
モゾ
ずる
ドドッ
「栞の下品な穴が
全部丸見えだよ」
俺は栞に上に跨った。

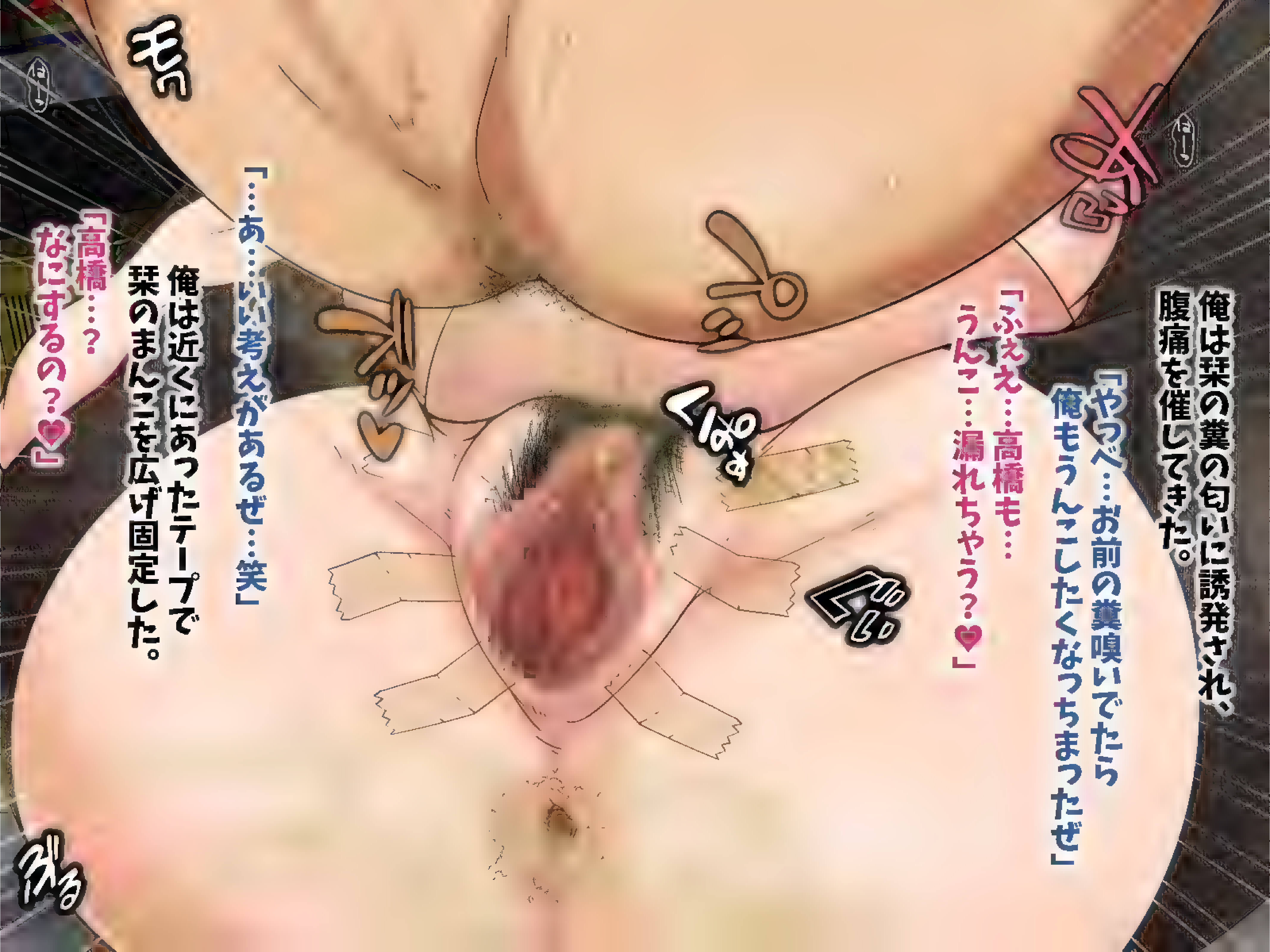

「挿れるぞ〜おらっ！」
ちんぽの先をまんこにずぶっと突っ込んだ。
「高橋のおちんちん入ってきたよお…お♥」
ずる
「お前と初めてセックスした時もこの体位だったな〜笑 覚えてるぜ」
「ふふ♥高橋の初めての相手が私なんだよね？♥」


「うっせぇな笑
このマゾまんこぅ！」
「ひぎぃいいい♥
高橋のちんぽ太いよおお♥
子宮に一気に届いちゃうぅぅ♥」
俺は栞に体重をかけ
子宮をぐいぐいと押していく。
「お腹ぁ気持ぢぃいいい♥
奥突かれるのぉ…最高おぉ♥」

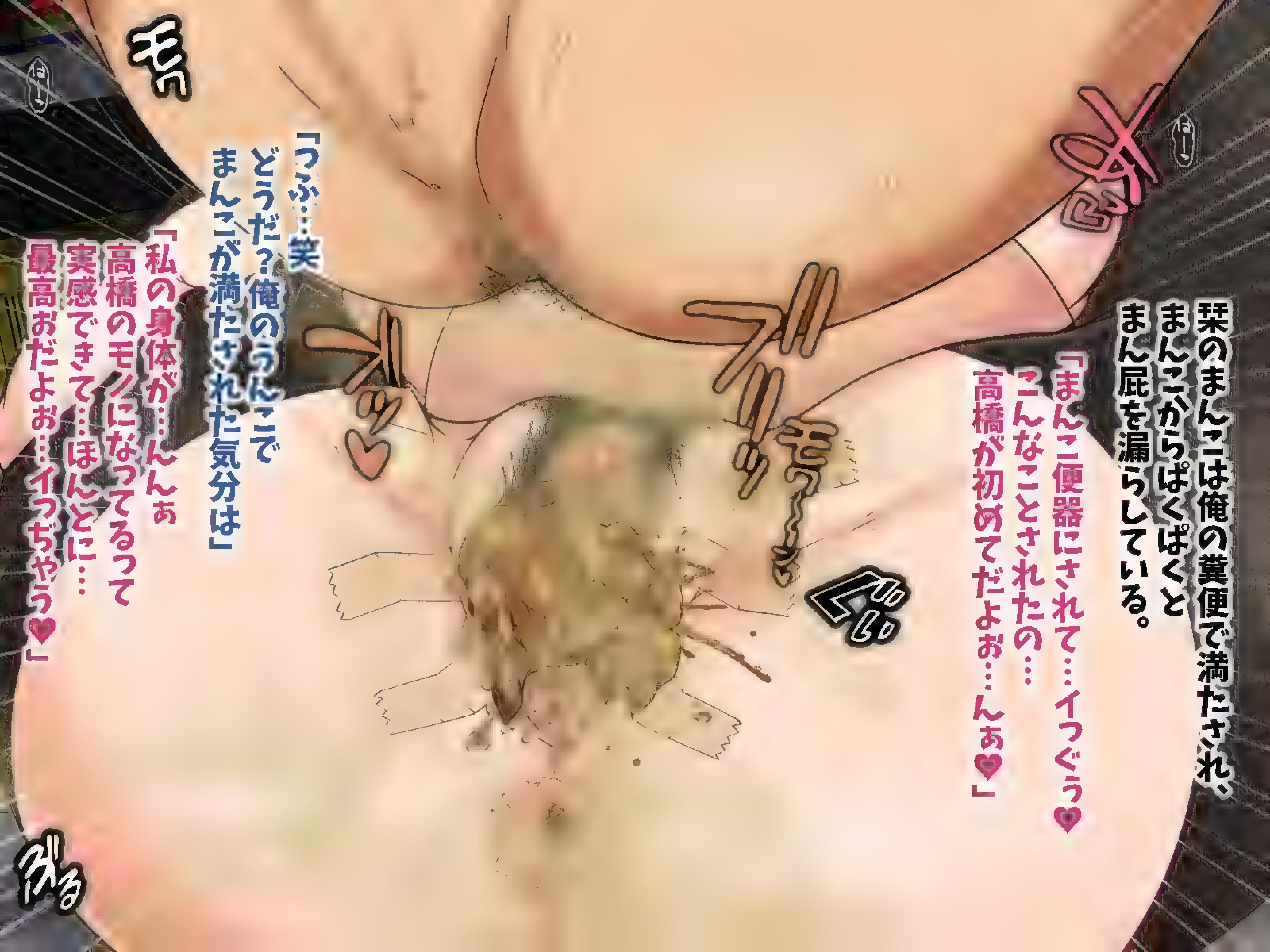

俺がぐいぐい子宮をノックすると
栞のケツからリズミカルな屁が漏れ出る。
「らめぇぇぇぇ♥
そんな激しくしたらっ♥
お腹のおしっこ出ちゃうぅ」
「出せよ！小便！
子宮ノックされながら
エネマアクメキメろ！」
「んににゃぁあ♥
出ちゃうぅ…お尻いい
子宮突かれながら
臭っさいのでりゅうう♥」



「おりゃあっ！」
「下痢糞でいぐう♥」
栞の肛門から下痢となった小便が勢いよく噴き出した。
「うくはは！小便じゃなくて下痢便じゃねぇか笑」


俺は栞の糞の匂いに誘発され、
腹痛を催してきた。
「やっべ…お前の糞嗅いでたら
俺もうんこしたくなっちまったぜ」
「ふぇえ…高橋も…
うんこ…漏れちゃう？♥」
「…あ…いい考えがあるぜ…笑」
俺は近くにあったテープで
栞のまんこを広げ固定した。
「高橋…？
なにするの？♥」


「こうするんだよ…
ふんぐううう！ｗ」
俺は大きく広がった栞のまんこへ
狙いを定め、糞をひり出し始めた。
「ふぇ？♥
え？え？なになに？♥」
「お前のまんこ便器に
糞をひり出してんだよ笑」
「えぇぇぇうんんん♥
高橋の…うんこがぁ…
私のおまんこにぃ…
入ってきてるううう♥」
あ♥



モワ
はーっ
はーっ
栞のまんこは俺の糞便で満たされ、
まんこからぱくぱくと
まん屁を漏らしている。
「まんこ便器にされて…イっぐぅ♥
こんなことされたの…
高橋が初めてだよぉ…んぁ♥」
「つふ…笑
どうだ？俺のうんこで
まんこが満たされた気分は」
「私の身体が…んんぁ
高橋のモノになってるって
実感できて…ほんとに…
最高おだよぉ…イっちゃう♥」
ブリリッ
ぶる


俺は糞まみれのまんこに
再びちんこを突きつけた。
「んぎゃあっ♥
高橋…何して…んん♥」
「俺は…もっとお前を
めちゃくちゃにしたい…!」
「俺の糞と俺のちんぽで
栞の大切なまんこを
めちゃくちゃに犯したい…!」
「あああぁ…きてぇええ♥」


腰を一気に落とし、
糞を押しのけながら
栞の子宮へとちんぽが入っていく。
「ちんぽぉお気持ぢいい♥
糞まみれまんこがぁあ…
ちんぽで掻き回されりゅうう♥」
「おらっおらっ！
このマゾ女ぁ！
気持ちいいかぁあ！
俺の糞とちんぽはぁ！」
「高橋いいよぉ…んんぁ♥
ちんぽ気持ち…いいよおおお♥」
あ♥


「おらおらおらぁ！
あ〜臭っせぇぇ…おら！
俺の糞の匂いが
まんこから取れなくなるまで
塗りたくってやるからなぁ！」
「してぇ♥してしてぇ♥
君の匂いが取れなくなるまで
ちんぽまんこで突いてぇ♥」
2人の呼吸は荒くなり、
栞の肛門からは
ガスの塊が噴き出していく。
「イキそう…出るぞ…栞ぃ！」
「私もぉ…出ちゃううう♥
ケツいぐ…脱糞くりゅううう♥」



「射精るぅぅ!」
「イっぐぅぅぅ♥」
俺は子宮の奥に
糞まみれのちんぽでキスをしながら
どぷどぷどぷと濃い精液を注いでいく。


栞のアナルからは大量の糞便が排泄され、まんこから溢れ出た俺の糞と混ざり悪臭を漂わせていく。
「はぁ…はぁ…いっぱい…出た…はぁ…」
「いぐぎぃ…いぐ♥あったかいの…いっぱぁ…い」
「栞…お前はほんとに…最高のマネージャーだよ…笑」
ぶる
モリ



まんこからちんぽを引き抜くと
栞の尿道から勢いよく小便が噴射した。
「すげぇよ、お前…笑
お前のおかげで
負ける気がしねぇわ」
「…あひゃっ…♥
全国大会もぉ…んんぁ…
頑張ろうね…♥」
「あぁ絶対勝つぜ」
そうして
俺たち野球部は
さらなる躍進を
繰り広げた。
そんな俺たちを
陰で支えているのは…
勝利の女神…田所栞だ。
おしまい♥


https://www.mushroom-mall.com
@shioiri_numa
うち
野球部の地味子
CGノベル
マネちゃん
~汚いプレイでもなんでもしてくれるってマ?~
＊この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。
＊作品の評価・レビュー・ご感想をいただけると励みになります


栞 立ち絵
◆黒髪ショート
◆黒縁メガネ
◆野球帽
◆表向きは無口で地味目なＪＫ
◆野球部の女子マネージャー
◆巨乳&敏感乳首
◆青姦即ハメＯＫ
◆イラマごっくんＯＫ
◆中出しＯＫ
◆ケツハメＯＫ
◆セックス依存症
◆匂いフェチでチンカス好き
◆臭っさい金玉を舐めるのが好き
◆排泄管理をされて喜ぶマゾ
◆おならや大便排泄でイク変態女


部員 立ち絵
ピッチャー
牧原
◆◆◆
女の膣内に小便をするのが願望
飲尿モノのAVを見漁っている
痰がたまりやすい
キャッチャー
片岡
◆◆◆
腹を下しやすい
ケツにハメるのが好き
体臭を嗅がせるのが好み


部員立ち絵
監督
鬼頭
◆中年エロオヤジ
◆中年親父の臭いちんぽをしゃぶらせるのが趣味
ファースト
高橋
◆主人公
◆スカトロフェチ
◆排泄管理や放屁プレイなど栞を変態プレイで調教する

あとがき

読了おつかれさまでした♥

今作もおよそ600ページのボリュームとなりましたが、
各々お気に入りのシーンやシチュエーションはありましたでしょうか？
栞ちゃんを好きになってもらえたら描いたかいがあります♥

以前より物語を章に区切って展開させていましたが、
今作では野球にちなんで1回表～9回裏という
全18章の大ボリュームとなりました。
我ながら少し長すぎる気もしますが…
章毎に少しずつお読みいただいて、
気に入った個所をループしていただくのがおすすめです♥

今作では3D背景素材を多用させていただき、
ダイナミックな構図のエッチシーンがたくさん描けました。
アオリ構図や俯瞰構図は2Dの背景素材がほぼ無いため
今までは無理やり用意していたのですが…
今回は体育器具庫やグラウンドの背景が3D素材になっているので
納得いく仕上がりになりました♥

あとは「うんこ」の表現。
こちらも描画ソフトのフィルター処理を用いて
おならやうんこに残像効果を適用することで
勢いよく糞尿を出している様子をお届けできるようになりました。

今後も読者の方に楽しんでいただける作品を目指していきます。

Ci-enなどで進捗状況を更新していますので
フォローやいいねをいただければ幸いです。

それでは、またね♥

マッシュルーム商店街　汐入ぬま